

目次

記事・タイトル		
梅雨の花ツユクサ		7
水辺を彩る濃緑の葉と黄色の花 - コウホネ -		8
炎天下の畑地でもたくましく生きる - スペリヒユ -		9
武家の家紋となった田んぼの雑草 - オモダカ -		10
幼き日のママゴト遊びの懐かしい草 - イヌタデ -		11
皮をむかれた因幡の白兎を癒した - ガマ -		12
アメリカからやってきた要注意な植物メリケンカルカヤ		13
寒い時期から小さな可憐な花をつける - ノミノフスマ -		14
早春の野辺を彩るコバルトブルー - オオイヌノフグリ -		15
田んぼや水路につやのある葉を拡げる - タガラシ -		16
春の風物詩であるツクシの正体は ～スギナ～		17
春の陽を浴びて金色にきらめく野辺の花 ～ウマノアシガタ～		18
日陰に見られる独特のにおいを持つ薬草 ～ドクダミ～		19
春の七草で知られるこの草の花を知っていますか ～セリ～		20
空き屋や休耕田を覆い尽くすほど旺盛に生育するこの草の正体は ～カナムグラ～		21
夏から秋にかけて田の畦や水辺に揺れる清楚な花の正体は ～シロバナサクラタデ～		22
刈田に見られる柔らかく海草のような草の正体は ～ミズワラビ～		23
秋の野辺でいつの間にか衣服にくっついているあの実の正体は-ヒナタイノコヅチ-		24
晩秋の野辺にたたずむ孤高の草姿 -ワレモコウ-		25
面白い名前の草花たち(その1) - タコノアシ -		26
一番身近な"春の七草"は効能たっぷり -ナズナ-		27
ヨーロッパからやってきた早春の日だまりに咲く可愛い花- オランダミナグサ -		28
幼き頃かじったあの懐かしい酸っぱい茎の正体は -スイバ-		29
遠い昔、ムギとともに渡ってきた馴染みの春の七草 ～コハコベ～		30
暑さの到来とともに藪の中に咲く八重咲きは憂いを忘れさせる花 ～ヤブカンゾウ～		31
古くから繊維が利用されてきた身近な有用植物 ～カラムシ～		32
夏の水辺に揺れる特徴的な葉のあの植物は救荒植物 ～ミゾソバ～		33
うだるような暑さの中でも旺盛に繁殖するたくましい雑草 ～カタバミ～		34
野菜や杖にも利用される多機能雑草 ～シロザ～		35
名月によく似合う 日本の秋の風物詩 ～ススキ～		36
大正期にアメリカからやってきた二本角の「ひつつきむし」 ～アメリカセンダングサ～		37
面白い名前の草花たち(その2) ～カズノコグサ～		38
わき水由来の水路では真冬でも青々と群生する ～ミズハコベ～		39
稲作の準備時期を告げる、農事暦には欠かせない田の草 ～タネツケバナ～		40
春の野辺を彩る菜の花畑 明治初期に導入された多機能作物 ～セイヨウアブラナ～		41
林縁に目立つ黄色い花は毒にも薬にもなる草の王様? ～クサノオウ～		42
種子はできないですが、子は増やせます ～コモチマンネングサ～		43

目次

記事・タイトル		
涼しげに清流の水面に揺れる可憐な水草は、気むずかし屋です ～バイカモ～		44
有名な民間薬で効果がたちどころに現れる? ゲンノショウコ		45
かつて利用価値の高い馴染みの草でしたが、最近は嫌われるものに? ～クズ～		46
この大型の猫じゃらしは、アメリカ帰りのすごい奴? ～アキノエノコログサ～		47
微妙な"辛さ"がクセになる? 芥子(からし)より辛い? ～イヌガラシ～		48
「ひつつきむし」としてよく知られるこの草は大発明を産み出した? ～オオオナモミ～		49
全草が白い綿毛に包まれて暖かそうな春の七草のひとつ ～ハハコグサ～		50
野辺に最も身近なスミレの花には春空がよく似合う～タチツボスミレ～		51
人気の園芸植物、グラニウムの仲間はずいぶん足元にも見られます～アメリカフウロ～		52
最も身近なランの花はぐるぐる回る?芝地の気まぐれな雑草～ネジバナ～		53
和洋ともに美人花と称されたこの花の正体は肉食系? ～ヒルガオ～		54
在来の睡蓮(スイレン)は小ぶりで清楚な白花を咲かせます～ヒツジグサ～		55
地味だけど畑や道ばたで、暑い中でも咲いています～ザクロソウ～		56
庭先などあなたの身近な雑草の定番は、ワールドワイドにも展開しています ～メヒシバ～		57
紫蘇という名前がついていても食べられない晩秋の野辺の可愛い花 ～ヒメジソ～		58
晩秋の野辺にはかなげに揺れるあの花は淡い恋を想わせる? ～カントウヨメナ～		59
冬の寒さに負けず庭先で艶っぽい花を咲かせています ～ツワブキ～		60
春の里山を代表し歌謡曲にも登場する白い妖精 ～ニリンソウ～		61
ちょっと怖そうな名前ですが、安心して下さい、噛みつきません ～ヘビイチゴ～		62
草むらでよく見かけるこの草で敷草つくった思い出は? ～ヤエムグラ～		63
クローバーの仲間は土を肥やして幸せ運ぶ!? ～ムラサキツメクサ～		64
あれ、田んぼに合飲の木が!?いえいえ、それは「恥ずかしがりや」の～クサネム～です。		65
夏の夜の怪談話 動物を食べる水生食虫植物の正体とは? ～イヌタヌキモ～		66
弘法大師も愛飲していた!? 古くから知られている健康茶の一つ ～カワラケツメイ～		67
花粉症の元凶として濡れ衣を着せられたスーパーな外来植物 ～セイタカアワダチソウ～		68
秋の半自然草地に揺れる釣り鐘のような花はあの山菜!? ～ツリガネニンジン～		69
冬の花壇やお正月を彩るあの観賞植物は日本生まれ! ハボタン		70
春の草地に突如現れる可憐な青い妖精 ～フデリンドウ～		71
足下の黄色い花の葉陰には一足早い夏の果実が? ～コナスビ～		72
小さな黄色い花をつけるクローバーの仲間 ～コメツブツメクサ～		73
びりりと辛くはないけど、見向きもされずに消えていくのはイヤです ～サンショウモ～		74
とても乙女が口に出しては呼ぶことができないかわいそうな花 ～ヘクソカズラ～		75
毎年、この時期に現れ消えていくあの花は ～ヒガンバナ～		76
晩秋の山野に咲く黄色の小花は、まるでありがたい薬師さまのよう ～ヤクシソウ～		77
寒天を仰ぐ縁起のよい冬緑性のシダ ～フユノハナワラビ～		78
刈り田によく見られる小さなヒマワリのような花 ～タウコギ～		79
春のアゼを代表するタンポポによく似た刈り取りに強い草 ～オオジシバリ～		80

目次

記事・タイトル		
水辺で良くみかける黄色いアヤメの正体は競合力の強いインペダー ～キショウブ～	……	81
手入れが行き届かないと、貧乏神のようなこの草に襲われるゾ!?～ヤブガラシ～	……	82
最近では水田の中も「欧米か!」が進んでいるんです～アメリカアゼナ～	……	83
残暑の中、このピンク色の花穂が目立ち始めると、秋の気配を感じさせます ～ツルボ～	……	84
人生いろいろ、好みもいろいろ、蓼(たで)食う虫も好き好き、の蓼とは? ～ヤナギタデ～	……	85
秋も深まる中、大豆のご先祖さまを見つけてみよう ～ツルマメ～	……	86
この季節、道端でよく見かける熱帯からやってきた「ひつつきむし」 ～コセンダングサ～	……	87
来年は心清らかに過ごせますように お正月の縁起物 ～ウラジロ～	……	88
春の風薫るころ、野良をピンク色に染め上げる中国由来の花 ゲンゲ	……	89
田んぼに浮かぶコケだけど虚仮にしないでね! ～イチョウウキゴケ～	……	90
初夏から梅雨時にかけて里山にみられる万葉歌人も好んだ白い花 ～ウツギ～	……	91
とっても大きそうな名前ですが、実際は地べたに伸びる小さな草花です ～コニシキソウ～	……	92
刈り田の宝ものの探しにはうってつけの小さな絶滅危惧種 ミズマツバ	……	93
秋の野辺によく目立つあの花はサラダ菜の仲間なんです ～アキノノゲシ～	……	94
秋耕後の田んぼで見かける"黒い芋"の正体は ～クログワイ～	……	95
道ばたでみかける試験管ブラシのような穂の草は? ～チカラシバ～	……	96
今年最後に紹介する草花は"善良で陽気"な外来種 ～ウラジロチチコグサ～	……	97
邪気を払う? 田んぼで最も馴染みのあの草の名の由来は.....コナギ	……	98
明智光秀の家紋で有名なあの草は、咳止めにも魔除けにもなる? ～キキョウ～	……	99
楊貴妃が愛し、あの名著にも登場する赤い実は不老長寿の薬 ～クコ～	……	100
中国最古の薬物書にも登場し、今でも日常的に飲用するスーパー健康食品 ～チャノキ～	……	101
ガーデニングなどでお馴染みのあの草は咳止めの薬草だった ～リュウノヒゲ～	……	102
難を転じて福となす 来年度は人々が集い談笑し合える年になりますように ～ナンテン～	……	103
タンポポの変異?いえいえ、そっくりだけど別種の外来種です～ブタナ～	……	104
夜の路傍で月を見上げているあの草は? ～コマツヨイグサ～	……	105
この草の上なら転んで擦り傷をこさえても血が止まる!? ～チドメグサ～	……	106
藪の中でひっそりと咲く花の「隠された心」とは～ヤブラン～	……	107
古池に浮かぶ小判のような水草はなんとみどころがない? ～ジュンサイ～	……	108
刈跡や畦畔で秋風に揺れる小さなトウガラシ? ～アゼトウガラシ～	……	109
お灸や草もち、薬用に大活躍。身近な有用植物 ～ヨモギ～	……	110
いつの間にか衣服に貼り付いているまるで盗人のようなあの草は? ～ヌスビトハギ～	……	111
寒風のなか、ひたむきに咲く冬の花 ～サザンカ～	……	112
緑風に揺れるあの可愛らしいヒナゲシの花は、危険な侵略種 ～ナガミヒナゲシ～	……	113
直立した茎に鈴なりに特徴的な果実をつけるおなじみの草には、いつのまにか仲間がいっぱい? ～ギンギシ～	……	114
初夏の木陰で咲く花は雪のごとし～ユキノシタ～	……	115
金魚鉢に浮かぶあの草の正体は、"青い悪魔"とも呼ばれる世界的な害草 ～ホテイアオイ～	……	116
環境の良い田んぼの指標になりうる絶滅危惧種 ～ミズオオバコ～	……	117

目次

記事・タイトル		
道ばたのヤブに生え黄色の花が咲くあの植物はアズキのご先祖様 ～ヤブツルアズキ～	……	118
これぞ、可憐さの極致? 人目を引かず足元に咲く花の名は? ～キツネノマゴ～	……	119
晩秋の野辺に吹く風に頼りなさげに揺れる、どこか哀愁を感じさせるあの草は ～ヌカキビ～	……	120
魔除けにも使われる西洋の聖なる木の花言葉は ～セイヨウヒイラギ～	……	121

分布：全国

ツクサ (ツクサ 科)

露草

別名：ぼうしばな、ほたるぐさ、とんぼぐさ、つき草、むらさきばな

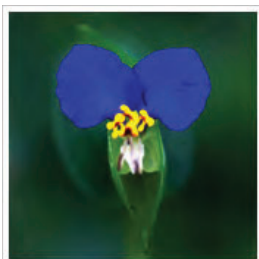
学名： *Commelina communis*

主な生育場所

畑や水田畔、路傍、林縁などに生える。低地から高地まで普通にみられる。どちらかというとやや湿った場所を好む。また、日当たりのよい場所に多いが、日のあまり当たらない環境でも生育できる。

特徴

高さ30～70cmくらいとなり、茎は柔らかく根もとから多く枝分かれし、節から根を下ろして地面を這う。葉は長さ5～8cmほどで、平行な葉脈がみられる。花は大きな花びら2枚と小さな花びら1枚とからなる青紫色で編み笠状の苞葉に包まれる。長いおしべ2本、中ぐらゐのが1本、短いのが3本の計6本のおしべがある。

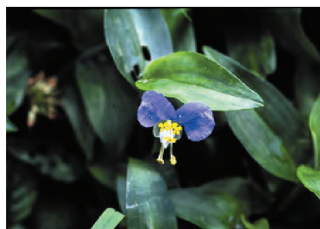


大きな花弁2枚と小さな花弁1枚からなる花

<農業との関係>

畑や果樹園では強害雑草となりうる。特に果樹園など耕起が少ない環境でびっしりと群生することがある。また、陸稲(おかぼ)田に発生すると、稲の減収率が大きくなる。除草した植物体はそのまま土の上に置いておくと節から発根して再び根付いてしまうほど繁殖力は旺盛である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



平行な脈で細長い卵状の葉

<類似種> 主に関東地方よりも南の暖かい地方には、ツクサよりも葉の幅が広くて丸みを帯び、縁が波打つ葉をつける外来種のマルバツクサがよくみられる。また、園芸種由来で常緑の白い花をつけるトキワツクサがある。

<一言うんちく>

京都の伝統工芸品の1つである友禅染では、ツクサの変種であるオオボウシバナ(大型の花をつける)花弁から抽出した色素を和紙に染みこませ乾燥させた「青紙」を使って下絵が描かれる。その後、本絵付けの後、水洗いすると、ツクサで描いた下絵はすぐ落ちてしまう。

<人との関わり合い>

色素は水に溶けやすいので染料としては不向きだが、染め物の下絵用として利用される。また、若い葉や柔らかな茎先は食べることができ、塩ひとつまみ入れた湯にくぐらせ、水にさらして湯がいてお浸しやサラダにする。花付きの茎先は天ぷらにしてもよい。また、生薬「鴨跖草(おうせきそう)」として、全草は解熱、解毒、風邪、利尿薬としても用いられる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】

百に千に人は言うともつき草の移ろうころ吾もためやも(万葉集・作者未詳) ※つき草＝ツクサ
つゆ草に袖すりまぜむ秋萩のひと花衣色深くとも(藤原基家)
露草も露のちからの花ひらく(飯田龍太)

分布：沖縄を除く全国

コウホネ (スイレン 科)

河骨

別名：川骨(せんこつ)、カワホネ、カワト、カワバス、たいこのぶち

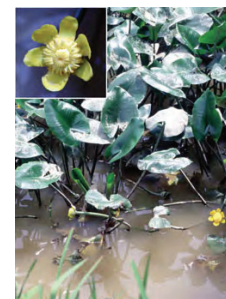
学名： *Nuphar japonicum*

主な生育場所

浅い池や沼、流れの穏やかな水路に生育する水生植物。明るい水辺に多く、底質が泥深い環境を好む。水質に関しては、比較的幅広い環境で生育可能だが、汚濁が進むと減退してしまう。

特徴

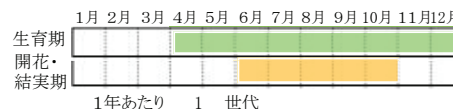
種子または根茎で繁殖する多年生。海草のアオサに似た水中葉と肉厚でつやがあり水面上に立ち上がる抽水葉をつけるが、やや円心状の浮葉が混じることもある。6月頃から秋にかけて、花茎を水面上に伸ばし、その先に直径4～6cmほどの濃黄色の花を咲かす。地中には太く長い地下茎を発達させ、節からひげ根を出す。



<農業との関係>

ため池や土水路などで、ときに大きな群落となり、取水や通水を阻害することがあり、また地下茎もよく発達し、その除去も困難なことから、害草として扱われる。しかし、光沢の強い葉や可憐な花は、観賞用としてもはやされ、庭先の池などで栽培されることも多い。コウホネやその近縁種は、水辺の改変や水質汚濁によって、全国的に少なくなっており、共存する知恵が必要である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



落水後のため池で露出した地下茎

<類似種>

全体に小型で浮葉と沈水葉のみで抽水葉をつけないヒメコウホネ、葉柄が中空で西日本に分布するオグラコウホネなどがある。

<一言うんちく>

世界に20種ほど知られているコウホネの仲間ですが、抽水葉や浮葉をつけずに水中葉だけのコウホネが2006年に栃木県の用水路から発見され、新種シモツケコウホネ(下野河骨)として登録されました。この貴重なコウホネは、地域の財産として地元の方々に大事に守られ管理されています。

<人との関わり合い>

観賞用として栽培されるほか、食用・薬用としても利用されている。レンコンを利用するハスに対し、「ヤマバス」とも呼ばれ、掘り上げた根茎をよく洗い、薄く切って熱湯でよく茹で、その後一晩流水中に晒すと、土の香りがほどよくなくなかなかの珍味となる。天ぷらや煮物、油炒めなどにする。沈水葉も同様に食べて食べることができる。また、根茎は川骨(センコツ)と呼ばれる生薬であり、利尿や強壮、腫れ物などに効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

小鮒取る童へ去りて門川の河骨の花に目高群れつつ(正岡子規)
河骨の花に添ひ浮くいもりかな(高浜虚子)



水路を埋め尽くして繁茂するコウホネ群落

分布: 全国

スベリヒユ (スベリヒユ 科)

滑り苺

別名: ヒョウ, ヒョウナ, ウマビユ, アカジシヤ

ポルチュラッカ オレラケア
学名: *Portulaca oleracea*

主な生育場所

畦や空き地、庭先、道ばたなどで見られる。よく陽の当たる乾いた場所を好み、湿っぽい畦などには少ない。また、肥えた土壌でよく生育するが、極端な高窒素の環境下では生長が抑制されてしまう。

特徴

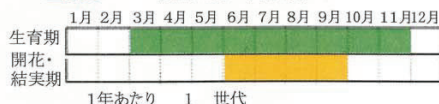
種子で繁殖する一年草。全体が多肉質で、肉質の丸みを帯びた葉には光沢がある。茎は赤紫色を帯びて四方八方に枝分かれして地面を這う。7月頃から秋にかけて、各枝先に径1cm弱ほどの黄色い5弁花を1〜5個着ける。果実はフタのあるカプセル状で、熟すと帽子状のフタが外れ、残された皿に多数の黒い種子が乗る。

名前の由来: 昔から食用とされ、茹でて食べると野菜の「ヒユ」(アマランサスの仲間)に似ているが、ヒユよりも粘り気強いことから、「ぬめりひゅ」。これが転じて「スベリヒユ」となったという。

<農業との関係>

乾燥耐性があるため、炎天下でもよく目立ち、抜いてもすぐ枯れにくく再活着しやすいことから、一般的には畑の雑草として知られている。しかし、密生することは少なく、また根系は浅く競合範囲も限られることから、作物との養分競合や水分競合に対しては、多分に過大評価である。他の雑草が枯れ込むほどの酷暑下でも生育できるたくましさは害草としてのイメージを高めてしまっているのだろう。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ハナスベリヒユ(ポーチュラッカ)は、2〜3cmほどの様々な色の花を咲かす多年草の園芸種である。また、葉が扁平な棒状となるマツバボタン(松葉牡丹)やヒメマツバボタン(姫松葉牡丹)もスベリヒユと同属の園芸種である。

<一言うんちく>

スベリヒユは、気温が低下する夜間に気孔を開いて二酸化炭素を貯蔵しておき、昼間は気孔を閉かずに光合成する植物(CAM植物)なので、より気温が高く乾燥した場所にでも適応できます。このため、他の植物が生育できない(=競争相手がいない)環境下に侵襲できるのです。

<人との関わり合い>

山形県置賜地方では、「ひょう」「ひょうな」として、店先で販売されるなど「山菜」として扱われている。開花前に摘んでおひたしにしたり、みそ和えなどにするとかぼちけがあって美味しい。また、乾燥して保存食とする。

生薬名「馬齒莧(ばしけん)」としても知られ、タンニン、ビタミンC、B1や多くのミネラルを含むので、乾燥したものを煎じて服用すれば、利尿、解毒などに効果がある。また、生の葉の絞り汁は、いぼ取り、虫さされ、湿疹によいとされる。

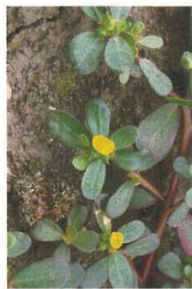
<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

釣るされて一期しまひぬに(すべり苺)

月落ちてこよひの名也馬齒莧(沾圃) ※馬齒莧=スベリヒユ

入間道の大家が原のいはみ蔓ひかばぬめる吾にな絶えそね(万葉集・作者未詳) ※いはみづら=スベリヒユ



スベリヒユの花



マルチの隙間から生育するスベリヒユ



乾燥した土壌でもよく生育する

分布: 全国

オモダカ (オモダカ 科)

面高、沢瀉

別名: ハナグワイ、イモグサ、クチアケ、クワイ、イモゴグサ、クワラツ

サギタリア トリフォリア
学名: *Sagittaria trifolia*

主な生育場所

水田やため池、湿地など流れのない水辺に生育し、流水中には見かけない。最も多く見られるのは水田や休耕田である。また、水深に対する適応性も高く、50cm程度の水深でも生育可能である。

特徴

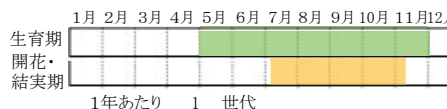
種子と地下に産する塊茎によって繁殖する多年生。根元から伸びた長い柄の先に基部が左右に深く裂けるヤジリ型の葉を展開する。葉の幅は、細いものから、太いものまで変異が大きい。8月頃から花茎を伸ばし、径約1cmほどの白い3弁花を輪生する。また平行して、株の基部から地下茎をだし、その先端に塊茎を形成する。

名前の由来: ヤジリ型の葉の形や葉脈の模様を、人の顔(面)に見立て、長い葉柄を持った葉が水面上から高くでていることから「面高」。また、沢の水が流れ出る「瀉」に生えていたことから。

<農業との関係>

オモダカは塊茎形成とともに種子繁殖も行うため、厄介な水田雑草として扱われる。窒素吸収量が大きく、発生密度が高いと30%以上の水稻の減収をもたらすこともある。しかし、田植え後20〜30日後以降に発生した個体は、水稻によって生育が抑制される。また、早期栽培では稲刈り後にも旺盛に塊茎を形成し、次年度以降の発生の拡大を助長してしまう。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> オモダカ同様にヤジリ型の葉を伸ばす同属の絶滅危惧種アギナシも湿地やまれに水田に生育するが、オモダカのように地下茎を伸ばさず、株元に球状のむかごを形成すること、ヤジリ型の葉先が尖らずに点頭状になることが、区別点となる。

<一言うんちく>

オモダカの群生している様子は、ヤジリ型の葉から矛矢をえて並べたように見えたり、柄にも見えることから、尚武の「勝ち草」とか「將軍草」などと呼ばれる縁起の良い水草として、古来から武人の家紋として採用されてきました。毛利家の抱瀝瀉(だきおもだか)などが有名です。

<人との関わり合い>

正月に食するクワイ(慈姑)は、オモダカを由来とする中国からの改良変種で、径3〜5cmの塊茎をつける。京都山城地方から大阪摂津地方にかけては、野生のオモダカを栽培して「吹田ぐわい」として、クワイと同様に塊茎を食用に利用している。オモダカの若葉も茹でて水にさらすと多少苦みがあるが食べられる。

また、乾燥させた塊茎には、利尿効果や鎮痛作用があり、めまい、耳鳴り、頭痛などにも効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

村雨のふる江をよそに飛ぶ鷺のあとまで白きおもだかの花(草根集)

おもだかに寄る漣や余呉の湖(うみ) (内藤恵子) 沢瀉の花にくはへの銚子哉(嵐雪)

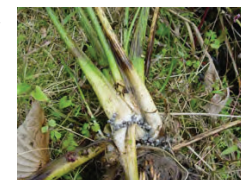
風わたる水のおもだか影見えて山さはがくれととぶはたるかな(香川景樹)



イネ株の間で花をつけるオモダカ



特徴のあるヤジリ型の葉を展開



アギナシのむかご

分布：全国

イヌタデ (タデ科)

犬蓼 別名：アカマンマ、赤のまんま

学名：*Persicaria longiset*

主な生育場所

畑や果樹園、田畑の畦、耕作放棄地、路傍、庭先など、身近な人里環境内で普通に見られる。水辺から日当たりのよい畑地まで生育環境は幅広いが、やや半日陰の湿った場所に群生することが多い。

特徴

夏から晩秋にかけて茎の先に紅紫色の小花を3～5cmほどの円柱状に密生させた花穂をつける一年草。高さ20～50cmほどで、よく分枝する。茎は紅紫色を帯びやすく、晩秋になると全草が紅葉する。タデの仲間には葉の付け根に茎を抱くように筒状の「托葉(たくよう)」があるが、イヌタデには托葉の縁に托葉と同長の長い毛が生える。

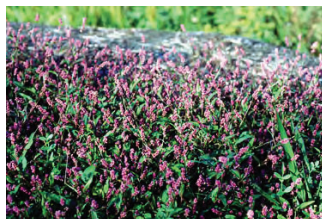


イヌタデの花穂

名前の由来：タデの仲間には、藍染めに利用する「アイ」や、刺身のツマとした「ヤナギタデ」など、役立つ種類が多い中、あまり利用価値のないタデとして、蔑称の「イヌ」をつけて呼ばれたことから。

<農業との関係>

畑や樹園地の雑草となるが、群生しても草高がさほど高くないため、強害草にはなりませんが、近年、飼料畑で問題化しているとの報告がある。水田内にも発生するが、畦畔に多い。土中の種子は平均気温が7～10°になると発生し、発生の深さは1～3cm前後である。また、春から秋まで発生期間は長い、夏季の発生は少ない。土中の種子寿命は4年半後で10～30%との報告がある。



群生するイヌタデ

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ほぼ同様の環境下に生育し、イヌタデに比べ、50cm～1m以上と大型となるサナエタデやオオイヌタデは、葉の裏に白毛が目立ちやすく、托葉の縁にはほとんど毛がない。またオオイヌタデの花穂は太く長く、下向きに垂れがちである。



オオイヌタデの花穂
(太く、長くて垂れ下がる)

<一言うんちく>

子どものママゴト遊びにしか役に立たないと思われているイヌタデですが、実際には若葉や花穂は天ぷらにして食べることができます。ただし、味は可もなく不可もなくといったところでしょうか。ちなみにイヌタデの方言茶は「あなたのお役に立ちたい」。何といじらしいことでしょう。

<人との関わり合い>

野辺に普通に生える身近な草であり、花穂をしごき落したものを赤飯に見立て、アカマンマとも呼ばれオママゴトの材料とした。また群生すると花穂や紅葉が非常に美しく、秋の風情を感じさせることから、古くから短歌や俳句などにも詠まれてきた。よく揉んだ生葉は、皮膚病・虫さされなどに効くとされる。また、全草を干して煎ずれば、虫下しにも良いとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】

犬蓼の花くふ馬や茶の煙 (正岡子規)

犬蓼の花さかりなる里川に夕日ながれてあきつ飛ぶなり (落合直文)

わが屋戸の穂蓼ふるから採み生し実になるまでに君を待たむ (万葉集・作者未詳)

分布：沖縄を除く全国

ガマ (ガマ科)

蒲 別名：御簾草(みすぐさ)、かば、かま

学名：*Typha latifolia*

主な生育場所

ため池や休耕田、湿地など流れのない水辺に生育する。水田に生えることもある。また、大量の種子が飛散するため、時に一時的な水たまりの跡やコンクリートの隙間などでも生育することがある。

特徴

高さ2mにも達する大型の多年草で、種子と根茎によって繁殖する。円柱状の白くて柔らかい根茎は、泥中を這う。濃い緑で線形のねじれやすい葉は幅は2～4cm。夏季に葉間より堅い茎を伸ばし、直径2cm以上で円筒状の花穂をつける。花穂は熟すと赤褐色となり、やがて崩れて綿毛をつけた大量の種子が風によって飛散する。

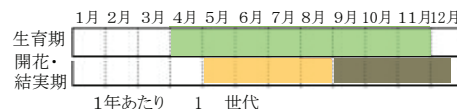


名前の由来：日本語の祖先にあたるアルタイ語系のヨシ(葦)を意味するkamaが、きわめて古い時代に「カマ」そして「ガマ」に転じた可能性があるという。『日本語の起源』村山七郎から

<農業との関係>

飛散した種子からの発芽直後は、耕起によって簡単に駆除できるが、いったん定着すると、地下茎を縦横に伸ばすため駆除が難しくなり、不耕起田に入り込むと厄介となる。また、湿っぽい休耕田で群生しやすく、復田に際してはヨシと同様に地下茎の除去に苦労することとなる。水深の浅いため池にもしばしば蔓延し、取水の障害となるため、定期的な刈り取りや泥上げ等が必要である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 葉の幅が2cm以下と狭く、花穂の直径が2cm以下となるヒメガマも高さは2m以上に達し、ガマと混生すること多い。ヒメガマと同様に葉の幅が狭く、高さが1.5mほどにしかならないコガマは、西日本であり見られない。

<一言うんちく>

ワニに赤むけにされた因幡の白兔が、通りがかった大黒様に救えられてガマの穂にくるまって傷を癒したと思われていますが、「古事記」の原文によると、大黒様が救えたのはガマの花粉(蒲黄)に身を置くことでした。ガマの花粉には切り傷ややけどに効果があるとされています。

崩れて綿毛がむき出しになった熟した花穂



葉幅が狭く花穂が細長いヒメガマ

<人との関わり合い>

ガマの穂綿はかつては、火口に利用されたり、布袋に入れて蒲団(布団)とした。また、花穂を干したものを蠟燭や松明の代用にもされた。さらに若葉は食用、穂黄は薬用、茎はむしろなどの編み物に利用されるなど古来から身近な有用植物としてさまざまな活用されてきた。また、練り製品の「蒲鉾(かまぼこ)」は、古く、竹の棒に自身魚のすり身を筒状に巻いて作られ、その形状がガマの穂に似ていることから名付けられた。ウナギもかつては開かずの串刺しにして焼いていたことから「蒲焼き」とされた。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

蒲の穂や蟹を履て折もせん (其角)

蒲の穂にひとひら白き冬の蝶ふと舞ひあがる夕空の晴 (北原白秋)

蒲の花目にめづらしく咲きたれば葦むら分けて舟曳かせけり (橋田東声)

分布：北海道を除く全国

メリケンカルカヤ（イネ科）

米利堅刈萱 別名：特になし

学名：*Andropogon virginicus*

主な生育場所

農村部から市街地にいる空き地、道ばた、芝生などの草地、水田の畦畔、休耕地、水路やため池の法面など、日当たりが良く乾燥した環境下に多く見られる。刈り取り圧にも強いが湿地には少ない。

特徴

種子と根茎により繁殖する多年草。草丈は50-100cmとなり、叢生しやすいが、生長速度は極めて遅い。茎は扁平で、葉鞘にやや長い毛を散生する。9-10月頃に直立した穂を伸ばし、多数の穂をつける。長さ8mmほどの白い綿毛がついた種子は、風によって伝播する。晩秋から冬にかけて、全草が朱色に紅葉し、枯れ草も目立つ。

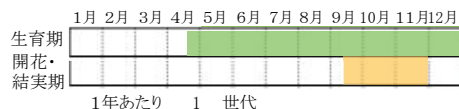


名前の由来：メリケンとは、アメリカのことを表し、カルカヤとは屋根を葺くために「刈る茅」のこと。綿毛をつける在来種のススキやメガルガヤなどに似ているが、アメリカからきた外来植物を示している。

<農業との関係>

シバの生産地では、刈り込み耐性が強く、年を経るごとに根株が強化するため、強害雑草とされている。また、オーストラリアなどでは侵略的な外来種として扱われているなど、我が国でも今後、牧草地や畑地、果樹園などでの強害雑草化が懸念されるため、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）により要注意外来生物に指定されている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 在来のカルカヤには、草原生種メカルガヤ（雌刈萱）とオカルガヤ（雄刈萱）がある。種子に綿毛をつける様子が似ているが、いずれもメリケンカルカヤよりも草高が高くなり（1m以上）、茎はさほど扁平にならず、小穂も大型で種子の毛も長

<一言うんちく>

北米原産ですが、現在ではアジア、オーストラリア、太平洋諸島など環太平洋の各地に帰化しています。我が国では、1940年頃に名古屋から西日本を中心に拡がり始めました。酸性土壌に強いので、化学肥料の過剰使用などによる土壌の酸性に伴い増加する可能性も指摘されています。

<人と人の関わり合い>

茅葺きの屋根をほとんど見かけなくなり、「茅」の用途がなくなりつつある中、新たな「カルガヤ」が各地で跋扈しつつある。本種の分布の拡大には、芝の全国的流通も要因の一つとされる。いまや、晩秋から初冬にかけての身近な野辺に綿毛や紅葉が目立つメリケンカルカヤは、セイタカアワダチソウと並んで、我が国の近年の里の秋を彩る景観として定着しつつある。このようにして、里山や里地の風景も、いつのまにかアメリカなどからきた草花にとって代わられてしまうのであろう。

<俳句や短歌への登場>

メリケンカルカヤとしての、俳句や短歌への登場はまだ少ない。屋根を葺く「茅」（メガルガヤだけでなく、ススキやチガヤなども含む）は、秋の季語として知られている。たとえば、
わが書きし文字さへふりぬ萱薄 蝶夢 など

分布：全国

ミノフスマ ナデシコ科

蚤の食 別名：コゴケグサ、天蓬草、雀舌草

学名：*Stellaria uliginosa*

var. *undulata*

主な生育場所

田植え前の水田や田の畦、休耕田、畑など、やや湿った田畑やその周辺で多くみられる。ときに、非灌漑期の排水路や用水路の縁に生育することもある。また、庭先で見かけることもある。

特徴

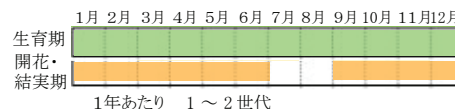
高さ10～30cmほどの小型の植物。越年草とされているが、夏が涼しく積雪の少ない地域では、ほぼ通年で見られる。暖地では、種子で夏を過ごし、10月頃発芽してくる。葉は対生し、茎は無毛で細く、よく分枝する。径4mmほどの白い花が枝先につき、群生するとよく目立つ。また、夏期には花びらをつけずに閉鎖花となることも多い。

名前の由来：対生する柔らかそうな葉を昔の夜具である衾（ふすま：現在の掛け布団のようなもの）にたとえ、蚤（いば）が使うほど小さいとしたことから。

<農業との関係>

土壌水分に対する適応性が高く、湛水～半乾燥までの広い水分域で出現するため、耕地でよく見かける雑草である。発芽適温は15～25℃で、5℃以下や30℃以上ではほとんど発芽しない。酸性から中性の肥沃な土壌を好み、主に秋に発生し、年内の生育量は少ないが、早春からよく繁茂するため、大発生するとムギ畑等で害草となる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 道ばたやコンクリの隙間など乾いたところには、ノミノツヅリ（蚤の綴り）がみられる。ミノフスマ同様に小型で対生の葉をつけるが、全草に毛があり、葉の色はミノフスマより濃い青緑色となり幅広で厚い。また、花弁は分裂しない。

<一言うんちく>

ノミノフスマやハコベなどでは10枝の花びらをつけているようにみえます。しかし、これは一つの花びらが深く二股に切れ込み2枝に数えられるため、合計で10枝に見えているのです。花弁の基部をよく観察すると、実際には5枝の花弁であることが確認できます。

<人と人の関わり合い>

近縁のハコベは、春の七草にも挙げられるほど食用として有名だが、ミノフスマには食用の記録がない。しかし、中国では全草を風邪や痔の薬として用いることがあるようだ。

<俳句や短歌への登場>

【季語：晩春】
畑を打つ音して蚤の食かな （浅野夫美子）



群落の様子



基部で2裂する5枚の花弁

分布: 全国

オオイヌノフグリ (ゴマノハグサ科)

ヴェロニカ ベルシカ
学名: *Veronica persica*

大犬の陰囊 別名: 天人唐草, 瑠璃唐草, ひょうたん草, 星の瞳

主な生育場所

田畑の畦から、春耕前の水田、畑地、樹園地、草地、路傍、空き地、庭先、山裾など、里地のいたるところで見られる。陽当たりが良く、やや乾いた場所を好むが、生育適応範囲は広い。

特徴

明治初年に渡来したヨーロッパ原産の越年草。茎は細く有毛で、根元から分枝し地を這って広がる。高さは10～30cmほど。下部の葉は対生だが、茎の上部につく葉は互生する。早春から初夏にかけて葉腋から2～3cmほどの柄を伸ばし、その先にコバルトブルーの径1cmほどの4弁花をつける。一部の花弁が白っぽくなることもある。



名前の由来: ハート型の果実の形状が、大の「陰囊(ふぐり)」を連想させたため。別名のひょうたん草も同様。天人唐草や瑠璃唐草は、コバルトブルーの花の色から。唐草は帰化種を表した。

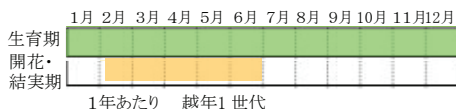
<農業との関係>

田畑の畦に生育するものは、野辺の彩りとなり作業の邪魔とはならない。また、湛水条件下では発芽せず、また夏期は種子で過ごすため、水田期間中に生育することはない。しかし、ムギ畑や樹園地、畑地内で一面に繁茂すると、地温の低下や水分競合などを引き起こす害草となる。



花弁の一部が白みがかった花とハート型の果実

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じ外来種のタチイヌノフグリの花は、径3mmほどと小さく、茎は直立する。在来種のイヌノフグリは、現在、絶滅危惧種に指定されるほど少なくなっている。その花は、オオイヌノフグリより一回り小さい淡い紅紫色で、果実の膨らみは厚い。



直立し、花の小さいタチイヌノフグリ

<一言うんちく>

鮮やかなコバルトブルーの花は早朝から開花しますが、その日の夕方には散ってしまうほど短命です。また、開花してしばらく経つと、軽く花びらに触れたり、風にあおられたりするだけでも、簡単に落ちてしまいます。可憐な花は、実に繊細にできているようです。

<人と関わり合い>

その名前を知らなくても、早春の野辺を彩るこのコバルトブルーの花に見覚えのある人は多い。オオイヌノフグリは日本にできてからわずか150年ほどの間に全国各地に広がり、今やシロツメクサなどと並んですっかり、日本の里地植生になじんでしまった。しかし、文化的には、まだまだ付き合いが浅いようで、食用や薬用などの記録はほとんどない。

<俳句や短歌への登場>

【春】いぬふぐり空を仰げば雲もなし(高浜虚子)

※当時すでに、オオイヌノフグリは各地に広まりつつあったが、この句のなかの「イヌノフグリ」が本種オオイヌノフグリを示しているのか、在来のイヌノフグリを示しているのかは定かではない。

分布: 全国

タガラシ (キンポウゲ科)

ラヌンクルス スケレラツス
学名: *Ranunculus sceleratus*

田芥子 別名: コンペートー, ウシゼリ, タゼリ, タネツケバナ

主な生育場所

春耕前の湿田や畦、湿っぽい休耕田、また排水路や絶えず水の流れる用水路、ため池の縁などの水田周辺の陽当たりのよい水辺に生育する。富栄養の環境を好む。街中の水路で見かけることもある。

特徴

収穫後の水田で芽生え、根出葉で越冬し、翌春に花を咲かす越年生。根出葉は下部の葉は光沢があり、掌状に切れ込むが、茎の上部の葉は3深裂で幅はせまい。茎は中空で柔らかく直立する。葉腋から花茎を伸ばし、光沢のある黄色の5弁花をつける。花後、長楕円形の果実(集合体)が目立ち、個々の種子には短い嘴がある。

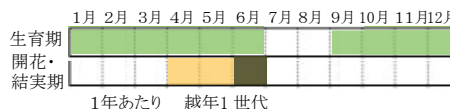


名前の由来: 水田に見られ、嘔吐と辛みがあるから、「田芥子」との説と、収量の少ない湿田に多いことから「田枯らし」との説がある。別名のコンペートーは、果実が金平糖を想起させることから。

<農業との関係>

ムギなどの冬作を行わない水田、とくに冬から春にかけて湛水状態となるような湿田では、全面に繁茂し、春耕や代掻きの障害となることがある。かつては、山間部の貧栄養の湿田に多かったが、最近では平野部の富栄養～中栄養の水質下によくみられるようになった。冬作時にも、水はけの悪い部分に多発することがあり、強害草となる。本田期間中にも残る個体が見られるが、障害とはならない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



花茎を伸ばし始める春先

<類似種> 関東以西のやや乾いた湿地には、絶滅危惧種のヒキノカサが生えるが、葉に光沢がなく茎に毛が多い。また、タガラシと同様の環境に見られるキツネノボタンも、葉に光沢がなく、集合果は球形で種子の先の嘴(くちばし)は長く曲がる。

<一言うんちく>

全草にプロトアネモニンというキンポウゲの仲間と共通する有毒物質を含みますが、中国やインドでは、へびに咬まれたときの薬として利用されることもあるようです。



根生葉のみのロゼット状態

<人と関わり合い>

有毒成分を含む毒植物で、食べるで口内炎や胃腸炎を起こす。また、肌の弱い人では、葉や茎の汁が皮膚に付着するとかぶれを起こすことがある。しかし、インドなどでは、薬用として葉や果実などを利尿や強壮剤に利用する。また、便槽などのウジ虫の退治にも遣われることがあるようだ。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】

田芥子や山の窪地に家二軒(塩崎環恵)

分布: 全国

スギナ (トクサ科)

学名: *Equisetum arvense*

杉菜

別名: ツギツギ, ツギナ, ツクシ, ツギマツ, ホタルグサ, ポンポングサ など

主な生育場所

畑や果樹園, 田畑の畦, 路傍, 庭先, 休耕地, 土手, 法面の草地など, 乾いた場所からやや湿った場所まで里地の至る所に生える。時折冠水するような場所でも生育可能である。

特徴

地中に長い地下茎を伸ばして繁殖する多年生のシダ植物。地上茎には栄養茎と胞子茎(ツクシ)とがある。春先にまず胞子茎が伸び, 先端に胞子嚢穂をつけ, 胞子を散布後, すぐ枯れてしまう。栄養茎は高さ30-60cmほどになり, 上部の節に多数の枝が輪生する。栄養茎も秋遅くには枯れてしまい, 地下茎で越冬する。



胞子茎(ツクシ)



名前の由来: 栄養茎がスギの葉のように見えたことからスギナ。また, 別名のツギツギとは, 節のところに抜いて継ぎ足しできることから。ツクシはスギナの地下茎とつながっていることから「付く子」。

<農業との関係>

地下茎は各節から数本の根を出しながら深さ30-1m, 長さ2-5mに達し, 生活力が非常に強い。ため, 除草剤も効きにくく, 畑に侵入すると強害雑草となる。肥沃地ほどよく生育し, 中性からアルカリ性土壌を好むが, 酸性土壌でも生育可能である。除草剤による管理を行っている畦畔においても, 駆除しにくいために優占しやすく, 耕地内外を問わず, はびこると根絶することが難しい雑草である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 水辺に生育する同属のトクサは, 茎が太く草高も1m近くとなる大型の草である。また陽当たりのよい湿地に生育するイヌスギナは, スギナによく似るが, やや大型で栄養茎と胞子茎の区別はなく, 栄養茎の先に胞子嚢穂を付ける。

<一言うんちく>

シダの仲間是最も古くから地球上で繁栄してきた植物ですが, その中でもトクサ科は約3億年前から見られました。スギナは, その頃から今日まで絶滅せずにずっと残ってきた植物であり, だからこそ農地に入り込むと防除が厄介となるほどたくましいのです。

<人と人の関わり合い>

ツクシは早春の風物詩として, 古来から親しまれ, また食材としても利用されてきた。この食材としてのツクシを摘む様子も, 多く和歌や俳句などに詠まれてきた。ツクシの食べ方としては, 和え物や天ぷらなどがある。また, 栄養茎も若芽は佃煮などの食用となり, 全草を天日で乾かしたものは生薬「問荆(もんけい)」と呼ばれ, 煎じたものはスギナ茶として利尿, 腎炎などに薬効がある。栄養茎には珪酸も多く含まれるため, 歯磨きにも利用されることがある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】

つくづく摘みて帰り煮てや食はんひしほと酔とにひでてや食はん(正岡子規)
畠打や子が這ひ歩くつくし原(小林一茶)
ゆららかや杉菜の中に日は落つれ(芥川龍之介)

分布: 全国

ウマノアシガタ (キンポウゲ科)

学名: *Ranunculus japonicus*

馬の足形

別名: キンポウゲ(金鳳花), 駒の脚形, 瘡(オコリ)落とし, 毛茛

主な生育場所

日当たりの良い林縁や路傍, 水田や畑の畦, 草地, ため池の堤防などにみられる。やや乾いた場所を好む。少し山がちな農地周辺に多くみられるが, 平地の水田や畑周辺では, あまり見かけない。

特徴

多年生植物で, 中空の茎が直立し, 高さ30-60cmほどになる。茎には白い毛が密生する。根出葉には長い柄があり, 掌状に切れ込む。茎の上部にくほど葉は線形となり, 3裂片に深く切れ込む。花は径1.5-2cmの黄色の5弁花で, 花弁の表皮に光を反射する細胞層がある。種子には短いくちばしがあり, 集まって金平糖状となる。

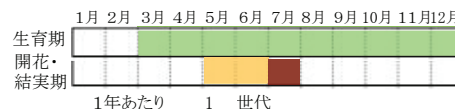


名前の由来: 3深裂する葉を馬の蹄(ひづめ)の形に見立てたという。また, 光を浴びて花びらが金色に輝くように見えることから, 金鳳花。

<農業との関係>

畦や水路沿い, 路傍などにみられるが, 水田内や畑内部に発生することはほとんどない。しかし, 有毒植物のため, 放牧地では害草となる。また, 家畜の飼料に混ざらないように注意する必要がある。家畜への中毒症状は, 口内の腫脹, 胃腸炎, 痙攣, 下痢など。重症となると, 呼吸困難をきたし死に至ることもある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 水田内や畦, 水路際など湿った場所には, 同属でやはり有毒植物のキツネノボタンやケキツネノボタンが生育するが, 花は小さく径1cmほど。また茎の上部の葉は線形とならないことなどで区別できる。

<一言うんちく>

馬のひづめに葉の形状が似ていることから, 「馬の足形」とされますが, とてもそのようには見えません。一説には, 「烏(カラス)」の字を「馬」と読み違えたのではないかともされています。確かに, 3深裂の葉は, カラスの足形としたほうが, しっくりときますね。

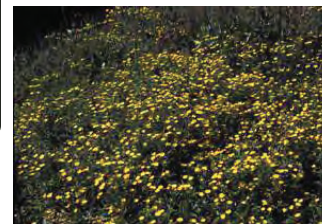
<人と人の関わり合い>

全草が有毒植物なので食用とはならない。しかし, 民間薬として, 生汁を米などに練り込み, リュウマチや歯痛などの外用とすることもある。また, 中国ではマラリヤや頭痛の薬としても利用されているようだ。花が大型できれいなため, 観賞用として品種改良も行われ, 八重咲きのものを特にキンポウゲと呼ぶ。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】

田をうるころに畦に黄の花の金鳳花など咲くふるさは (佐藤佐太郎)
温かに洋傘(かさ)の尖もてうち散らす毛茛(きんぽうげ)こそ春はかなしき (北原白秋)
火薬庫へ径ひとすじちに金鳳花 (堀内雄之)



群生している様子



5弁花と果実(右下)

分布：北海道南部以南

ドクダミ (ドクダミ 科)

学名: *Houttuynia cordata*

毒痛み

別名：ジューヤク(十薬)，便所草，白雪姫，地獄蕎麦

主な生育場所

日陰や半日陰の路傍や田畑の畦畔，畑，樹園地，休耕田，庭先，林縁，林床，そして水路沿いなどに生育する。やや湿りがちな環境に多い。また，わざわざ栽植する場合もあり，人家近くによく見かける。

特徴

白い根茎が長く伸び，しばしば群生する多年草。全体無毛で，独特の臭気がある。茎は紅紫色。葉は暗い緑色で，ハート型で先がとがる。5～7月ごろ，茎の先に花穂をつける。4枚の白花瓣のように見えるのは，葉が変化した総苞(そうほう)で，実際の花は淡緑色の円柱形であり，小花が集まった集合花である。

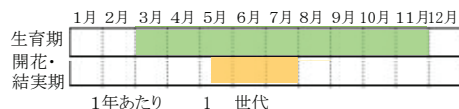


名前の由来：全草に臭気があり，有毒のようには思われたことから「毒溜め」「毒痛み」と呼ばれ，やがてドクダミと転化した。また，多くの薬効があるため，十薬(じゅうやく)と呼ばれる。

<農業との関係>

樹園地や畑地にも生え，根茎が長く伸びて繁殖力も旺盛なので，ときに害草として扱われることもある。一度，繁殖すると根絶することは難しい。一方，ドクダミの臭気には害虫の忌避効果もあるとされ，茎葉をマルチとして利用したり，全草の煮汁を土壌に撒くと線虫などに効果があるという。

<生活史> 関東地方の例(目安)



半日陰に群生するドクダミ

<類似種> ドクダミよりも湿気のある水辺に生え，やはり同様の臭気を有するハングショウ(半夏生)は陽当たりの良いところを好む。また，葉も細長く，花期には花のすぐ下に位置する葉の表面が白く変化する。

<一言うんちく>

ドクダミの独特の臭気の成分は，デカノイルアセトアルデヒドやラウリルアルデヒド - デカノイルアセトアルデヒドですが，いずれも火を通し高温に晒せば分解されます。そのため，テンブラやバター炒めなどにすると意外と美味しく食べることができます。



白い部分は葉が変化した総苞で，塔状にみえるのが集合花

<人との関わり合い>

ドクダミは古くから知られている民間薬で，アレルギー性鼻炎，喘息(ゼンソク)，腎臓病，膀胱炎，胃腸虚弱，腹痛，便秘，下痢止め，高血圧，神経痛，打ち身，皮膚病，水虫，あせも，湿疹，吹き出物，化膿止め，火傷(やけど)，解毒，洗眼，駆虫，風邪予防などに効果があるとされる。これらの薬効のため，天日で干したものを煎じたドクダミ茶としてもよく利用される。また，若い芽のテンブラのほか，茹でた後に水で晒し味噌とミソで和えたり，地下茎も茹でて酢味噌で和えて食べる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

どくだみの花と夏天の鶯と白し (山口青邨) 十薬や四つの花びらよごれざる (池内友次郎)
どくだみの花のほひを思ふとき 青みて迫る君がまなざし (北原白秋)
その日までこすなほにわれありき 君と恐れしどくだみの花 (北原白秋)

分布：全国

セリ (セリ 科)

学名: *Oenanthe javanica*

芹

別名：ミズゼリ，カワクタ，カワゼリ，シェリコ，セイリ，シェリツパ，シェリ，セル

主な生育場所

全国の水田，水田畦畔，休耕田，水路や溝，湿地など水辺に普通に生育する。水田内では畦際に多い。清流から富栄養化が進んだ水域まで生育可能。また，畑地でも水やりを欠かさなければ栽培可。

特徴

無毛の茎は枝分かれして根元は地面を這うが，茎の先は立ち上がる。細長い繁殖茎を出して繁殖し，秋にほふく茎の節から新苗を生じる。3小葉が1～2回羽状につく複葉は互生し，葉柄の基部は茎を抱く。7～8月ごろに茎の先から直立する花茎を伸ばし，10～25花をつけた花序を集めて傘状の花序となる。花は小さく白色5弁。



いくつかの小花序を集めた傘状の花

名前の由来：

早春から若葉が競り合うように地下茎を四方八方に伸ばし旺盛に生育し，大きな群落をつくることから「競り(せり)」。

<農業との関係>

普通に見られる水田雑草であり，ときに強害雑草となる。水田内では通常，種子繁殖はせず，栄養繁殖で増殖する。越冬株は乾燥に弱く，冬場に耕うんを行い土壌表面に露出させると死滅する。また，浅水状態で代播きすると，越冬株が土中に埋設され再生が著しく阻害されるが，通常の水深では水中に浮遊してしまい，活着後の生育量が大きくなるので多発地帯では注意が必要である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



早春から競い合うように新芽を伸ばすセリ

<類似種> とくに寒冷地では猛毒のドクゼリがセリと同じような生育環境下に見られる。ドクゼリはセリによく似るが，大型で，セリと異なり太くタケノコ状となる地下茎を有する。また，セリ独特の香気もないため，注意すれば見分けることは比較的容易である。

<一言うんちく>

春の七草にも数えられているセリは，早春から摘むことができる若菜として馴染み深く，日本原産の最古の香味野菜として万葉の時代以前から栽培されてきました。現在，雑草として田んぼ周辺で見られるセリも，かつては栽培されていたものかも知れません。



ドクゼリは株元の地下茎が太くタケノコ状となる特徴

<人との関わり合い>

古来から食用に利用され，同一種ながら清流に生え，食に適するものを「水セリ」，水田のようにあまり水質がよくない環境に生育するものを「田セリ」と呼んで区別してきた。暖地ではほぼ周年摘み取ることができるが，早春には若い茎を根元から，秋には茎先の新しい葉を摘むのが良い。丁寧に洗って，サラダ，テンブラ，和え物，煮物，炒め物など用途は広い。秋田ではきりたんぽ鍋にも入れる。葉に含まれる精油には発汗作用があり，食欲を増進させる。また，乾燥させた葉を入浴剤とすると肩凝りに効く。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春(芹)，夏(芹の花)】

鶏にやる田芹摘みにと来し我ぞ (高浜虚子) うすらひやわづかに咲る芹の花 (其角)
ますらをと思えるものを太刀はきてかにはの田居に芹ぞ摘みける (万葉集・薛武観命婦)
余念なきさまには見ゆれ類かむり母が芹つむきさらざの野や (若山牧水)

分布: 全国

カナムグラ (アサ科)

学名: *Humulus scandens*

金 蓍

別名: オームグラ, ネバリグサ, ムグラ

主な生育場所

全国の荒地や休耕地, 堤防, 林縁, 路傍, 樹園地, 粗放管理の畦などに生育し, 陽当たりの良い場所によく見られる。窒素が多い環境を好み, 堆肥置き場周辺など, 富栄養化した土壌でよく繁殖する。

特 徴

1年生の蔓(つる)植物で, 雌雄異株である。茎は3m以上伸びることもあり, 茎の断面は四角で, 葉柄とともに下向きのトゲが密生する。葉は対生で, 手のひら状に5~7裂し, 表面は非常にざらつく。8~10月頃に雄株で茎の先に, 15~25cmの円錐状に小花がつく。雌株では脇から葉花茎を伸ばし, 毬状に固まって雌花をつける。

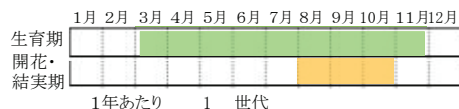


名前の由来: 「むぐら(蓍)」とは, 方々に茂る雑草のこと, 「カナ」とは, 鉄のように茎が強いことを表し, トゲのある茎で何物にも巻き付いて駆除しにくい強靱な草ということで名付けられた。

<農業との関係>

手入れのされない休耕地や草刈り回数などが少ない畦や樹園地に出現する。また, 富栄養の土地でよく繁殖することから, 土壌肥沃度や管理頻度の指標になる。果樹園や畑などに侵入すると, 肥料や水分の競合とともに, 蔓によって作物や樹冠が覆われてしまい, 光競合をおこす。また, 茎のトゲは, 刈り取り時の障害となるが, 生育初期段階に刈り取ってやれば, 繁殖することは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



雄株の枝先についた雄花



<類似種> 北海道と本州中部以北の山地には多年生の蔓植物カラハナソウが自生し, やはり茎にはトゲが多いが, 葉はカナムグラのように深く切れ込まない。また, 雌花をビールの苦み付けの原料とするホップ(セイヨウカラハナソウ)も近い仲間である。

<一言うんちく>

百人一首で詠われる「八重葎 茂れる宿の 寂しきに 人こそ見えね 秋は来にけり」(愚慶法師)の「やえむぐら(八重葎)」とはアカネ科のヤエムグラではなくカナムグラを指したものだと言われています。たしかにカナムグラなら, 家を覆い隠すほど繁茂しても不思議ではありません。

<人と人の関わり合い>

ブタクサやヨモギと並び, 秋の花粉症の主要な原因植物になっている。しかし, 生薬名「葎草(りっそう)」として薬草としても知られ, 秋に全草を乾燥させたものを煎じて飲むと強壮, 健胃, 利尿などに効果があり, 果実を煎じると健胃薬となる。また, 腫れ物には, カナムグラを黒焼きにし食酢で練って患部に塗布すると良いとされる。食用にもなり, 春から初夏にかけて柔らかいつる先を摘み, 天ぷらにしたり, 芝エビや小タマネギなどとかけ揚げにする。塩茹でし, 卵とじ, バター炒め, ビーナツあえなどもいける。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春(葎若葉), 夏(金蓍)】

むぐらさへ若葉はやさし破れ家 (芭蕉)

陽炎のづんづんと伸る葎哉 (一茶) いづこより月のさし居る葎哉 (前田普羅)

いかならむ時にか妹をむぐら生のきたなき屋戸に入りませなむ (万葉集・大伴田村大娘)

分布: 全国

シロバナサクラタデ (タデ科)

学名: *Persicaria japonica*

白花桜蓼

別名: タデモドキ, 楊貴妃蓼 (いずれもサクラタデを含めての別称)

主な生育場所

河川敷や用水路わき, ため池の縁などの水辺, 水田の畦, 休耕地などの湿地に生育する。洪水などの攪乱に会いやすい環境下でも群落を形成する。どちらかというと山間部よりも低地で多く見られる。

特 徴

雌雄異株の多年草で, 地下には長いほふく茎があり株分けで増える。直立し, 草高は50~100cmに達し, 節はやや膨らみ赤みを帯びる。葉の鞘は1.5cmほどで, 縁に8~15mmの長い毛が生える。8月から10月ごろにかけて枝先の花序に多数の5弁花をつける。1枚の花びらの大きさは, 3~5mmほど。種子は黒色で光沢がある。



水田の畦に咲くシロバナサクラタデ

<農業との関係>

田の畦にもよく見られ, 夏から秋にかけて畦を彩る花としてよく目立つ。地下茎が横走しやや広い範囲に群落を形成することがあり, 湿った休耕地では大きな群落が見られる。しかし, 耕起には弱く, 水田内に侵入することはほとんどない。水路内の大群落はときに通水障害を招くことがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



シロバナサクラタデの花



サクラタデ

<類似種> サクラタデは, 花びらの大きさが5~6mmとシロバナサクラタデよりやや大きく, 赤みを帯びる。また, 葉の鞘はやや短い。種子は黒色だが, 光沢はない。シロバナサクラタデよりも見かけることは少ない。

<一言うんちく>

かつてはサクラタデとともに茶花としてよく利用され, また畦畔等に生えていると観賞用に刈り残されている風景もよく見られました。しかし, 現在ではシロバナサクラタデの清楚な美しさを顧みる人々も少なくなり, 農村の中で埋もれてしまっている野草のひとつです。

<人と人の関わり合い>

清楚な美しさから茶花として利用されているが, その他の利用についてはあまり情報がない。食用や薬としての薬効の記録もないため, 栽培されることも少ないようである。その美しさから, もっと注目してほしい草花である。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏, 秋(花) ※サクラタデ含む】

さくら蓼咲いてゐるなり野の仏 (坪根峯子)

桜蓼さうつむきで媚びにけり (富安風生)

少年はそこが秘密の場所なりき地蔵堂うらサクラタデ咲く (鳥海昭子)

分布：新潟・関東以西

ミズワラビ (ホウライシダ 科)

ケラトプテリス タリクトロイデス
学名: *Ceratopteris thalictroides*

水 蕨 別名：ミズシダ、ウォーターズプライト

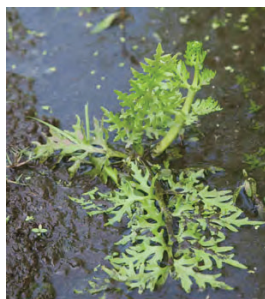
主な生育場所

水田や畦畔、休耕田、水路、河川、ため池、湿地に生える。浅水域でよく見られ、水深の深いところには見られない。刈田のようにやや乾いた環境下にも生育し、ときに転作田に生えることもある。

名前の由来： 水辺に生えるワラビのような葉をつけるシダ植物で、ワラビと同様に食用となることから。

特 徴

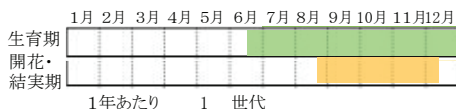
一年草のシダ植物で、短小な茎から葉を叢生する。草丈は変異が大きく、数cmから60cm程度まで。黄緑色で無毛の葉は2型あり、柔らかく不規則に分裂し裂片は幅広い栄養葉と、裂片は棒状でやや硬く裏側に反り返る胞子葉がある。胞子葉は胞子葉の表面の葉脈状に並んで付く。また地下茎は短く塊状で少数の鱗茎を形成する。



<農業との関係>

かつては関東以西の水田でよく見られた雑草であったが、後期発生型なのであまり問題となる害草ではなかった。除草剤などの影響により、一時期、各地で絶滅危惧種に指定されるほど減少したが、最近では、初期剤施用のみの除草剤処理体系の普及や、作期の早期化に伴う水稲収穫後期間の増大などに伴って、再びミズワラビが見られる水田が増加する傾向にある。

<生活史> 関東 地方の例(目安)



<類似種> 他に似たような植物は見かけないが、胞子葉を刈田などで見かけるとその出芽初期はイネ科のスズメノカタビラの幼植物と間違ふかも知れない。

<一言うんちく>

岡山県内で50年以上前の水田跡の土壌を採取し、平皿に薄くおいて灌水したところ、ミズワラビなど数種の植物の発生が認められました。このことから、ミズワラビの胞子は50年以上も寿命があることが実証されました。他にはイグサやアゼナ、タマガヤツリなどが発生してきました。

<人との関わり合い>

柔らかい栄養葉は、サラダや炒め物にして食べることができ、ときにスーパーなどで販売されることもある。しかし、胞子葉は苦くて食用には適さない。また、アクアリウムプラントとして、ミズワラビや外国産の近縁種がウォーターズプライト等の名称で利用されている。

<俳句や短歌への登場>

どこにでもある草ではないが、大型の個体もあったり、食用として利用されることもあったのに関わらず、ミズワラビが登場する詩歌は見ない。水田など身近な水辺に生え、ワカメなど海藻にも似た栄養葉や、ときに火災のようにも見える胞子葉など、詩情をそそる形状だと思ふのだが。ぜひ、刈り田で水蕨をみかけたら、その風情を表現してほしい。

分布：全国(北海道は南西部)

ヒナタイノコヅチ (ヒユ 科)

アキランテス ビデンタータ ファウリエイ
学名: *Achyranthes bidentata* var. *fauriei*

日向猪子藪 別名：イノコヅチ、フシダカ、コマノヒザ、サシ、イヌゲシ、ヒツキボウ、ヤブジラミ

主な生育場所

野原や荒地、路傍、畑、畦畔などの陽当たりの良いやや乾いた土地によく見られる。果実が人や動物に付着して運ばれるため、人里やその周辺に多い。

名前の由来： 茎の節が太くなり、イノシシ(猪)の手や足のかかちに見立てて猪子藪。太い節は牛や馬の膝などにも喻えられた。

特 徴

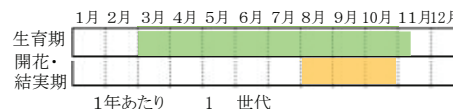
多年草で高さ0.5-1mほどとなり、茎は断面が四角形で直立し上向きの短毛を生やす。節は太く、紫色を帯びることが多く、葉は対生する。やや厚い葉は葉脈が目立ち、両面に毛を密生する。茎の先や葉腋から花穂をつけるが花は緑色で目立たない。果実を包む包(ほう)の先は針状となって、衣類などに付着しやすい。



<農業との関係>

畑にもよく生え、強雑草化することがある。また、草刈りの少ない畦畔に生えたものは、放っておくと茎が硬くなり通行の邪魔となる。衣類などに果実が付着して運ばれることから、農業者が果実の運び手となりやすい。

<生活史> 関東 地方の例(目安)



<類似種> 林内や木陰などに見られるイノコヅチ(ヒカゲイノコヅチ)は、葉の質が薄く、果実の基部に見られる耳状の膜質の付属物が大きくて目立つ。また、ヤナギのように葉が細くなるヤナギイノコヅチもある。

<一言うんちく>

しばしば、茎の節の部分に異常に膨れることがあります。これはタマバエの幼虫が寄生し、虫こぶとなっているからです。この虫こぶの様子をみると、確かにイノシシの手足のようにも見えます。



タマバエが寄生し虫こぶとなった節

<人との関わり合い>

果実やそれに連なる部分に付着しやすい構造を発達させ、よく衣服などにくっつきやすい植物の果実を「ひつつきむし」と呼び、イノコヅチは里地で見られるその代表格だが、気がつく袖や靴紐などに果実がくっついており、少々うざったい草花でもある。ただ、春の若芽はテンプラや胡麻和えにするとクセがなく食べられ、また地上部が枯れたところ採取した根を水洗いし乾燥させたものを牛膝(ごしつ)と呼び、利尿や強精効果があり、生の葉をよく揉むと、虫さされにも効くとされる有用植物の面も持つ。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】

凡に過ぐ日々佳かりけり牛膝 (篠崎圭介)

友だちの友だちはみなみのこづち (下嶋四万歩)

分布：沖縄を除く全国

ワレモコウ (バラ科)

学名: *Sanguisorba officinalis*

吾亦紅, 吾木香 別名: ぢゆ, じゆ, ダンゴバナ, ボウズバナ, テンピソウ, エビスグサ, ノヅチ

主な生育場所

草原生植物で、山地の草原や原野にも生育する。農村周辺では、堀刈り草地、林縁、ため池の堤体草地、畦畔の法面、農道の法面、水路や河川脇の草地など、草刈り頻度の低い草地によく見られる。

特徴

多年生植物で、高さ50~100cmほど。根出葉には長い柄があり、葉は複葉となり、小葉は細かい鋸歯のある細長い楕円形で5~13枚ほど。地下茎は太くて短い。夏から秋にかけて枝分かれした花柄を伸ばし、その先に1~2cmの直立した暗紅色の楕円形の花穂をつける。花が終わっても花穂は晩秋まで残り、ほぐすと種子がこぼれる。

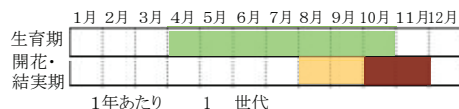


名前の由来: 「吾(われ)も亦(また)紅(こう)なり」との説もあるが、線香の原料として使われるインド原産の植物「木瓜」に根の香りが似ていて、吾の(日本の)木瓜(もっこう)、との説が有力。

<農業との関係>

草刈りや火入れなど、人間の適度の働きかけによって維持されてきた草地を「半自然草地」と呼び、ワレモコウはそのような草地の代表的な植物の一つ。しかし、草地の開発や担い手の不足などで、農村の周辺から半自然草地が少なくなってきた今、ワレモコウを見かける機会がすっかり減ってしまっている。現在、新潟県や福井県、佐賀県など5県で絶滅危惧種に指定されている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



ワレモコウの花(あなたは何色に見えますか)

<類似種> 里山の草地には、西日本でコバノワレモコウ、東日本ではナガボシワレモコウが見られるが、花穂はいずれも白く、2~7cmと長く垂れ下がる。また、全国的に赤褐色の花のナガボノアカワレモコウも分布するが、花穂はワレモコウより長い。

<一言うんちく>

バラ科に属しますが、花びらはなく、昆虫などを誘引するために美しく目立つ花をつけ昆虫を媒介して受粉を行う「虫媒花」から、風に頼った受粉を行う「風媒花」へ向かう進化の途中段階とされています。進化上でも、バラ科の他の仲間と離れ、独自の道を進んでいるように見えますね。



ため池堤防草地のワレモコウ

<人との関わり合い>

若葉は食べることができ、複葉を2つ折りにした春先の若い葉を茹でたのち、香ばしく歯ごたえも楽しめる。また、塩を入れた熱湯で茹でたのち、水に晒して、そのままわつたり、バター炒め、みそドレッシングなどで味付けしても美味しい。乾燥した根は「地榆(ちゆ)」と呼ばれる生薬であり、中国の最も古い薬物書にも記載されている。止血や下痢止め、胃潰瘍などに薬効があるとされる。また、中国では婦人の乳腺炎などの乳痛の治療にも用いられるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語:秋】 我もまた 紅(くれない)なりと ひそやかに (高浜虚子)
その中の 恋の涙の われもかう われの涙の 野のわれもかう (与謝野晶子)
鳴けや鳴け 尾花枯葉の きりぎりす われもかうこそ 秋は惜しけれ (待賢院安藝)
吾木香 すすきかるかや 秋くさの さびしききはみ 君におくらむ (若山牧水)

分布：北海道を除く全国

タコノアシ (ユキノシタ科)

学名: *Penthorum chinense*

蛸の足 別名: サワシオン

主な生育場所

湿地や河原、沼沢地などのほか、元々湿地だったところに拓かれた水田の畦や畦際、水路沿い、休耕田などに生育する。他種との競合に弱いので、洪水や草刈りなど適当なく乱がある場所を好む。

特徴

地下浅くに地下茎を持つ多年草。草丈は1m弱でやや株立ち状に直立し、互生する葉には細かい鋸歯がある。8~10月ごろに、茎の先端から放射状(たこ足状)に枝を伸ばし、上向きに黄緑色の小さい花を多数つける。茎や花序は赤みを帯びることも多く、秋には全草が紅葉する。晩秋には果実が黒く熟しよく目立つ。



名前の由来: 先端が外巻きで放射状に伸びた枝に吸盤のように小さな花がつく様子が、蛸の足を下から見たのに似ていることから。

<農業との関係>

かつては低地の水田地帯などに普通に見られたが、主に畦や畦際などに生育し水田内に入り込むことは少なく、イネと競合する害草とはならず「ただの草」的な存在だった。しかし、乾田化が進み、畦にも除草剤が使われるようになり、激減した。また、休耕田や放棄田でも他の植物に負け、群落を維持できないことから、今では全国各地で少なくなり絶滅危惧植物となっている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



開花期のタコノアシ

<類似種>

<一言うんちく>

タコも体形や体色を変えることが得意ですが、タコノアシも分類学的には扱いが変わりやすい植物で、かつては多肉植物のカランコエなどと同じベンケイソウ科の仲間とされていました。また、最新の分類体系では、ユキノシタ科ではなく、独立したタコノアシ科が新設されています。



セイタカアワダチソウに似る生育初期のタコノアシ

<人との関わり合い>

かつては農村で珍しい植物でなく、特に花序を含め全草が紅葉した様子がまるで茹で蛸のように目立ったことから、さまざまな利用がなされてきたと思いきや、わずかに中国で若葉を食用とするのほか、意外と記録は少ない。ただ、その得意な草姿から、野趣味のある花材などとして庶民には使われてきたのではないだろうか。単なる「ただの草」とするには惜しいと思われる草の一つである。

<俳句や短歌への登場>

【季語:秋?】 ※目立つ草であるが、これまで俳句や短歌などの題材になることはほとんどなかったようである。
秋の田になにやら可笑し蛸の足 (陽溜)
雁わたる空を見つめしタコノアシ (むらくさ そよぎ)

分布: 全国

ナズナ (アブラナ科)

薺

別名: ペンペン草, ガラガラ, 三味線草, ナデナ, オトコナズナ, スズクサ

カブセラ ブルサ=パストリス
学名: *Capsella bursa-pastoris*

主な生育場所

水田や畦, 休耕地, 畑, 路傍, 空き地, 庭先など, 日当たりの良い場所からやや日陰の場所まで至る所に生える。肥沃な土地を好むが, 痩せ地でも耐えられる。完全に水没する場所にも生えない。

特徴

越年草もしくは一年草で, 盛夏を除いて生育する。ロゼット葉(地面にへばりついた葉)で越冬。ロゼット葉には深い切れ込みがあるが, 茎に付く葉は茎を抱き, 切れ込みは無い。葉にはルーペで見える星状毛が生える。花弁は4枚で直径3~4mm。果実はハート型で, 最初平べったいが, 熟すと膨らみ, 割れて多数の種子を散布する。



名前の由来: 夏に枯れて見えなくなることから夏無(なつな)との説がある。別名のペンペン草は果実の形が三味線のパチに似ていることから。

<農業との関係>

土壌や環境を選ばず至る所に生えるため, 代表的な畑の雑草である。一株あたり2,000~4,000個の種子をつけ, 結実後は数ヶ月で発芽可能になり, 種子寿命も比較的長い。なかなか根絶させにくい。特に秋に発生したものは早春から旺盛に生育し, 強雑草化する。しかし, 春以降に発生したものは大きくなることは少なく, 夏には消えてしまう。

<生活史> 関東地方の例(目安)



ロゼット葉

<類似種> マメグンバイナズナは主に路傍や荒地に生え, 花時にロゼット葉が残らない。また花序に花を多数つけ, 果実は円形。タネツケバナは湿った場所に生え, 果実は細い円柱形。グンバイナズナの果実は大きく, 先端が深くくぼみ単配型。

<一言うんちく>

春の七草のうち, ナズナやハハコグサ(ごぎょう), コハコベ(はこべら), カブ(すずな), ダイコン(すずしろ)は, いずれも古い時代にアジア大陸から日本に渡来した植物とされています。ナズナは麦もみに種子が付着したりして, 麦の栽培をもたらした人々にくっついてきたのです。



花と果実

<人との関わり合い>

春の七草の主役として, 早春に若菜(ロゼット葉)を摘み, 熱湯で茹でて細かく刻み七草かゆに入れる。成分としてビタミンA, ビタミンB1, ビタミンB2, カルシウム, 鉄分などを豊富に含むため, 野菜の少ない冬の貴重なビタミン源であった。また, 消化機能を助けるとされる。生薬では, 「薺菜(せいさい)」と呼ばれ, コリン, アセチルコリンブリン酸を含み, 主として各種の止血に使用され, 利尿, 解熱にも効くとされる。また, 子どもの遊びとして, 果実の柄を下に引いた茎を振り, 果実の中の種子の音を楽しむ。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 新年(薺, なづな), 春(薺の花, ペンペン草)】

沢蟹の鉢もうごく薺かな (寥太) 一とせに一度つまるゝ菜づなかな (芭蕉)
もの思ひすべなき時はうらいでて古野に生ふるなづなをぞ摘む (良寛)
よく見れば薺花咲く垣かな (芭蕉) 猫のみてペンペン草を食みにけり (村上鬼城)

分布: 全国

オランダミナグサ(ナデシコ科)

阿蘭陀耳菜草

別名: アオミナグサ

ケラスティウム グロメラーツム
学名: *Cerastium glomeratum*

主な生育場所

路傍, 庭先, 空き地, 裏作水田や耕起前の水田, 畑地, 畦畔, 果樹園, 草地, 休耕地など, 人里の至る所で普通に見られる。日当たりが良く肥沃な土地を好み, やや湿った場所でも生育する。

特徴

明治初期に侵入した外来植物で, 越年生。株立ちし, 高さ10~30cmほど。上部はよく分枝する。全体は明るい緑色で軟毛と腺毛が多く, 葉は対生する。早春から茎の先に花序を出し, 短い花柄の先につく径1cmほどの白い花は, 晴天時に全開する。花弁は白く, 5枚で先端が切れ込む。果実は萼よりも長くなり, 先端は10裂する。

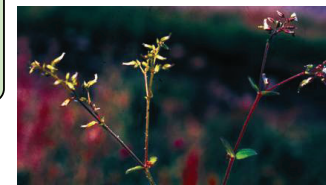
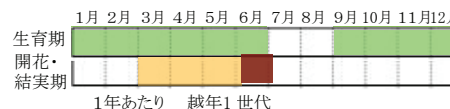


名前の由来: 柔らかい毛が密生し, 茎に向かい合ってついている葉を, ネズミの耳にたとえた。本種は在来種でなく, ヨーロッパ原産の外来植物なので, 「オランダミナグサ」。

<農業との関係>

麦作や水田裏作の雑草であるが, 幼植物で越冬し, 草丈もそれほど大きくならないので, よく目立つ割には大量に発生しない限り, 強害草となることは少ない。一方, キャベツなどアブラナ科を栽培する畑では, ヨトウムシを忌避させ, 幼植物がロゼット状に越冬するため, 土壌の湿気を保つとも言われている。種子は水田などの湛水環境下でも夏を越すので, 農地周辺で普通の雑草となっている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



左:オランダミナグサ, 右:ミナグサ

<類似種> 在来種のミナグサは, 全体に毛が少なく, 葉は濃緑色で茎はしばしば暗紫色を帯びる。花茎は長く花数もオランダミナグサより少ない。また, ハコベの仲間には葉に毛がなく, 花弁が深く切れ込み10枚のように見えることが異なる。

<一言うんちく>

かつては在来のミナグサが各地の野辺に普通でしたが, 今や山村の畑などに見られるのみで, 都市部ばかりでなく農村部でもオランダミナグサしか見かけることができなくなりました。ミナグサがオランダミナグサに追いやられた要因は, まだ詳しくはわかっていません。



オランダミナグサの幼植物

<人との関わり合い>

若菜は食用となるとされる。ミナグサも含め, 薬効については不明である。

<俳句や短歌への登場>

東風吹いて君もオランダミナグサ (坪内稔典)

※オランダミナグサはともかく, ミナグサは昔から普通にあったと考えられていますが, 不思議と季語に取り上げられていません。類似種のハコベは季語になっていますので, ハコベ類と一緒にされていたのかも知れません。

分布：沖縄を除く全国

スイバ (タデ 科)

学名: *Rumex acetosa*

酸 菜

別名：スカンボ、スイコンボウ、スイカのボンボン、スイコ、スッカシ、アカギシギシ

主な生育場所

田畑の畦や道ばた、休耕田、果樹園、荒地、堤防の法面、河川敷などに普通にみられ、日当たりの良い場所に多い。また、酸性の土地を好むため、酸性土壌の指標植物となっている。

名前の由来：茎や葉にシュウ酸カルシウムを含み、特に春先の若芽や葉などを口にするすると酸っぱい味がすることから酸菜(すいば)。

特 徴

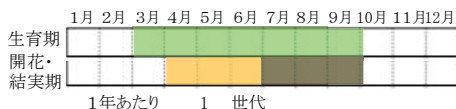
雌雄異株の多年生で、太くて短い地下茎がある。長い柄の根生葉は長楕円形で基部は矢じり状に広がる。茎は無毛で直立し赤みを帯びやすく、縦に筋があり中空。高さは30cm～1mほどになる。5～6月に茎先に円錐状の花穂をつけ、雄花は緑白色だが雌花は赤くなりよく目立つ。雌花は花後に3枚の翼に包まれた果実をつける。



<農業との関係>

スイバと同様に農地やその周辺に生えるギシギシ類と混同されがちだが、ギシギシほど畑地内に入り込まない。ただし、牧草地などで強害草種となることがある。富栄養条件を好み、畑地や荒地などではスイバがなくなると外来のヒメスイバやギシギシ類が繁茂する。また、ギシギシよりも攪乱に弱いと考えられ、基盤整備前の畦畔に多く、伝統的な畦畔を代表する植物でもある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> スイバの葉の基部は矢じり状に尖るが、よく似たギシギシ類の葉の基部は円形か心形。また、ギシギシ類では葉の縁が波打ちやすく、葉の色も濃い。ギシギシ類の葉には酸味もない。外来種のヒメスイバの葉の基部は鉾形で横に張り出す。

<一言うんちく>

東北地方では、春先の出始めの茎先を摘み、包んでいる袋を除くと現れるぬるぬるとした新芽を「オカ(陸)ジュンサイ」と称し、細かく切って油炒めをしたり、味噌和えや漬け物にして楽しめます。しかし、春先の若芽の多食は肝臓障害を引き起こすこともありますので避けましょう。

<人との関わり合い>

ヨーロッパでは古くから野菜として食用にされ、品種も数系統あった。また、ミョウバン媒染で毛織物の黄色染料としたり、地下茎を乾燥させ淡紅色の染料として利用されていた。天日乾燥した花穂を細かく刻み、熱湯を注いでスイバ茶としても利用でき、健胃や整腸、さらに抗がん作用があるとされる。スイバの抗がん効果については、近年の薬理実験による研究でも明らかにされている。また、生の根をすりおろしたものは皮膚病に、根を天日乾燥し煎じて飲むと便秘に効果があるという。

<俳句や短歌への登場>

【酸模(すかんぼ):春】

すかんぼの酸味を舌に感じぬる春来て故郷(くに)を思ひいつるとき (前田夕暮)

すかんぼの茎の味こそ忘れぬいとけなき日のものかなしみ (吉井勇)

すかんぼをかんてまぶしき雲とあり (吉岡禪寺洞)

分布：全国

コハコベ (ナデシコ 科)

学名: *Stellaria media*

小繁縷

別名：ハコベラ、アサシラガ、ホコベ、ピヨピヨグサ、ウサギグサ、ひよこ草 など

主な生育場所

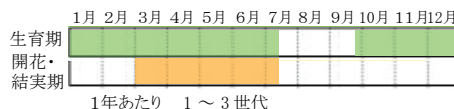
冬作の畑や耕起前の水田、果樹園、休耕田、路傍、庭先など、乾いた場所からやや湿った場所まで至る所に生える。よく陽があたる肥沃な土地を好み、堆肥場にも多いが、痩せた土地には少ない。

名前の由来：万葉集に詠われる「波久培良(はくべら)」からハコベラ → ハコベ に転化したとされる。「ハク」とは布きれ、「ベラ」は「群がる」で、小さな葉が地面に群がる様子を表したとされる。

<農業との関係>

ムギなどの水田裏作や畑地での春雑草だが、冷涼な北日本などでは春から秋まで開花・結実し、主要な畑雑草となる。発芽温度は最低2～5℃、最適10～20℃、最高30℃で、暖かい地方では夏には見られない。pH5.5～6.5の肥沃地で生育が旺盛となりリン酸欠乏に弱い。農地の肥沃度の指標となる。農地での発生は多いが、防除しやすいため大きな問題となることは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> よく似るミドリハコベはやや日陰に生え、茎が緑色で大柄。また雄しべの数も多く(コハコベ:3～5本程度、ミドリハコベ4～10本程度)、種子表面に顕著な突起を数く。近年の帰化種で市街部に多いイヌコハコベは花弁がなく萼基部に斑点。

<一言うんちく>

縄文時代後期や弥生時代に稲作や麦作の伝播に伴って日本列島に渡ってきた植物を史前帰化植物と呼び、コハコベも麦類の随伴雑草の一つとされます。麦作とともにやってきた史前帰化植物には、他にナズナ、サナエタデ、カタバミ、ハバコグサ、ツユクサ、カモジグサなどがあります。

<人との関わり合い>

春の七草の一つ「はこべら」として、ミドリハコベとともに古来から山菜として利用されてきたが、生食すると青くさい。粥にいれるほか、ゴマ和えやバター炒め、天ぷらなどにすると美味しい。また鶏やインコなどに与えるとよく好み、「ひよこ草」としても知られる。また、民間薬としてハコベには炎症を緩和する作用があるとされ、湿疹や歯槽膿漏、歯痛などに利用されてきた。特に、歯槽膿漏には食塩にハコベの葉の粉末を混ぜた「はこべ塩」で磨くといわれる。

<俳句や短歌への登場>

【季語:春】 カナリヤの餌に東ねたるはこべかな (正岡子規) 筑紫野のはこべ花咲く睦月かな (杉田久女)

畦草のはこべもくもく繁り幼ころ湧きて寝ころがりたき (窪田空穂)

石垣に春日あかるくはこべらの微けき花は数限りなし (土田耕平)

我が顔を雨後の地面に近づけてほしいまにはこべを愛す (木下利玄)



花弁の先が深く切れ込む花



類似種のミドリハコベ

分布：沖縄を除く全国

ヤブカンゾウ (ユリ 科)

学名: *Hemerocallis fulva* var. *kwanso*

藎萱草

別名：ワスレグサ、オニカンゾウ

主な生育場所

田畑の畦や草地、路傍、林縁、河原、堤防など、やや乾いた場所に生育する。花がきれいなため庭に植栽されることも多く、庭先で見られることもある。

特徴

地下茎を伸ばし、先端部が肥厚して栄養繁殖で増える。かつて中国から渡来した古い時代の帰化植物とされ、3倍体のため、結実しない。葉は左右2列に並び根生し、長さは40～60cm。葉の幅は約4cmで全体は無毛。6～8月に花茎を1mほど伸ばし、茎先に橙色を帯び赤色の斑紋がある八重咲きの花を上向きに数個つける。



名前の由来：葉がカヤ(萱)に似ていることから、中国名で「萱草」と呼ばれ、これを音読して「カンゾウ」。人家の近くの草叢に多く見られることから、藎萱草(ヤブカンゾウ)。

<農業との関係>

農耕地の周辺に多く、果樹園内で見かけることもあり、繁殖力も強いので害草と扱われそうだが、食草となること、花がきれいなことなどから、あまり問題とされていない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



ヤブカンゾウの若芽

<類似種> 川辺ややや人里から離れた野辺に見られるノカンゾウの花は紅色が強く、一重咲き(6弁花)で花期はやや遅い。また、ゼンテイカ(ニッコウキスゲ)やエゾカンゾウなど他のキスゲの仲間とは横向きに花をつける。

<一言うんちく>

かつて中国では、春先に萱草の若芽を食べると「憂いが晴れる」とされ、やがて萱草の花を見たりするだけで「憂いを忘れさせてくれる」力があるとされました。また、美しい花が一日で萎んでしまうことから「忘れ草」との説もあります。なお、漢方という「甘草」とは別の植物です。



一重咲きのノカンゾウの花

<人との関わり合い>

ヤブカンゾウやノカンゾウの若芽は「山菜の女王」とも呼ばれるほど美味で、昔から食草として利用されてきた。まだ土中にある若芽を熱湯でさっと茹でるとぬめりと甘みがあり、イカなどと辛子酢、ゴマ和え、酢味噌で美味しい。若い葉は茹でて水にさらし、卵とじ、煮付け、油炒めなどで食べる。花びらやつぼみも天ぷらやさっと湯をくぐらせ二杯酢で。つぼみを乾燥したものは、解熱や利尿にも用いられる。また、生の根を碎いて腫れ物に貼るとよいとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】忘れ草 吾が紐につく時となく 思いわたれば 生けりともなし (作者未詳・万葉集)
恋ふれども 逢う抱るのなきは忘れ草 夢路にさえや 生いしげらむ (詠み人知らず・古今和歌集)
わすれ草菜飯につまん年の暮 (松尾芭蕉)
湯治場や黄なる萱草得て帰る (正岡子規)

分布：北海道を除く全国

カラムシ (イラクサ 科)

学名: *Boehmeria nivea*

var. *nipponivea*

藎蒸し(草真麻)

別名：マオ、クサマオ、チョマ、あおそ

主な生育場所

野原や山野、河川敷、土手、林縁、道ばた、田畑の畦畔、休耕地などに生育する。池の縁などのやや湿った場所も好む。群落となることが多い。

特徴

茎は直立し、高さ1～1.5mになる。多年生で地下茎は太く木質化する。葉の裏には白色の綿毛が密生するが茎や葉柄には短い寝た毛がある。葉は互生し表面はざらつき鋸歯があり、下部の葉ほど大きい。7～9月に葉腋から淡緑色の目立たない花穂をつける。雄花と雌花があり、上部の葉腋から長く花序を伸ばすのが雌花。

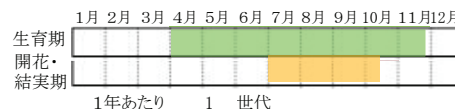


名前の由来：茎(カラ)を蒸して繊維をとったことから「カラムシ」とされるが、「ムシ」は繊維一般を指すとの説もある。別名「マオ」とは「オ」が繊維からとった糸を表し、真の糸であることから「マオ」。

<農業との関係>

地下茎が発達し、草刈にも強いので、畦畔に生えると崩壊防止に役立つ。しかし、休耕地などでは刈り取りを行わないと高さ2mにも達し、茎も木質化するため厄介者扱いされることがある。湛水や耕起には弱いので、水田や畑地内に入ることほとんどない。昔茎から繊維をとるために利用され、植栽されていたとも考えられ、人里の周辺に多い植物である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



畦畔の法面に群生するカラムシ

<類似種> 葉の裏面に綿毛がないアオカラムシや茎や葉柄に開出毛が密生するナンバンカラムシやその改良種であり草高も葉も大きくなる繊維作物ラミーなども人里周辺でよく見かける。

<一言うんちく>

カラムシの仲間にはアジア全般で繊維作物として栽培されており、日本のカラムシも栽培用として持ち込まれた史前帰化植物の可能性もある。カラムシからとれる繊維は強靱かつ水に強いので、衣服のほか魚網やロープなどにも使われる。持統天皇も詔によって栽培を奨励したとされる。



ナンバンカラムシ(カラムシより葉が大きく茎や葉柄に長い毛がある)

<人との関わり合い>

カラムシやナンバンカラムシ、ラミーを含めて、古くから繊維植物として利用され、弥生時代は日本人の貫頭衣の主原料だった。繊維は刈り取り後、水に浸し外皮をとり、さらに表皮を引いて利用する。中世でも越後を中心にカラムシが栽培され、越後ちりめんの材料であった。現在では、福島県や沖縄県で上布の原料として栽培され、福島県昭和村では「からむし織」として特産品となっている。また、食用の記録はないが、冬に根を掘り採り、乾燥して煎じると利尿剤になり、生の根は腫れ物に効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】
芋(からむし)のあとから蕎麦の二葉哉 (浪花) 草苧麻に朝の日とどく窠どころ (岡田 和子)
むしぶすま柔やが下に臥せれども妹と寝ねば肌し寒しも (万葉集・藤原屋) ※むしぶすまとはカラムシの繊維でつくった夜具のこと

分布：沖縄を除く全国

ミゾソバ (タデ科)

溝蕎麦

別名：ウシノヒタイ、カナモンヅサ、ウシブタイ、コメバナグサ、カワソバ、イデソバ

ベルシカリア ツンベルギイ
学名：*Persicaria thunbergii*

主な生育場所

小川や井・排水路、川辺、湖沼・ため池、水田の畦際など、水辺に普通にみられる。やや富栄養な水質の場所を好む。休耕田や道ばた、原野、山道などの水が染み出るような湿った場所にも見られる。

特徴

一年草。茎は根元から枝分かれして節から根を下ろし地面を這う。上部は斜上し、高さ50～60cmほどとなる。茎には下向きのとげがあり、葉は互生しほこ形で両面に刺毛と星状毛を散生する。葉面には八字形の黒紋がでやすい。8～10月に白また淡紅色の花(実際は萼)を茎先に集まってつける。地中に閉鎖花もつける。

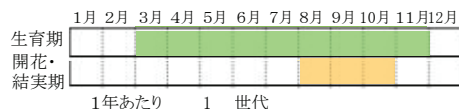


名前の由来：ソバの仲間、湿った溝のような場所に生えることから「溝蕎麦」。また別名は、特徴的な葉の形を正面から見た牛の顔の形に見立て、「牛の額(うしのひたい)」。

<農業との関係>

畦や水路から水田内にも侵入して生えることもある。地面を這い群落を形成するので、畦際に繁茂すると水稲と競合する。また、水が染み出る場所によく生えるので、本種が生えているとため池堤防などの漏水の指標となる。土水路に生えると水面を覆ってしまい、水路の位置がわからなくなってしまうので、水路沿いのミゾソバ群落は定期的な刈り取りが必要。

<生活史> 関東地方の例(目安)



花のように見える5裂した萼片

<類似種> 同様に水辺に生えるヤノネグサは葉に黒紋がなく、矢じり形となる。また葉鞘が1cm以上(ミゾソバの葉鞘は0.5～0.8cm)と長い。また、タニソバは山地の湿った場所に生え、葉は菱形で黒紋が出ず、茎にとげがない。

<一言うんちく>

「ソバ」が付く野草は、果実をソバのように利用できるものが多いようです。ミゾソバの実も粉にして湯で溶くとソバガキにして食べられます。洪水などで農地が冠水し作物がとれなくなっても、ミゾソバは地中にも同鎖花を付けるので、救荒作物としてうってつけだったんですね。



湿地に見られるミゾソバ群落

<人との関わり合い>

秋には紅葉が美しいので、また淡紅色の楚々とした花もそれなりに風情があるため、夏から秋にかけての水辺の草花として親しまれてきた。実だけでなく、若い葉を茹でて、ゴマ和えや味噌和え、浸して食べられる。若い花穂を摘み、酢を落とした熱湯で茹でて食べる。また、花の時期の葉を摘んで干し、煎じて飲めば、ぜんそくやリュウマチに聞くとされる。さらに、生の葉を揉んで切り傷につけると止血剤にもなる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】

溝蕎麦は水の際より咲きそめし (高浜 年尾) 溝蕎麦や峡田乏しき水をひき (平松草太)
みぞそばのかくす一枚の橋わたる (山口青郎) みぞそばの折り重なるも氷室あと (日野たんぽぽ)
溝蕎麦に秋日さしつづ孤(ひとり)なり土橋をわたるあたたかければ (前川佐美雄)

分布：全国

カタバミ (カタバミ科)

酢漿草

別名：ミツバ、カネコグサ、トンボグサ、雀の袴、雀の提灯、ツツングサ、ガンゾウ

オキシリス コルニクラタ
学名：*Oxalis corniculata*

主な生育場所

畑地、庭先、路傍、水田畦畔、荒地、草地、河川敷など、人里環境の至るところに生える。日当たりの良いやや乾いた場所を好むが、より乾燥している土地から水辺、日陰など、水中以外は生育可能。

特徴

多年草であるが、種子繁殖も盛んに行う。高さ10～30cmで、数本の茎を根元から伸ばし、根を下ろしながら広がる。葉は互生し、長い柄のある3複葉。春から秋にかけて葉腋から花柄を直立し黄色の5弁花を次々に咲かす。果実は長楕円形で直立し、熟すと多数の種子をはじき飛ばす。葉も茎も赤褐色となる品種をアカカタバミと呼ぶ。

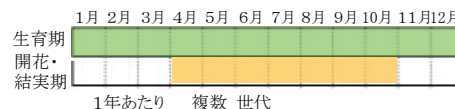


名前の由来 先が窪んだ小葉の形から葉が嚙られてたように見えることから、「片食(かたばみ)」。また「酢漿」とはホオズキのことで、果実を嚙むとホオズキのように酸っぱいことから「酢漿草」。

<農業との関係>

繁殖力が強く、畑地、樹園地、芝生の強害雑草となる。積雪のない地方では、ほぼ一年中見られ、草高は低いものの栄養繁殖と種子繁殖も旺盛に行うため、根絶することは困難である。しかし、外来種のムラサキカタバミなどと比較して作物との競合度は低い。また、カタバミは関東以西の農村で最も普通に見られ親しまれている蝶のヤマトシジミの幼虫の食草であり、許容度は高いと思われる。

<生活史> 関西地方の例(目安)



カタバミの花

<類似種> 北米原産の外来種オッタチカタバミは、カタバミに良く似るが、茎は地上を這わずに立ち上がり高さ10～50cmに達する。カタバミと比べ、全体に白い毛が多く、托葉はごく小さい。また花後に花柄が斜めに下がる点もカタバミと異なる。

<一言うんちく>

カタバミの繁殖力の秘密は、①地下に球根を持ち、根を深く下ろすため定着するとなかなか枯れない、②茎は地上部を這いながら子株を多数つくる、③よく花も咲かせ、また花後はロケット形の果実を上向きにつけ、熟すと弾けて四方八方へ1m以上種子を飛ばす、ことなどが挙げられます。



全体に毛が多いオッタチカタバミ

<人との関わり合い>

平安時代から家紋として利用される「五大紋」のひとつ。長宗我部氏や徳川家譜代の酒井氏、大分の広瀬氏などが用いた。全草シュウ酸を含むため、食べ過ぎると良くないが、酸味があるため油炒めに良い。また、野菜とともに花と葉を混ぜて一夜漬ける。酸味が強いので、葉をみじん切りにして麺類の薬味にも使える。さつと湯でぐらせ、しょうゆと砂糖をからめてもよい。漢方では「酢漿草(サクショウソウ)」として、シュウ酸に殺菌作用があるため、生汁を虫さされや寄生性の皮膚病などに用いる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

かたばみに同じ色なる蝶々かな (村上鬼城) 記憶ほどけるかたばみの花が揺れ (片山 純子)
かたばみのそばに生ひたるかがみ草露さへ月に影みがきつつ (藤原為家)
青ぞらにそびえてたてる松の木の下にちいさかたばみのほな (大塚 楠緒子)
青みこし芝草まじり咲きいでぬ黄いろなさかたばみの花 (土田 耕平)

分布：全国

シロザ (アカザ科)

ケノボディウム アルブム
学名: *Chenopodium album*

白藜 別名：シロアカザ、ハンボコ

主な生育場所

休耕地や畑、畦畔など、農耕地周辺でよく見られる。よく肥えた比較的乾いた場所を好み、湿っぽい畦などには少ない。また、陽の当たる場所で大きく成長するが、畑などで作物の陰でも結実する。

特徴

一年生植物。直立する茎は無毛で縦条があり木質化してよく分枝し、高さ0.6～1.5mほどに達する。葉は互生し粗い鋸歯があり、下部は三角形、上部のものは披針形となる。若葉には両面に白色の粉状の毛が生え、白く粉を吹いたように見える。8～10月に茎先に円錐状に花序をつけ、花卉のない黄緑色の小さな花を多数つける。



名前の由来：よく似たアカザが、若い株の中心部(座)が赤くなることから「赤座」と呼ばれたのに対し、株の中心が白くなることから「白座」。

<農業との関係>

農耕の伝来とともに帰化したと考えられている植物(史前帰化植物)であり、窒素が多い土壌を好むことから、発生密度が高いと畑の強害雑草となる。窒素の吸収力はエン麦の3倍以上とされる。一株あたり数万から50万粒の種子を生産し、土壌中の種子の寿命は数10年と非常に長いので、根絶は難しい。ただし、かつては野菜として栽培されていたこともある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



若葉は白い粉をふく

<類似種> 変種のアカザは、若葉の両面に紅紫色の粉状の毛が生える。また、シロザを小ぶりにしたようなコアカザは、あまり分枝せず下部の葉はシロザより幅が狭く、三角形とならずに下半分が浅く3裂する。

<一言うちく>

シロザの若葉が白く粉を吹くのは、遺伝子を傷つける紫外線から若い葉の細胞を守るために細かい白い毛を敷き、組織の損傷を防いでいるからです。またこの白い毛は、葉緑素から活性酸素を発生させることによって、生産されています。



葉が浅く3裂するコアカザ

<人との関わり合い>

かつては野菜として栽培され、葉は茹でたり胡麻和新芽は天ぷらなどにして食べることができ、同じアカザ科のホウレンソウによく似た味がするが、シュウ酸を多く含むため多食は避けた方がよい。また、種子も食用にできる。なお、「藜の羹(あつもの)」の喩えは、粗末な食事のこと。

乾燥させた茎葉を煎じたものは歯痛に効果があるとされ、また生葉の搾り汁は虫さされに効くとされる。茎は直立し、太く硬くな

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

そこらに藜をつみて茹でしかば咽喉こそばゆく春はいにけり (長塚 節)

鎌とげば藜悲しむけしきかな (高浜虚子)

我寺の藜は杖になりにけり (惟然) やどりせむあかざの杖になる日まで (松尾芭蕉)

分布：全国

ススキ (イネ科)

ミスカンツス シネンシス
学名: *Miscanthus sinensis*

薄 別名：カヤ、オバナ、テキリガヤ、カヤンボ、尾花

主な生育場所

野原、堤防法面、畦畔、耕作放棄地、山地の草原など、乾いた日当たりの良い場所を好み大群落となる。草地の代表的な植物。酸性土壌にも強く、火山帯にもよく見られる。観賞用に庭に植えることも。

特徴

太くて短い根茎を持つ多年生。節間が短い茎は直立し高さ2mほどに達する。叢生し、葉は堅く中央に太く白い脈がある。葉縁は細かい尖った刺があり、触ると手を切りやすい。8-10月ごろ稈先に茶褐色あるいは紫褐色の花穂を散房状につける。小穂の基部には多数の白毛が生え、熟すと果柄から離れる。種子には約1cmの芒がある。



秋の農村の風景によく似合うススキの穂

名前の由来「スス」はすすくことと生えることで、「キ」は草を指すという。また、「スス」は「ササ」と同様に細い葉を示し、葉縁が鋭くよく切れることから「切っ先」の「キ」ととって、ススキとしたとも。

<農業との関係>

耕耘に弱いため、通常、畑に生えることはないが、不耕起畑や果樹園などではときに雑草となる。その場合、刈り取りに非常に強く大株となり、また地下に根茎を伸ばすので、駆除は困難である。一方、水田や畑の草抑えや土壌改良などを目的として刈り敷きの材料によく利用されてきた。また、牛馬が餌として好み、火入れにも強いことから放牧地や採草地では積極的にススキ草地を維持してきた。

<生活史> 関東地方の例(目安)



出穂したばかりのススキの紫褐色の花穂

<類似種> よく似たオギは、湿地に生え、根茎が長く伸びるため茎は単生し、小穂の基部の白毛はススキより長くよく目立つ。また、暖地の海岸近くには生えるハチジョウススキはススキよりも大型で、葉も幅広く、また葉縁の刺は鈍く、触っても痛くない。

<一言うちく>

仲秋の名月は、農耕儀礼の一つで、もともと畑で秋に獲れる豊かな実りを祝う収穫祭でした。団子等を神に供えるときに災いを祓うために、葉縁が鋭く、また茎が固いため切り口も鋭いススキを供えたといわれます。お月見のあとには、ススキを庭先や畑にさして魔除けとしたそうです。



葉に白い斑が入った観賞種：タカノハ(鷹の羽)ススキ

<人との関わり合い>

カヤツリガサ科のスゲ属やチガヤとともに、「カヤ」と呼ばれ、かつては茅葺き屋根に使われたり、家畜の餌に利用されたり、生広く利用されてきたため、ススキ草地の維持のために集落の近くには定期的に刈り取りや火入れを行う「茅場(かやば)」が設けられていた。観賞用に品種改良も行われてきた。また、薬用にもなり、晩秋に採取した根茎を乾燥させ、刻んで煎じると、解毒や利尿、高血圧に効くとされる。また、穂は干して毛を開かせ煎じと飲むと香ばしい。穂を束ねてミズクの姿に似せて遊ぶことも。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】山は暮れて野は黄昏の芒かな (与謝蕪村) りとりてはらとおもきすきかな (飯田蛇笏)
萩の花尾花葛花撫子の花女郎花また藤袴朝顔の花 (万葉集・山上憶良) ※尾花＝ススキ
婦負の野の薄おしなべ降る雪に屋戸借る今日し悲しく思ふゆ (万葉集・高市黒人)
朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯れ野のすすき形見にぞ見る (西行)

分布：全国

アメリカセンダングサ（キク 科）

亜米利加梅檀草 別名：セイタカタウコギ

学名：*Bidens frondosa*

主な生育場所

荒地や路傍、畑、樹園地、草地、水田、畦畔、ため池の縁など、身近な人里環境内のいたるところに見られる。乾いた環境から水辺まで生育可能であるが、やや湿った環境に見られることが多い。

特徴

一年草で紫褐色を帯びた茎は直立し無毛で断面は四角状。高さ1～1.5m。葉は対生し3～5葉の複葉で鋸歯があり、暗紫色。9～10月ごろ茎や枝先に頭花をつけ、黄色の頭花は舌状花がなく管状花のみである。頭花の直下には7～10枚の葉状の長い総包が取り囲む。果実は扁平なくさび形で両肩に下向きのとげのある2本の芒がでる。

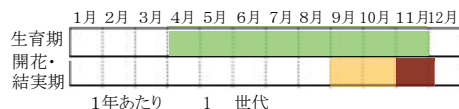


名前の由来：3～5枚の小葉からなる様子が樹木の梅檀（センダン）に似て、大正時代にアメリカから渡してきたことから。また別名は類似種で在来の水田雑草タウコギに似て背が高いことから。

<農業との関係>

水田雑草としてよく知られ、中干し以降に大きくなるため、稲刈りごろによく目立つだけでなく、茎が硬くなるため収穫作業に支障をきたすこともある。水田内など水辺によく生えるが、湛水条件下では発芽できなかつた幼植物が枯死するため水稲生育初期の深水管理が重要となる。最近増加傾向であるが、休耕田で大繁茂がみられるため、休耕田が増えたことも本種が増加した要因と考えられる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



左：センダングサ、右：アメリカセンダングサの果実

<類似種> アメリカセンダングサより早く明治期に北米から来たコセンダングサはやや乾いた場所を好み、頭花の下部の総包は短く目立たずに、果実は細長い。在来のセンダングサの果実は細長く頭花に舌状花がある。タウコギの総包は幅広となる。

<一言うんちく>

イノコズチやオナモミと並んで、秋の野辺の代表的な“ひっつきむし”であるセンダングサですが、アメリカセンダングサも含めこの仲間ほとんどはこの100年あまりの間に日本に渡ってきた新参者です。しかし、その果実の移動能力によって急速に全国各地に生息域を拡げていったのです。



アメリカセンダングサの幼植物

<人との関わり合い>

長い芒によって、衣服やペット等の体によく果実がくっつき、また芒が刺さると痒くなるため、衣服等の果実取りに時間を費やした記憶をお持ちの方も多く、厄介な草であるが、茎が固くなる前の若葉は茹でて食用とすることもできる。また、沖縄の宮古島ではアメリカセンダングサの仲間ではより外来種として雑草化しているタチアワユキシセンダングサをお茶や化粧品などの材料として利用している。

<俳句や短歌への登場>

「ひっつきむし」として晩秋の野辺を代表する植物と思われるが、残念ながら在来のセンダングサも含めて季語への登録はないようである。また草種名が長いためか、俳句や短歌に詠われた例を知らない。これだけ全国にありふれた草となっているだけに、新たに語呂のよい別名を設ければ、もっと詩歌に登場する機会が増えるのではないかと思う。

分布：沖縄を除く全国

カズノコグサ（イネ 科）

数の子草 別名：ミノゴメ、カエツリグサ、カエル釣りグサ

学名：*Beckmannia syzigachne*

主な生育場所

収穫後から翌春の耕起前までの水田や休耕田、耕作放棄田、畦畔や湿地に生える。やや湿った土地を好むが、冬期でも湛水が続くような湿田には少ない。またムギなど裏作の水田にも多く生える。

特徴

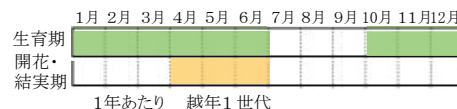
越年草あるいは早春から芽生える一年草。茎は直立し、根元からよく分枝する。茎はやや軟弱で太く、無毛。高さ30～70cmほど。葉の幅は5～15mmほどで葉舌は5mm程度で先は尖らない。4～6月に緑色で長さ10～20cmにもなる円錐状の花序をつけ、小穂を密に2列に並べる。小穂はほぼ円形で左右に扁平で熟すと黄色となり脱落する。

名前の由来：花序枝に扁平で丸い小穂が密着する様子を数の子に見立てて、植物学者の牧野富太郎が名付けた。

<農業との関係>

暖地では水田裏作のムギほ場で、同じイネ科のスズメノテッポウなどととも代表的な強害雑草となっている。土壌水分が高い水田で発生が多く、乾田化が進んでいる水田で発生は少ない。3月以降、気温が上がると生育が旺盛となり、繁茂するとコムギで50%以上の減収をもたらすこともある。除草剤による防除だけでは不十分な場合があり、乾田化などの対策を併せて行うことが重要である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



数の子に良く似た小穂の並び

<類似種> 出穂してしまおうと、独特な形状の小穂をつけるため、他と間違えることは少ない。出穂前は他のイネ科植物と紛らわしいが、スズメノテッポウなどと比較し、全体が明るく、茎も太くなりがちなので区別できる。また、長く尖らない葉舌も特徴である。

<一言うんちく>

カズノコグサは、もともとは養米（みのごめ）と呼ばれていました。養米とは食べられるイネ科のことを指しますが、本種は食用となりません。カズノコグサと同じように湿った水田で見られ、穂を食べられるムツオレグサと混同されて間違えて名付けられたと考えられています。



先が尖らずに鈍頭となる葉舌

<人との関わり合い>

別名にもあるように、カズノコグサの穂を使って、子どもが水田でカエルを釣って遊ぶことができる。カズノコグサの小穂は丸く大きいので、カエルが飛びつきやすいとされる。食用には適さないが、潮風にも強いので、海岸地帯では牧草としての利用が期待される。また、葉としての利用や薬効の記載は見当たらない。あまり役に立つ場面が少ないが、数の子に似た花穂はなかなか愛嬌があり、のどかな春の田んぼによく似合う草ではある。日本の農村の風景には欠かせない植物であるといえよう。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春】

養米の花細やかや母のくに（宮内佐代美）

※名前は馴染みがあるが、目立たない草であるため、俳句や短歌等で詠まれることは少ない。カズノコグサという字数の多さも敬遠される一因かもしれない。

分布：全国

ミズハコベ (アワゴケ 科)

水繁縷 別名：ハコベ、ウキグサ

カリトリケ パルスツリス
学名：Callitriche palustris

主な生育場所

湧水由来の用水路や湧水が流れ込む河川、湧水池、また湿地や湿地、浅いため池や池干し後の底水、水の溜まりやすい休耕田など、通年で湛水状態にあるか地下水位の高い水辺に生育する。

名前の由来：水中を漂う幅の広い葉が畑等に生えるハコベの葉に似ていることから、水はこべ。また水中を漂っていることからうきぐさ。

特徴

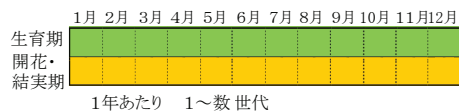
小型の軟弱な一年草。葉は対生し茎は無毛で細く柔らかくよく分枝、条件が良いと通年みられる。水中では線形の先が窪んだ葉をつけ、水上では広卵形～披針形で3脈の目立つ幅広い葉、陸生状態ではやや厚みのある細い葉となる。雌雄異花で葉腋に花を1個ずつつけるが花弁がなく目立たない。果実は約1mmで扁平な軍配状。



<農業との関係>

平均気温が10℃、水温が13℃前後で発芽してくるため、春先の苗代田にも発生し、群落を形成すると雑草害を引き起こす。湿地には水田内にも生えるが、乾田にはほとんど見られない。水路内で大きな群落となることがあり、千切れたり流されたりした茎葉が取水障害を起こすこともある。小型雑草であるが、水中でよく伸長するので大きな群落となりやすく、ときに農業上の強害草となる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



水路に繁茂する外来種イケノミズハコベ

<類似種> 水田にはミズハコベとよく似たミゾハコベが生えるが、果実はミズハコベと比べ球形に近く、葉先は凹状に窪まない。また近年、関東地方中心に増えてきた外来種のイケノミズハコベはやや大型で、水中葉はミズハコベのように線形とならない。

<一言うんちく>

春の七草の一つであるハコベ(コハコベ)は第37号で紹介したように、古来から山菜として利用されてきましたが、ミズハコベに関しては食用の記録が見当たりません。毒もなく清流に漂う姿からは美味しそうにもみえるのですが、利用してこなかった理由が何かあるのかも知れません。



陸生するミズハコベ

<人との関わり合い>

食用や薬用の記録はなく、また詩歌などにも取り上げられたことはないようだが、近年、アクアリウム(観賞用に観賞魚や水草などを飼育・栽培すること)の愛好者の増加により、前景用の水草などとして流通されている。しかし、観賞用には在来種のミズハコベよりも、南米産の別種のミズハコベが好まれるようで、イケノミズハコベと同様にその逸出や野外での繁茂が危惧される。

<俳句や短歌への登場>

古来より水路等でそれなりに目立つ植物だったと思われるが、残念ながら俳句や短歌で詠まれた例はないようだ。

分布：全国

タネツケバナ (アブラナ 科)

種漬け花 別名：こめなずな、めくらぜり、たがらし、みずがらし

カルダミネ スクッタータ
学名：Cardamine scutata

主な生育場所

水田、あぜ、裏作のムギ畑、やや湿った畑、休耕田、水路脇などの水辺、じめじめしている路傍など、湿気のある場所を好む。一時的に冠水しても生育は可能。陽地から半日陰まで生育は見られる。

特徴

根生葉で越冬し、根元から分枝した数本が直立、高さ10-30cm。茎の下部は暗紫色を帯び、短毛がある。葉は互生し、7-17枚の奇数羽状複葉で小葉は不規則に切れ込む。早春～初夏に茎頂に径7mmほどの4弁の白色花を10-20個ほど集める。果実は長さ約2cmの細長い棒状で、茎から斜上し果実は直立する。花期に根生葉はない。

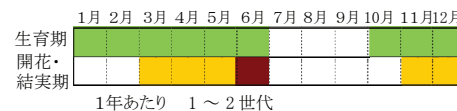
名前の由来：水稻作の準備として、苗代に種籾(たねもみ)を播く前に水に浸けること(浸種)が必要。この浸種の頃に本種の花が咲くので「種浸け花(たねつけばな)」と呼ばれる。



<農業との関係>

水田裏作のムギ畑などでは害草となる。田畑どちらにも生育するが、水田では春耕・代かきによって鋤込まれるため問題とはならず、畑地雑草としての側面が強いが、害草程度は低い。一方、早春の水田に白い花をつける群落が目立ち、昔から名の由来のように農事暦の目安とされ、水田には馴染みのある草花のひとつである。

<生活史> 関東地方の例(目安)



早春の水田に一面に咲いたタネツケバナの花

<類似種> 近年、類似の外来種の侵入が目立つ。路傍や畑地に多いミチタネツケバナは、毛が多く花期にも根生葉が残る。コタネツケバナは全体小柄で花も径2-3mmと小さい。在来のオオバタネツケバナは溝や山地に多く、頂小葉が大きい。

<一言うんちく>

愛媛県松山地方では、タネツケバナの類似種で清流などに生育する多年生のオオバタネツケバナを「タネツケ」と呼び、辛味が強く香りも良いので刺身のつまなどに昔から利用されてきました。特に市内高井町のわき水に生育するタネツケは良質で松山市の天然記念物に指定されています。



タネツケバナの芽生え

<人との関わり合い>

その名のとおり、水田に生え早春からよく目立つので、農事暦だけでなく、いろいろと利用されてきた。辛味があるので、独特の風味を活かして、手早くさつと茹でてお浸しや和え物にして食べられる。近い仲間のクレソンのように、肉料理と付け合わせてもよい。また、からりと揚げて天ぷらも楽しめる。乾燥させた種子を煎じて飲むと、むくみ、腫れ物の利尿や咳止めなどに効くとされ、またできものには新鮮な葉をすり潰して幹部に塗布する。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春】
雨風のあとや種付花の群 (篠崎 圭介) 田一枚種漬花の花満てる (滝沢 伊代次)
秋風や高井のていれぎ三津の鯛 (正岡 子規) ※ていれぎ：オオバタネツケバナ
ていれぎや高井の里の秋の水 (高浜 虚子) ていれぎや弘法清水湧きやまず (吉野 義子)

分布：全国

セイヨウアブラナ (アブラナ 科)

西洋油菜

別名：菜の花、アブラナ

ブラシカ ナプス
学名：Brassica napus

主な生育場所

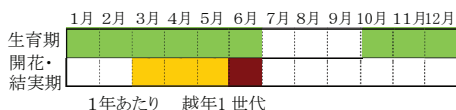
主に畑で栽培されるが、休耕畑や空き地、路傍、草地などにも逸出して生える。河川敷や堤防でも生育することがある。日当たりの良い肥沃でやや乾いた土地を好み、水はけの悪い場所には少ない。

名前の由来：江戸時代にナタネ油用に栽培していた在来のアブラナの近縁種であるが、明治時代初期にヨーロッパから導入された採油植物のため、西洋油菜と呼びならされた。

<農業との関係>

元々は北ヨーロッパで自然雑種として誕生し、油脂作物として収量が多いため、栽培されるようになった。現在では食用油の原料として、さまざまな品種に改良され、世界中で栽培されている。日本でも北海道を中心に17,00ha以上で栽培されている。ただし、栽培畑から逸出し、雑草化していることも多い。特に河川敷や法面などで大量に繁殖し、在来の生態系を攪乱する事例も報告されている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じような場所に生え、良く似たセイヨウカラシナの葉の基部は茎を抱かない。また、セイヨウアブラナより花が一回り小さく、花期もやや遅れ、葉や茎を噛ると苦みがある。

<一言うんちく>

唱歌「おぼろ月夜」で「菜の花畑に入日薄れ」と歌われている菜の花とは、セイヨウアブラナや、在来の油脂植物アブラナではなく、実は作詞者である高野辰之の故郷（長野県）で栽培されていた種取り用の畑の野次菜の黄色い花を描写したものとされています。

<人との関わり合い>

セイヨウアブラナは油脂植物だけでなく、養蜂家にとっては貴重な蜜源植物ともなる。また、採油したナタネ油は、灯明や軟膏の材料にもなり、油を絞ったカス(菜種粕)は良い肥料にもなるなど、さまざまな役立つ植物である。食用素材としても優秀で、「三重なばな」は桑名地方の特産となっている。また、チェルノブイリ周辺では放射性物質の除去植物としても利用されている。一面に広がる菜の花畑は春の訪れを告げる風物詩として、各地で景観植物としても利用されている。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春(菜の花)】

しろたへのわが鶏(かけ)にやる春の日の餌(ゑ)には交れり菜の花の黄も (岡本かの子)
菜の花や月は東に日は西に (与謝蕪村)
菜の花の中を浅間のけぶり哉 (小林一茶)

特徴

1～2年草で草丈は150cmほどになる。通常、秋から初冬に芽生え、幼植物はロゼットで冬を越す。葉は浅く波打ちやや厚く、葉や茎はうっすらと粉白を帯びる。茎の上部の葉には柄がなく、基部が茎を抱く。3～5月に茎頂に花序をのぼし、黄色の4弁花を密集させて咲く。果実は5～10cmで先に嘴がある。



4弁花を茎頂に密集させる



葉の基部は広くなり茎を抱く

分布：沖縄を除く全国

クサノオウ (ケシ 科)

草の黄

別名：にがくさ、タムシ草、白屈菜

ケリドニウム マヌス
学名：Chelidonium majus

アジアティクム
subsp. asiaticum

主な生育場所

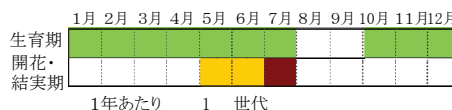
日当たりが良い草地や畦、林縁、路傍、石垣、土手などに見られる。比較的肥沃な場所を好むが、畑や樹園地にはあまり見られない。また、冠水地や乾きすぎるような場所にも生育しない。

名前の由来：黄褐色の乳液を出すことから「草の黄(おう)」とする説や、皮膚病の瘡(くさ)によく効くことから「瘡の王」としたとする説がある。

<農業との関係>

畑や樹園地に生えることがあっても、手入れのあまり行き届かない隅地などにわずかに生える程度なので、害草とはなりにくい。ただし、毒草のため、家畜にとっては有害植物であり、自然状態では摂食を避けるが、牧草等に混ざったり、強制的に食べさせると中枢神経の麻痺や知覚麻痺を引き起こす。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> クサノオウは人里の植物だが、もう少し自然度の高い林縁などの半陰地には花の径が約4cmと一回り大きいヤマブキソウが見られる。ヤマブキソウの葉は3小葉でクサノオウのように深く切れ込まない。

<一言うんちく>

クサノオウの黄褐色の乳液には、ケシのアルカロイドに似た有毒物質が含まれ、作用は弱いものの鎮静作用や知覚麻痺作用があり、かつて尾崎紅葉が胃癌の痛み止めに使用していましたが、毒性が強いため、血圧降下、めまいなどの副作用がひどく、現在では使われることはありません。

<人との関わり合い>

全草に非常に強い毒を持つ植物だが、古来から西洋東洋にかかわらず、薬草としても利用され、湿疹等には乾燥させたクサノオウの煎じ汁を患部を洗うとよくとされる。また、いぼやタムシには、生の茎葉のしぼり汁を何回かに分けて塗る。このように皮膚疾患には「王」と呼ばれるほどよく効くが、内服は非常に危険で死亡例もあるので、食することは絶対に避ける。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

頂上の日当たるところの草の王 (塩崎口恵)



鮮やかな黄色い4弁花。まれに八重咲きもある。



茎には白い縮れ毛が生える

分布：本州以南

コモチマンネングサ（ベンケイソウ科）

セツム プルビフェルム
学名: *Sedum bulbiferum*

子持ち万年草 別名：ボロボログサ、コボレグサ、ツメクサ、ホタルグサ、ベンケイソウ

主な生育場所

水田や畑の畦畔、休耕田、路傍、樹園地、庭先など、日当たりが良く湿り気もあるが水はけも良い場所を好む。石垣の畦に見られるなど、乾燥にも強いが、コンクリートの畦上では見かけは少ない。

特徴

多肉質で全体無毛の柔らかい越年草。分枝が多く、下部は横に這い、節から根を下ろす。茎先は斜上し高さは10-20cmほど。下部の葉は対生するが上部では互生。茎先に黄色い5弁花をつける。種子はできず、葉腋に円形の小さな葉を2〜3対持つムカゴを形成し、これが梅雨時に地面に落ちて根を下ろし、苗となって越冬する。



石垣畦畔の隙間などに多い

名前の由来：開花期前後に葉の腋にたくさんのムカゴをつけ、それがこぼれて株元に多くの苗が見られ、絶えず繁殖を行っているように見えることから、「子持ち万年草」。

<農業との関係>

石垣の畦畔では隙間に生え、除草がしにくいことがある。土畦にも生えるが、草丈が低いこともあり邪魔にならない。ときに耕起前の水田に見られるが、湛水には弱く姿を消してしまう。ムカゴがよくこぼれ、庭先に生えたと厄介な草となる場合もあるが、農地やその周辺でよく見られるものの強雑草化することは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



開花期(葉腋に丸い葉を持つムカゴがみえる)

<類似種> 近年、近縁の外来種が多く見られるようになり、メキシコマンネングサの葉は4〜5枚の輪生で花付きもよい。ツルマンネングサは都市近郊に多く、葉は3枚の輪生で、葉先は尖る。他に「セダム」の名で多くの園芸種が逸出している。

<一言うんちく>

万年草とあるように、年中見られるように思われがちですが、実際には開花後の6〜7月には親植物は枯れてしまい、地面に落ちたムカゴがそのままほとんど成長せずに翌春まで過越し、3月頃から落葉に分枝を始めます。従って、夏から冬にかけてはなかなか見つけにくいのが実状です。



葉は3輪生でむかごをつけないツルマンネングサ

<人との関わり合い>

コモチマンネングサの仲間には多肉植物で乾燥に強いことから、最近、屋上緑化の資材として利用されることが多い。コモチマンネングサ自体は、その名に違い、盛夏期にはムカゴを残して枯れてしまうことから適さない。また、食材として利用された記録も見当たらないが、毒はなく、お浸しなどでクセがなく食べられるようである。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】

雨つよし弁慶草も土に伏し（杉田久女）

分布：沖縄を除く全国

バイカモ（キンポウゲ科）

ラヌンクルス ニッポニクス
学名: *Ranunculus nipponicus* var. *submersus*

梅花藻 別名：梅鉢藻(うめばちも)、金魚藻(きんぎょも)、ウダゼリ

主な生育場所

河川上流部、湧水起源の水路、湧水池など、流れのある15℃前後の水温が安定している環境に生育する。北日本の積雪地帯では低地の水路にも見られる。底質は砂質を好み、水質汚濁には弱い。

特徴

多年生の沈水植物。茎の節から不定根を伸ばし水底に定着。水温25℃以上で生育できない。種子繁殖に加え切れ藻による栄養繁殖も行。水中葉は3〜7cmで、まず3裂しさらに細かく裂け、糸状の裂片となる。浮葉は形成しない。花期は長く、葉腋から伸びた花茎の先に径1.5cmほどの白い5弁花をつける。水中で閉鎖花もつける。

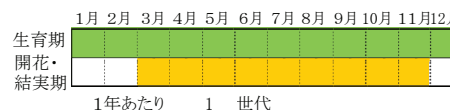


名前の由来：茎葉部は水の中をなびきながら、梅の花によく似た5弁花を水面に付きだして咲かせることから梅花藻。別名の金魚藻とは、金魚鉢に入れると金魚とよく似合いそうなことから。

<農業との関係>

水田に生育することは滅多にないが、湧水起源で水温が安定している水路や積雪地帯の水が潤れない土水路などによく見られる。過繁茂すると通水障害を引き起こす可能性があるが、全国的に減少している植物であるので、徹底的な駆除ではなく、保全にも目を配りながら管理していくことが重要である。例えば、最上流部もしくは湧水域付近の大きな群落は積極的に残すような工夫が必要。

<生活史> 関東地方の例(目安)



湧水起源の水路に繁殖するバイカモ

<類似種> 各地に近縁種が生育し、北海道には繊細なチトセバイカモ、北海道と中部地方には浮葉をつけるイチョウバイカモ、中国地方には葉柄が長いヒルゼンバイカモ、中国〜九州地方には小型のため池にも生育するヒメバイカモなどがみられる。

<一言うんちく>

金魚藻とも呼ばれるバイカモは、金魚鉢でも育つ姿をイメージしがちですが、流水環境かつ15℃前後の水温を好み、底質も選ぶため、栽培は非常に困難な水草です。野外でも生育環境が限られるため、多くの都道府県で絶滅危惧種の指定を受けています。野外での採集は慎みましょう。



砂質の水底に固着

<人との関わり合い>

バイカモは生育地が限られ、河川上流部の清流を代表する花と知られるため、また特に観光シーズンの夏期に多くの白い花をつけることから、バイカモの自生地を観光スポットとしている地域も多い。江戸時代以前にも、「藻の花」として、多くの詩歌にも登場するなど親しまれてきた。また、有毒植物の多いキンポウゲ科のなかでは珍しく食べることができ、岡山県の山村では、バイカモ(正確には変種のヒルゼンバイカモ)をウダゼリと呼び、清流中に伸びた茎先を摘み、湯がいて食材として利用していた。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】 ※梅花藻など清冷な小川や湖沼の流れの中に咲く淡水藻の花を総じて、歳時記では藻の花と呼びます。

藻の花や小舟よせたる門の前（与謝 蕪村） 藻の花やタベの舟は出した跡（田上 菊舎）

玉ならず海王星を御冠にとらむとすなり藻の花がくれ（与謝野 晶子）

溪流の早瀬となれば梅花藻は水のなかにてなびきつ咲く（大島 史洋）

分布：全国

ゲンノショウコ

(フウロソウ科) 学名: *Geranium thunbergii*

ゲラニウム ツンベルギイ

現の証拠

別名：ミコシグサ、タチマチグサ、センニンタスケ、コウバウグサ、フウロソウ

主な生育場所

野原、路傍、畦畔、法面、樹園地などの草地に普通にみられる。日当たりの良い場所を好むが、草丈の高い草などで被陰された半日陰でも生育する。やや乾いた場所に多いが、湿地周辺でも見られる。

特徴

多年生で全体にやや下向きの毛が多い。茎は地面を這ってよく分枝し、茎先は立ち上がる。葉は対生し、長い葉柄の先に掌状に5深裂する葉をつける。上部の葉は3裂。夏から秋にかけて茎先や葉腋から花柄を伸ばし、1～1.5cmほどの白または赤色の5弁花を2個ずつつける。果実は熟すと5裂し、種子を巻き上げ遠くに散布する。

名前の由来：昔からよく効く胃腸薬として知られ、煎じて飲むと、たちまちのうちに効果が現れるということで「現の証拠」。別名のみこしぐさは、果皮が熟すと御輿の屋根のように巻き上がることから。

<農業との関係>

水田畦畔や樹園地などでも見られ、耕起には弱いので、水田内や畑地内に生育することはほとんどない。草丈の低い草地を好み、比較的刈り取りにも強いので、畦畔草地の適切な管理指標種に利用できる。除草剤にも弱いようで、除草剤の散布歴のある水田畦畔には見ることができない。近年、手入れの悪い畦畔や除草剤管理の畦畔が増え、農耕地周辺では減少しつつある。

<生活史>

関東地方の例(目安)



東日本に多い白花タイプ(花弁に紅脈が目立つ)

<類似種>

外来種のアメリカフウロの葉は、切れ目が深く3～7裂し、裂片はさらに2～3回切れ込む。開花期が5～6月とゲンノショウコより早い。近年、各地で逸出し雑草化している栽培種のヒメフウロには、独特の臭気があり、全草が粘る。

<一言うちく>

薬草として下痢止めの主成分はタンニンの一種ゲラニンですが、ゲラニンは下痢としても働き、相反する二面性を持つため、飲み過ぎても便秘になりやすいです。このようにゲンノショウコは副作用が少ないのも特徴で、昔からお茶として常飲され、「医者いらず」とも呼ばれています。



西日本に多い赤花タイプ

<人との関わり合い>

下痢止めとしては、真夏の花が咲いている時期に、全草を採取し、水洗い後日光乾燥させたものを煎じて飲む。また、健胃、整腸、利尿、便秘、高血圧の予防に効果があり、副作用の少ない優れた薬草として、昔から利用されてきた。現在でも製薬用の材料として需要が高いが、栽培が難しいため、朝鮮半島から輸入されている。また、食用にもなり、葉と花を低温でゆっくゆっく揚げて天ぷらにすると、水に晒し細かく刻んで佃煮にすることもできる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

夕明りげんのしょうこを次々に人たづさへて現るる坂 (与謝野 晶子)

げんのしょうこのおのれひそかな花と咲く(種田 山頭火)

着火点げんのしょうこの一輪に (増田 明美)

分布：沖縄を除く全国

クズ

(マメ科) 学名: *Pueraria lobata*

プエラリア ロバータ

葛

別名：カタクリ、カイバ、クゾ、ウマフジ、ウマノボタモチ、クズツバ、カジネ

主な生育場所

山野、林縁、畦畔、休耕地、放棄地、荒地、河原、堤防、路傍など日当たりの良い乾いた土地に多い。果樹園にも侵入することがある。つる植物なので、崖面に垂れたり、木などにもよじ登る。

特徴

多年生のツル植物。茎は茶色で、長く伸び、基部は木質化する。全体に褐色の粗い毛がある。葉は3小葉で互生し、先の葉は浅く2～3裂することが多い。7～9月ごろ、葉腋に2cmほどの赤紫色の蝶形花を多数総状につける。花後、褐色の堅い長い毛で覆われた長さ6～8cm、幅約1cmのさや果をつける。さやには約10個の種子が入る。

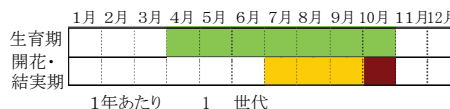
名前の由来：かつて大和国の吉野郡国栖(くず)地域(現在の吉野町)が葛粉の産地であったことから、国栖カヅラやクズと呼ばれるようになった。

<農業との関係>

畑や果樹園、草地を粗放管理にすると、たちまちのうちにクズに覆われてしまうことがある。地上部を刈り払っても地下の根茎からすぐ再生するために、ひとたび耕地に侵入すると根絶が難しく、休耕地や放棄地の再生の妨げとなり、景観的にも荒れた印象を与えるため、近年は嫌われることが多い。また、育林地では幼樹に絡みつき、枝を折ったり樹形を悪くさせるので、害草として扱われる。

<生活史>

関東地方の例(目安)



地面を這うツル

<類似種>

近年、河原や畑の周辺等でクズと競合するようになった外来種のアレチウリはクズと同じく旺盛なツル植物だが、葉は浅く切れ込むもののクズのように3小葉とならず単生する。また花は目立たない1cmほどの黄白色で、果実に刺がある。

<一言うちく>

クズの紫皮力が注目され、外国では“KUZU”として緑化や土壌流失防止、飼料用として、導入されることがありますが、アメリカでは各地に逃げ出し害草化してしまいました。国際自然保護連合によると、クズは世界の侵略的外来種のワースト100に指定される厄介な草としても知られています。



よじ登ったクズで覆われた木

<人との関わり合い>

太くて長い根には大量のデンプンが含まれ、古来から「葛根(くずね)」から精製された葛粉は、葛餅や葛湯、料理のとりみ付けなどとして利用されてきた。また、根を乾燥させたものは、「葛根(かっこん)」と呼ばれ、生薬として、肩凝り、滋養強壮、鎮痛などに効果がある。さらに、ウマや牛などの家畜が好んで食べるため、飼料としても重宝されてきたほか、ツルを利用して簾などが編まれたり、ツルを煮て取り出した繊維で編んだ葛布は衣服や壁紙にも利用されるなど生活に欠かせない有用植物だった。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】

葛の葉の恨み顔なる細雨哉 (蕪村) あなたなる夜雨の葛のあなたかな (芝 不器男)

足柄の箱根の山に延ふ葛の引かば寄り来ぬ下なほなほに (万葉集十四)

あらし吹く真葛が原に鳴く鹿は恨みてのみや妻を恋ふらん (俊恵)

葛の花 踏みしだれて、色あたらし。この山道を行きし人あり (釈 道空)

分布：沖縄を除く全国

アキノエノコログサ（イネ科）学名：Setaria faberi

秋の狗尾草 別名：猫じゃらし、ネコノオ、ケムシ、トアワ、ネコノシッポグサ、ノアワ

主な生育場所

畑地、田畑の畦、休耕地、野原、路傍、空き地、土手など、やや乾いた場所に普通に見られる。日当たりの良い場所を好むが、樹下などの日陰でも生育する。湿った場所にはあまり見られない。

特徴

一年草。茎は細く、基部は地を這って枝分かれし、節からも根を下ろす。葉は線形で、長さ30～40cmに達し、幅2cmほど。葉の表面に短毛が密生する。葉舌は毛状。7月～11月ごろに桿の先にアワに似た円柱状の穂をつける。穂の長さは5～12cm、幅0.7～1cmで先は垂れる。芒は長さ6～15mmで種子の基部から5～8本出る。

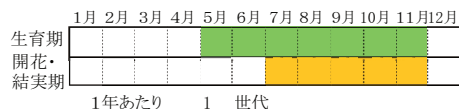


名前の由来：穂を狗(イヌ)の子のしっぽ(尾)に見立てて、イヌコログサが転化してエノコログサに。また秋に目立つのでアキノエノコログサ。別名の猫じゃらしとは、穂に猫がじゃれつくことから。

<農業との関係>

エノコログサの仲間は、畑地や果樹園でメヒバと並んで夏～秋季の代表的なイネ科一年生雑草である。特にアキノエノコログサは他のエノコログサの仲間と比べて、大株となりやすく、大豆畑や不耕起畑で雑草害を引き起こすこともある。また、果樹園の草生管理下では、アキノエノコログサを中心とするイネ科一年生雑草が繁茂し、クローバーなどカバークロップの生育を抑制してしまうことがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> エノコログサは全体小柄で、穂の先が垂れ下がることがなく、種子も約2mmと小さい。コブキンエノコロやキンエノコロの種子は約3mmとアキノエノコログサと同じ程度だが、穂は直立し、芒も短い。オオエノコロの穂は長さ15cm以上に達する。

<一言うちんく>

日本を含む東アジア原産のアキノエノコログサは、1960年代にアメリカ大陸に帰化し、大豆畑等に蔓延して強害雑草となっています。最近の研究では、輸入飼料を経由して、ますます強害雑草化したアキノエノコログサが日本等に再び帰ってきている可能性が指摘されています。

<人との関わり合い>

エノコログサの仲間は、アワの原種や近い種類なので、アワと同様に食べられる。また、殻付きのままフライパンで煎ると、微小ながらポップコーンのようにして食べることができる。また、昔から芒が多く特徴的な穂は、子どもの身近な草花あそびの材料として利用される。例えば、毛虫に見立てたり、机の上などに置いて指1本で穂を押さえると前に進むことからレースをしたり、“猫じゃらし”の名のとおり、猫の顔の前で穂を揺らすと猫が穂に飛びつくようにして遊ぶ。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 ※えのこ草、猫じゃらし：エノコログサ一般

よい秋や犬ころ草もころごと（小林 一茶） 犬の塚狗子草など生えぬべし（正岡 子規）
秋の野に花やら実やらえのこ草（金子 楚常） えのこ草道より下になりけり（岩間 乙二）
香にふれよ菊のあたりのゑの子ぐさ（加藤 晩台） 七草にもれて尾をふる猫じゃらし（富安 風生）



種子は約3mmで芒(のぎ)は芒は長さ6～15mm



エノコログサ
※穂はやや細く先が垂れない

分布：全国

イヌガラシ（アブラナ科）

犬芥子 別名：ヘビクサ、ツミナ、アゼダイコン、アゼガラシ、ノガラシ

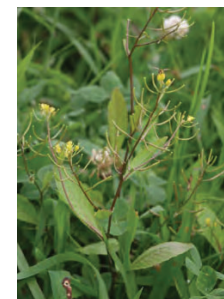
学名：Rorippa indica

主な生育場所

田畑の畦、畑、休耕地、路傍、河川敷、水路わき、ため池の縁など、湿った環境によく見られる。春耕前の水田にも生育するが、耕うんされやすい水田内よりも畦畔での生育が多い。

特徴

多年生。秋に発芽し越冬して春に花を咲かせることが多い。白色の直根は深く地中に伸びる。茎は無毛で直立し高さ20～50cmほど。葉は互生し、下部の葉は不揃いに羽状に分裂するが、上部の葉ほど切れ込みが浅くなる。春から秋にかけて枝先に5～7mmの黄色の4弁花を多数つける。果実は長さ16～20mm、幅1mmほどの円柱形。

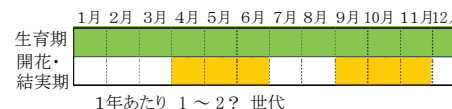


秋の野辺に咲くイヌガラシ

<農業との関係>

畑地や果樹園で普通に見られる雑草で、主に秋に種子から発芽してロゼットで越冬し、暖かくなる同時に伸長して開花・結実するため、春作の雑草と扱われることが多い。しかし、秋以外に発芽する個体もあり、果樹園や畑地では通年の雑草となる。また、刈り取りにも強く、刈り残った株からも再生するなど、絶えることがない。花が咲くと目立つが、多発しない限り、それほど害となることは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



花は黄色の4弁花

<類似種> イヌガラシより小型で上部の葉まで切れ込みが目立ち、果実に柄がないコイヌガラシは主に氾濫原に見られる。イヌガラシと混生すること多いスカシタゴボウは葉の切れ込みが大きく、果実は長楕円形で長さ5～7mm、幅1.5～2.5mmと太く短い。

<一言うちんく>

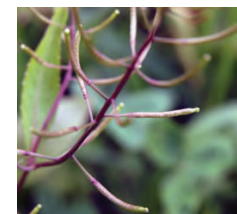
イヌガラシは、有史以前にイネが大陸から導入された際に、随伴して日本に渡来してきた史前帰化植物とされています。外来種のモンシロチョウとともに里山でよく見る中型の白い蝶の代表種スジグロシロチョウは、このイヌガラシを食草とするため、やはり史前帰化種と考えられています。

<人との関わり合い>

全草にちよつと辛みがあり、この風味を活かして若菜やつぼみを和え物や汁の実に利用できる。また、冬から春にかけてきれいなロゼット葉が茎先の柔らかな葉を摘んで、よく洗ったあとサラダや天ぷらにしても美味しい。また、葉草ともなり、茎葉は心臓病によいとされ、種子を煎じて飲んで、咳止めや利尿薬として用いられる。また、種子は花粉症の症状を軽減させる効果もあるという。役に立たないものの代名詞である“イヌ”の名が付く植物であるが、意外と利用価値のある草花である。

<俳句や短歌への登場>

季語は一応、春とされているようですが、イヌガラシの名を直接詠み込んだ俳句・短歌等は確認されませんでした。イヌガラシを含め、アブラナ科の黄色い花をつける植物は、一様に「アブラナ」や「カラシナ」とされ、これまで区別されてこなかったことありますが、特にイヌガラシは通年、野辺に見られるため、季節感を重視する俳句等にはあまり取り上げにくい草花であったかも知れません。



開出する円柱形の果実

分布: 全国

オオオナモミ (キク科)

学名: *Xanthium orientale*

subsp. *orientale*

雄菜採み

別名: ひつつきむし, とつつき, ホンダマ, バカの実

主な生育場所

日当たりの良い荒地や路傍, 河川敷, ため池の縁, 畑, 樹園地, 飼料畑などで見られる。果実は動物や人間の衣服などにくっついて散布されるため, 農村部だけでなく都市周辺でもよく見かける。

特徴

高さ0.5~2mにも達する北米原産の一年生帰化植物。全体に短毛を敷き著しくざらつく。茎は直立し太く, よく枝分かれする。葉は浅く3~5裂し, 縁に不揃いの鋸歯がある。夏から秋にかけて葉腋に短い花序を出し, 多数の果実をつける。果実は長さ2~2.5cmと大きく, 4~6mmの刺が密に生え, 先端に大きな2個のくちばしが突き出す。



名前の由来: 毒蛇に噛まれたときなどに, 痛みを和らげるために生の葉を揉んで(なもみ)傷口につけた植物のうち, 雄々しかったのがオナモミ。外来種の大オナモミはさらに大型だったため。

<農業との関係>

近年, 飼料畑で増加し, 草高が高くなることからほ場全体を覆い尽くしてしまうことがある。また, 有毒な成分が含まれ, 家畜が誤って食べると食欲減退や中毒を招くため, 牧草地では刈り取り駆除が必要となる。ただ, 飼料作物との競合には比較的弱く, 早期に作物の生育が確保されるとオオオナモミの生育はかなり抑制される。また, 開花期以前に地際近くを刈り取れば, 種子生産を抑制できる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



2本の大きな嘴が突き出した果実。刺の先は鈎状。

<類似種>

在来種のオナモミの果実に敷く刺の密度はオオオナモミよりも低く, 先端の2個のくちばしも小さい。また, 帰化植物のイガオナモミは, 果実の刺がオオオナモミより密で刺の表面に縮れた毛が生え, 茎に黒紫色の線や斑点が出やすい。

<一言うんちく>

1948年にスイスのジョルジュ・デ・メストラル氏は, 自今の服や犬の毛にぎっしりくっついていたオナモミの果実をヒントに, 果実に密生する先端が鈎状の刺の構造を応用して, 面ファスナー(マジックテープ)を発明しました。身近な生物の仕組みも大発明のヒントとなるよい例ですね。



果実を割ると大小2つの種子がある

<人と関わり合い>

昔からオナモミの仲間果実は, 代表的なひつつきむしとして, 果実を投げ合うなど子どもたちの野良の遊びの材料だった。また, 家畜が食べると中毒症状を起こすが, 若菜や種子は人の食用となる。天日乾燥したものは「蒼耳(そうじ)」、成熟した果実は「蒼耳子(そうじし)」と呼ばれる生薬で, 解熱, 頭痛, 痛み止め, 解毒などに効用があるが, 毒性もあるので多用は避ける。果実から絞った油にはリノール酸が多く含まれ, 動脈硬化の予防にも役に立つ。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】※蒼耳: オナモミのこと。

風過ぎてより蒼耳のうすみどり (福谷 俊子)

足音をあつめオナモミばかりなり (永末 恵子)

をなもみを くっつけ合うて おくれゆく (近藤 忠)

君の背の をなもみ ひとつ そのままに (斎藤 朝比古)

尊さと遠さは同じことだけど川べりに群生のオナモミ (吉岡 太朗)

分布: 全国

ハハコグサ (キク科)

学名: *Gnaphalium affine*

母子草

別名: ホウコグサ, ゴギョウ, キバナグサ, トノサマヨモギ, カラスノオキユウ

主な生育場所

田の畦, 入水前の水田, 畑, 樹園地, 荒地, 休耕田, 野原, 庭先など, 人里や農地周辺の至るところに普通にみられる。日当たりの良いやや湿った場所を好むが, 冠水するような場所には生えない。

特徴

全体に白い綿毛で覆われた越年草ときに多年生。茎は根元から分枝し, 直立する。冬期はロゼット葉で過ごし, 茎につく葉は柔らかくへら型で互生し縁はやや波打つ。4~6月ごろ, 枝先に舌状花がなく黄色の筒状花のみ集まった頭花をつける。ロゼット葉は花期には枯れる。花後に長さ約2mmの冠毛のある0.5mmほどの種子をつける。

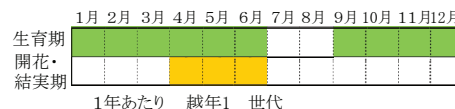


名前の由来: 名の由来には多説あり, 葉や茎が白い綿毛をかぶっている様子から, 母親が子を包みこむように見えたことから, 母子草(ハハコグサ)の名がついたという説が一般的である。

<農業との関係>

ハハコグサは, 縄文時代後期にムギ類の栽培とともに朝鮮半島経由で中国大陸から日本列島に渡来してきた史前帰化植物のひとつとされている。従って, 今でも水田裏作の小麦や大麦栽培時に多く生えることがあり, 雑草害を引き起こす場合がある。また, 芝栽培でも問題となることもある。しかし, 春耕や入水後の水田では姿を消し, 害草となることはない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



枝先に集まった筒状花

<類似種>

チチコグサの頭状花は黄緑色で, 包葉がよく目立ち, 葉の幅はハハコグサより狭く, 表面にはあまり毛を生やさない。外来種のウラジロチチコグサやチチコグサモドキは, 葉腋にも集合花をつけ, いずれも花の色は淡褐色~紅色となる。

<一言うんちく>

牧野富太郎博士によれば, 茎の「白毛が」は「おけち」で「いる」ので, 「ハハケル」と呼ばれ, 母子の字が充てられたとされました。また, 古名ゴギョウ(御形)とは, 平安時代の史徳天皇の祖母と父が相決いで亡くなったとき, 不思議と野辺にハハコグサの姿がなかったとの故事によります。



左: チチコグサモドキ, 右: ハハコグサのロゼット葉

<人と関わり合い>

春の七草のひとつとして, 旧暦の1月7日ごろに摘んだ若菜を茹でて七草がゆにしたり, ヨモギと同様に草団子や草餅の材料にする。また, 綿毛がたくさん生えている若菜は天ぷらにしても美味しい。生薬では鼠麴草(そきくそう)と呼ばれ, 開花期に全草を採取し, 水洗いして天日でよく乾燥させたものは, 咳止め, 痰止めに良いとされる。また, 全草を黒焼きにしてゴマ油と混ぜたものは, 皮膚病や田虫に効くとされる。古来には, 乾燥させた花を煙草にして煙を吸わせ, 胆石治療にも使われていた。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】老いて尚なつかしき名の母子草 (高浜虚子) すりこぎや父はおそろし母子草 (斎部路通)

花の里心も知らず春の野にいろいろ摘めるははこちひぞ (和泉式部)

ははこ摘むやよひの月になりぬればひけぬらしな我が宿の桃 (曾禰好忠)

はるの田を耕し人のゆきかひに泥にまみれし鼠麴草の花 (長塚 節)

分布：全国

タチツボスミレ (スミレ科)

立ち坪堇 別名：ヤブスミレ、ミツバタチツボスミレ

学名： *Viola* *grypoceras*

特徴

種子もつけるが、主に短い地下茎で繁殖する多年生。根出葉には長い柄があり、心形の葉をつける。皮針形の托葉の縁は櫛の歯状。花期に節々から葉や花をつけた茎を伸ばす。花は薄紫色の5弁からなる左右相称花。花冠のつけ根が後方に伸びた距(きよ)は短円柱形で約6-8mm。花弁がなく萼片のみの閉鎖花も多くつくる。

学名： *grypoceras*



名前の由来：宅地内や建物の隙間などに設けられる小さな庭は「坪庭」と呼ばれ、そのような庭先によく見られるスミレで、かつ茎があり立ちあがるように見えるので、立ち坪堇。スミレの語源は不明。

<農業との関係>

タチツボスミレは里山に最も普通なスミレであるが、他のスミレよりも、耕地周辺で見かけることは意外と少なく、果樹園や畑地の縁、棚田や谷津田の法面草地などに見られる程度である。また、花も綺麗であることから、スミレの仲間は作物と競合する雑草として扱われることは少なく、農作業の手を休める際に傍らで癒してくれる身近な野草として、古来から俳句や短歌などによく取り上げられている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> タチツボスミレとともに里山によく見られるツボスミレの花は小さく白色で茎は地表を這う。スミレの茎は立ち上らず花は濃い紫色。西日本には葉が細長い三角状となるナガバタツボスミレや花に香りがあるニオイタチツボスミレが分布する。

<一言うんちく>

野辺で最も多く見られるスミレで、下記の山部赤人が万葉集で詠い、摘めるほど群生する野辺の「すみれ」とは、タチツボスミレのこととされています。赤人ならずとも、春の野はスミレなどさまざまな花が咲き乱れ、思わず帰ることを忘れて春晩を迎えてしまうこともあるかも知れません。

<人と関わり合い>

スミレはいずれの種類も食用となり、万葉の時代から食されていたという。タチツボスミレの若葉や花も食べることができる。天ぷらにしたり、軽く茹でて、水に晒し、お浸しやゴマ和えなどにする。空色の花を活かして、フルーツデザートやカナッペのトッピング、野菜サラダやスープなどに散らしてもよい。また、スミレにはルチンが含まれ、高血圧に良いとされるほか、清熱解毒作用のある薬草として、慢性喉痛、腫れ物、打撲痛などにも用いられるようだ。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春】春の野に すみれ摘みにと 来しわれぞ 野をなつかしみ 一夜寝にける (※万葉集 山部赤人)
山路来て何やらゆかしすみれ草 (松尾芭蕉) 葦咲き崖にやさしき日ありけり (石塚友二)
かたまって薄き光の葦かな (渡辺水巴) 風軽したちつぽすみれ共に摘む (酒井 綱子)
三月の笑顔のような山道のタチツボスミレ其処此処に咲く (鳥海昭子)

分布：北海道を除く全国

アメリカフウロ (フウロソウ科)

亜米利加風露 別名：ロシソウ(鷲嘴草)

学名： *Geranium carolinianum*

特徴

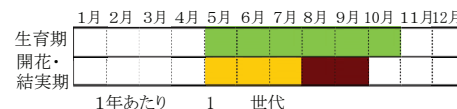
北米原産の一年草または越年草。茎は基部からよく分岐して高さ40cmほどになる。全体に白い軟毛があり、円形で深く5裂しさらに細裂する葉には長い柄がある。葉腋から伸びた花柄の先に径0.5cmほどの淡紅色の5弁花を数個つける。果実の長さは約2cmで稜があり、5個の種子を入れる。果実が熟す頃から葉は赤紅葉をはじめる。

名前の由来：アメリカから渡来したフウロソウの仲間であることから名付けられた。別名の鷲嘴草とは、細長い果実をサギの嘴に喩えた。

<農業との関係>

暖地では、麦や冬野菜の畑で雑草化し、富栄養な環境で繁茂するため、ときに強害雑草となる。しかし、沖縄県では、アメリカフウロがジャガイモ青枯病に対する抗菌成分(Ethyl 3,4,5-trihydroxybenzoate)を有することを利用して、アメリカフウロを土壌中に飼込むことによって、薬剤処理に頼らずにジャガイモ青枯病の防除を行っている。雑草を生やすことによって作物の病害防除に貢献する好例。

<生活史> 関西地方の例(目安)



<類似種> 在来のゲンノショウコの葉は深く切れ込まず、花期は夏から秋にかけてで花の大きさも径1~1.5cmと大きい。ヨーロッパ原産の外来種オトメフウロは、葉の切れ込みも深くアメリカフウロによく似るが、花は径7mmとやや大きく花色は紅紫色と濃い。

<一言うんちく>

ゼラニウムと呼ばれる園芸植物も、かつてはアメリカフウロやゲンノショウコと同じ仲間とされましたが、18世紀にテンジクアオイ属(ペラルゴニウム)として分離されました。しかし、古くからゼラニウム、ゼラニウムとして親しまれてきたので、今でもその呼び名が残っているのです。

<人と関わり合い>

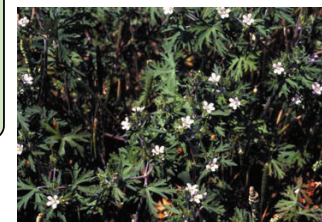
ゼラニウム(フウロソウ属)の仲間は、5弁の綺麗な花をつけるものも多く、観賞用として古くから栽培されてきた。また、ゲンノショウコに代表されるように薬効を有する種類も多いが、アメリカフウロには確たる薬効成分はないとされる。また、昭和初期以降に侵入した比較的新しい帰化植物なので、食用の記録もみつからない。しかし、ジャガイモやトマトの青枯病の防除に有効な環境に優しい生物防除資材として、最近、注目を浴びてきている雑草である。

<俳句や短歌への登場>

【季語：初夏】初夏やアメリカフウロつつましく (草花俳句 http://orangestudio.homeip.net/gallery/org/userid33129_page97 より)



茎先に小さな淡紅色の5弁花をつける



富栄養な畑などではよく繁茂する



基部まで深く切れ込む葉

分布：沖縄を除く全国

ネジバナ (ラン科)

学名: *Spiranthes sinensis* var. *amoena*

振花

別名：モジズリ、モジバナ、ネジレバナ、ネジリバナ

主な生育場所

芝地、路傍、庭先、畦畔、法面、樹園地などの日当たりの良い草地に生育する。乾燥気味よりもやや湿り気のある草地で良くみられるが、冠水する場所には生えない。定期的に刈られる草地にも多い。

特徴

種子でも繁殖するが、肥大した多肉根でも越冬する多年生。茎は細くて直立し草高は10~40cm。ほとんどの葉は根生し、幅3~40mm長さ5~20cm。花茎には1~3個の鱗片葉がつく。花序は長さ5~15cmで白い毛があり、5mmほどの淡紅色の花を螺旋状につける。花は兜状で、唇弁は色が淡く、緑や内側に短毛状の突起が密生している。



右巻のネジバナ

<農業との関係>

畦畔や樹園地などにも生え、雑草的性格が強いが、草高が低く、また綺麗な花を咲かせるため、駆除の対象となることはほとんどない。むしろ、草刈り機で刈り払う際にわざわざ本種を残して刈ることも多い。

<生活史> 関東地方の例(目安)



花をみると小さくてもランであることがわかる

<類似種> 奄美大島以南の琉球諸島には、ネジバナよりも大型で花色が濃く、派手な感じのするナンゴクネジバナが分布する。また、ネジバナの花には香りがなく、ナンゴクネジバナの花は良い香りがする。

<一言うんちく>

ネジバナの螺旋状に並んで咲く花は、右巻と左巻とがあり、ほぼ1:1となるようです。しかし、地域や生育環境によっては、右巻・左巻のどちらかが多く見られ、また花茎の途中で巻き方が変わる個体もあるとのこと。皆さんのお近くのネジバナの花は、右巻ですか。左巻ですか。



やや湿った草地に生育

<人との関わり合い>

ラン(蘭)の仲間の野生種はめったに見ることができないものが多い中、ネジバナは人里で普通に分布する最も身近なランといえる。しかし、他のランと同様、栽培は難しく、野外でも同じ場所では安定的にみられない。花は小さくても、可憐なランの花なので、観賞用の山野草として販売されることもあるが、その多くは数年で消滅してしまう。また、本種に薬効や食用の記録は見当たらない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

振花のまことねぢれてゐたるかな(草間時彦) 振花はねぢれて咲いて素直なり(青柳志解樹)
みちのくのしのぶもじずり 誰ゆえに 乱れむと思ふ 我ならぬに(河原左大臣:百人一首)
なすことのなべてよぢれてゆく如き思ひに仰ぐもじずりの花(大西民子)

分布：沖縄を除く全国

ヒルガオ (ヒルガオ科)

学名: *Calystegia pubescens*

昼顔

別名：オリコバナ、ツンブーバナ、オコリズル、かみなり花、天気花、雨降り花

主な生育場所

道ばた、荒地、草地、林縁、畦畔、畑、樹園地、河川敷などに見られる。日当たりの良い場所を好み、日当たりを求めツルで水平・垂直方向に伸びていく。湿った場所に少ないが、乾燥には強い。

特徴

地下茎で増える多年生。葉は互生、茎にはわずかに細かい毛が生えることがある。1~4cmの葉柄の先に5~10cmのほこ形まの葉をつけ、葉先は尖らず葉の基部は後方に張り出し裂けない。夏に葉腋から長い花柄を出し、白〜淡紅色で直径約5cmの漏斗状の花を単生する。萼は2枚の卵形の大きな包葉に包まれる。通常、結実しない。

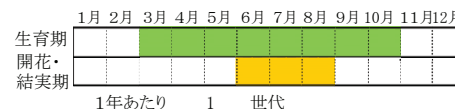


ヒルガオ：葉の基部は後方に張り出している。

<農業との関係>

ヒルガオの仲間、いずれも繁殖力がすさまじく、耕起などで切断された地下茎の断片から容易に発根するため、トラクターや農具に付着し各地の畑に侵入・定着する機会が多い。また、ツルで作物に絡みつき、また一株からの地下茎から5万個以上の萌芽を生産することも報告され、大豆やトウモロコシ畑などで繁茂すると収穫が皆無となることも。定着すると根絶が困難な強害雑草の一つである。

<生活史> 関東地方の例(目安)

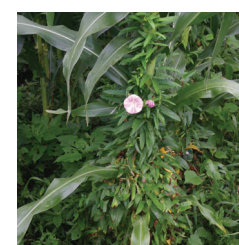


コヒルガオ：葉の基部は横に張り出し二裂する。

<類似種> よく似たコヒルガオの花は直径3~4cmとやや小さく、花柄に翼があり、葉先は尖り、葉の基部が横に張り出し、二裂する。外来種のセイヨウヒルガオの花は直径3cmと小さく、花の基部につく包葉も小型、また葉柄は短く葉もヒルガオより小さい。

<一言うんちく>

ヒルガオの花はフランスで花言葉は「昼の美人」とされ、日本でも万葉の時代から「容花(かおばな)」として容姿端麗な女性を思い浮かべるほど美しい花とされてきました。一方、繁殖力旺盛な面から「危険な幸福」との花言葉も。またツルが絡みつく様子から「絆」の花言葉もあります。



トウモロコシに絡みついたヒルガオ

<人との関わり合い>

夏の野辺に目立つ花は古来から詩歌の材料となってきた。一方、畑地では蔓延すると駆除が困難で雑草としての一面も強い草である。また、若葉の先を摘んでさっと塩茹でしたものは酢味噌等で食べられ、細長く白い地下茎もよく泥を落として煮物、揚げ物にできる。花も、酢を落とした熱湯にくぐらせ、甘酢などで食べる。開花期の全草を天日乾燥したものは生薬で旋花(せんか)と呼ばれ、裁断し煎じて飲むと、利尿、疲労回復、強壮に良いとされる。生の葉の絞り汁は、虫刺され、切り傷にも使える。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

昼がほやともに刈らるゝ麦畠(天野桃隣) 昼顔に草鞋を直す別れ哉(正岡子規)
高円の野辺の容花(かおばな)面影に見えつつ妹は忘れかねつも(万葉集・大伴家持) ※容花=ヒルガオ
遠方(をちかた)のものの声よりおぼつかみどりの中のひるがの花(与謝野晶子)
線路沿ひの夏くさはらの昼顔の夢のはかさ十歳ごろより知る(前川 佐美雄)

分布：全国

ヒツジグサ（スイレン科）

学名：*Nymphaea tetragona*

羊草

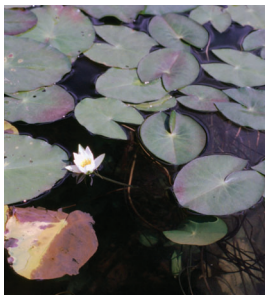
別名：スイレン、カメバス、コレンゲ、カッパグサ、ハクセン（白鮮）

主な生育場所

ため池や湖沼、湿原の池塘など、恒常的な止水域に生育。腐植由来の有機物が多く溶存する腐植栄養湖や貧～中栄養の池や湖沼に見られ、富栄養な環境で見かけることはない。また古い池に多い。

特徴

多年生の浮葉植物。太く短い塊状の根茎から沈水葉と浮葉を伸ばす。沈水葉は薄く、幅の広い矢尻形～半円形。浮葉は楕円～卵形で、基部は深く切れ込み、裏面は赤紫色を帯びる。花は径3～7cmで、開花は2～3日続き、午前中に開き夕方閉じることを繰り返す。花弁は白色でガクは4枚。葉や花は北日本に行くほど大きくなる。



名前の由来：園芸スイレンが早朝から開花するのに対し、羊の刻（午後2時ごろ）から開花するとされたことから。実際には、お昼前から開花はみられるが、暑い日中の盛りに純白の花は目立つ。

<農業との関係>

水田に生えることはないが、ため池にはかつてよく見られ、ため池を水源とする地域では馴染みの水草。熱帯スイレンや温帯スイレンなど外来種由来の園芸スイレンは地下茎を泥中に伸ばし繁茂するため、ため池では取水障害などを引き起こすが、在来種のヒツジグサの根茎は横に広がらず、また全体に小型のため、ため池で障害となることはほとんどない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 観賞用の園芸スイレンは、葉や花がヒツジグサより大きく鋸歯や模様があるものが多い。また、花色が赤や、ピンク、黄色、青色、紫色など白以外のものはすべて園芸種か外来種。花が白色でも、花弁数が多いことでヒツジグサと見分けられる。

<一言うんちく>

日本の在来種であるヒツジグサですが、近年、各地で減少し、全国26都府県で絶滅危惧種に指定されています。外来種の園芸スイレンが各地で増殖しているのに対し、ヒツジグサは園芸スイレンよりも富栄養化などの水質の悪化に弱く、また埋め立てによる生育地の消失が大きな要因です。

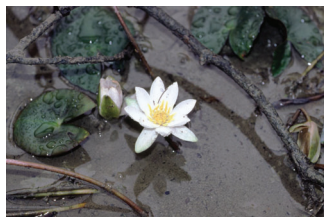
<人と関わり合い>

清楚な花を咲かすヒツジグサは、農家の庭先の水盆で観賞用に栽培されることも多かったが、今や各地で減少していることもあり外来種の園芸スイレンにとって代わられてしまった。アフリカやインドでは、種子や根茎を食べている報告があるが、日本では食用の記録はない。また、花には止血・鎮痛作用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

賜りし刻や光やひつじ草（岡本まち子） 山の池底なしと聞く未草（稲畑 汀子）
水面にたどりつきたるヒツジグサ晩夏のひかり集めてひらく（高田流子）
ひつじ草白きひつじのごとき花泥炭くさき水にしづまる（生方 たつゑ）



花も葉もヒツジグサよりも大柄な園芸スイレン

分布：北海道を除く全国

ザクロソウ（ザクロソウ科）

学名：*Mollugo stricta*

石榴草

別名：スズコクサ、モモグサ

主な生育場所

畑や路傍、水田の畦、庭先など、日当たりのよい乾燥した土地によく見られる。攪乱を受けやすく、他の植物が定着しにくい場所を好み、草丈の大きな植物が定着してしまうといつの間にか消えてしまう。

特徴

高さ10～25cmほどの小型の1年草。全体無毛で、茎は細く稜があり根元からよく分枝する。葉はやや光沢があり、3～5輪生するが、上部の葉はときに対生。夏から秋にかけて葉腋から細い花柄を伸ばし、花をつける。花弁はないが、径0.5cmほどの黄緑色の5枚の萼が花のようにみえる。果実は球形で熟すと果皮が裂けて種子がのぞく。



名前の由来：なめらかな楕円形で光沢のある葉がザクロの葉に似ていること、熟した果実が裂けて中の種子が見えることもザクロの実を思わせることから、「石榴草」と名付けられた。

<農業との関係>

関東以西で発生で多く、畑地や果樹園にもよく生えるが、小型植物であるため、強雑草にはなりにくい。水田では、田植え前にアゼ塗りを行った畦に多くみられ、アゼ塗りによる攪乱によく適応していることが伺える。近年、畑地や畦などでは、明治期に帰化した近縁種のクルマバザクロソウと混生・競合していることも多い。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 熱帯アメリカ原産で外来種のクルマバザクロソウは、輪生する葉はやや丸みを帯びて4～7枚とザクロソウよりも多く、葉腋から伸びる花柄は2～5mmと短く花序は傘状に広がる。

<一言うんちく>

かつては、園芸種マツバギクなどと同じ仲間と考えられていましたが、今ではザクロソウ科として独立しています。混同されやすいのも地味な植物だからかも知れません。日本で見られるザクロソウ科は、今のところ、在来種のザクロソウと外来種クルマバザクロソウの2種しかありません。

<人と関わり合い>

インドネシアでは若い葉を野菜として利用しているという。また中国や東南アジアでは、「粟米草」と呼ばれ、全草を下痢や腹痛の薬として利用している。生薬名は「地麻黄（じまおう）」。

<俳句や短歌への登場>

ざくろそう、石榴草、ともに俳句や短歌などで詠われた事例はみつかりませんでした。注意すればよく足元で見つかる植物なのですが、気付かれなかったのか、それとも題材になりにくかったのでしょうか。炎天下に耐えて、小さいながらも花や実をつける姿からは、いろいろと感情が湧いてきそうなのですが、今後、注目していきたい夏の草花の一つです。



ザクロの葉に似た輪生葉



黄緑色の地味な花(萼片)と熟して裂開した果実(右上)

分布: 全国

メヒシバ (イネ科)

学名: *Digitaria ciliaris*

雌日芝 別名: メシバ, 地縛(じしばり), ひじわ, 相撲取草(すもうとりぐさ), ほとくい

主な生育場所

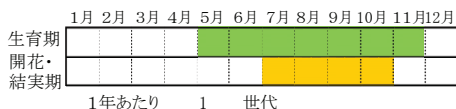
畑地や田畑の畦, 荒地, 路傍, 庭先, 樹園地など, 里地内の日当たりが良い場所なら至るところに見られる。乾いた場所だけでなく水辺でも生育するが, 湛水が続くような環境には見られない。

名前の由来: 日なたを好む地を這って伸びるシバ(芝)のなかで, やや葉も茎も太く強い強壮な雌日芝(オヒシバ)に対し, 葉も茎も柔らかく優しい感じがするため, 雌日芝(メヒシバ)とされた。

<農業との関係>

生育速度も速く, 地面を這って群落をつくり根を下ろした節からも簡単に再生し, 種子生産量も多いことから, 畑地や樹園地での代表的な強害雑草となっている。繁茂すると, 落花生のような草丈の低い作物では収穫量が皆無となることもある。しかし, 種子の寿命は2~3年と短いため, 数年間, 種子を落とさないようにきちんと管理すれば, 発生量を著しく減少させることは可能である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> メヒシバと混生すること多いアキメヒシバは, メヒシバほど地上を這わずに立ち上がり, 葉鞘には毛がなく, 小穂は2mmと小さく丸みを帯びる。メヒシバより小型のコメヒシバは, やや日陰を好み, 葉鞘は無毛で, 穂は2~3本しか伸びさない。

<一言うんちく>

メヒシバは日本全土に見られますが, 熱帯から温帯にかけての全世界でも生育するワールドワイドな草種の一つです。生育環境も山地草原から渾地帯まで広いのですが, 畑地や放牧地, 路傍など, 人の影響が強い場所に多く見られ, 世界各地で馴染みのある草と言えるでしょう。

<人との関わり合い>

人里環境に多い草なので, 雑草として厄介者扱いされるだけでなく, メヒシバの仲間には雑穀として作物化されるものもある。また, 飼料としての嗜好性も高く, かつては牛馬の餌として利用されてきたようだ。ただし, 一年生草種なので利用できる時期は限られてしまうことが難点である。畑地では繁茂すると強害雑草となってしまうが, その旺盛な繁殖力は作物だけでなく他の雑草の生育も抑制するため, 有機農業や自然農法の畑地では作物栽培時期をずらして, リビングマルチとして利用されることもある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】

月光に招かれるのはメヒシバです 小枝恵美子

朝露にぬれたわみたる夏草のめひじは穂のほのかにそよぐ 三ヶ島霞子

特徴

一年生植物。幼植物のうちから, 地表を這うか斜上し, 節から根を下ろして枝分かれし四方に広がる。幼苗時には葉の両面に毛が生えるが, 成葉には裏面や下部にまばらに毛が残る。また葉鞘には長い開出毛がでる。節に夏から秋にかけて立ち上がった茎の先に5~15cmの細い穂を放射状に伸ばし約3mmの小穂を二列につける。



荒地地に繁茂するメヒシバ群落



メヒシバ(左)とアキメヒシバ(右)の小穂(メヒシバの方が長く細い)

分布: 全国

ヒメジソ (シソ科)

学名: *Mosla dianthera*

姫紫蘇 別名:

主な生育場所

水田や畑の畦畔, 休耕田, 樹園, 道ばた, 野原, 湿地, 林縁, 水辺などに生える。やや湿った場所を好むが, 絶えず冠水する場所には少なく, どちらかというと水際や陸域草地との境目付近に多く見られる。

名前の由来: 栽培種のシソに似ているが, 全体に小型でシソ科特有の香りも少ないため, 控えめなシソということで姫紫蘇と呼ばれる。

<農業との関係>

水田畦畔にはよく見られるが, 水田内に生えることは少なく, 生えても中干し以降の後期発生となるため, 害草とはならない。湿り気の多い畑や果樹園にもよく生えるが, 草丈も低く, 刈り取りにも弱いので, 害草化することは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 良く似たイヌコウジュは, ヒメジソよりやや乾いた場所に生え, 全体に毛が多く, 葉の鋸歯が6~12対と多くて細かい。また, ヒメジソの花の萼片の先はあまり尖らないのに対し, イヌコウジュの萼片の先は鋭く尖る。

<一言うんちく>

シソ科の植物の中でもヒメジソは, 葉をちぎって嗅いでみてもあまり芳香を感じることが少ない種類ですが, 時にシソ科特有の良い香りを持つものに出会うことがあります。皆さんも散歩の途中等でヒメジソを見かけたら, 葉をちぎって匂いを嗅いでみたらいかがでしょうか。

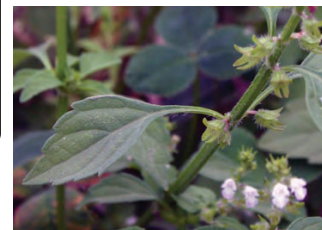
<人との関わり合い>

晩秋にかけての蒔田の周辺によく見られ, 小ぶりながら楚々とした花をつけるので, 秋の野辺を彩る花の一つとして捉えられてきたかと思うが, あまり記載が少ない植物である。シソ科であるため, 香葉として使われそうだがあまり芳香が強くないことから, 食用等に利用されたとの記録もない。ただ, 海外では中国で虫下しに利用されるとの報告がある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】

芹つむとかがめる膝に匂ひ立つ枯草は親し姫紫蘇の類 (土屋文明)



葉の鋸歯は4~6対で, 花の萼の先は尖らない



イヌコウジュの葉の鋸歯は6~12対

分布：関東～東北地方

カントウヨメナ（キク科）

関東嫁菜 別名：

アスター ヨメナ デントウス

学名：*Aster yomena* ver. *dentatus*

主な生育場所

路傍、田畑の畦畔、畑地、樹園地、林縁、野原、河川敷、法面草地、水辺沿いなど幅広い環境に見られ、やや湿った場所に群生する。里地とくに耕地周辺によく見られ山野で見かけることは少ない。

名前の由来：山に生え、ヨメナと同様に若菜を食用とするシラヤマギク(婿菜:ムコナ)に対して人里に生え女性にも摘みやすいから嫁菜との説や、ネズミの異名「ヨメ」が食べる野菜との説などがある。

特徴

横に伸びた地下茎で繁殖する多年生。4月頃より地下茎から新芽を伸ばし、茎は直立するが、上方ではやや狭い角度で分枝する。高さは40～100cmほど。ほとんど毛のない葉は互生し、粗く揃った鋸歯があるが、上部の葉は全縁となる。8～11月頃枝先に径3cmほどの薄紫あるいは白色の舌状花をつける。種子の冠毛は0.25mmと短い。



<農業との関係>

花は綺麗であるが、地下茎を横に伸ばし群生化するため、雑草性が強く、樹園地などで障害雑草となることがある。刈り取りには強いが、耕起や中耕には弱い。また、畦等から畑に侵入しても問題となることは少ない。また、水辺を好むが水中では生育しないので、水田内に定着することも少ない。畦畔によく生え、刈り取りに強く根を張るため、うまく管理すればカバープランツとして利用できる。

<生活史> 関東地方の例(目安)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
生育期												
開花・結実期												
1年あたり												
世代												

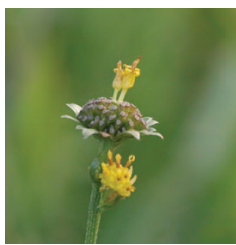


青みがかったカントウヨメナの花

<類似種> 中部地方以西にはカントウヨメナよりやや大型のヨメナ、四国・九州には小型のコヨメナが分布する。カントウヨメナと同所的には葉の質がやや薄く、鋸歯が不規則なユウガギク、花色の青みが強く、種子の冠毛が長いノコンギクなどが見られる。

<一言うんちく>

伊藤左千夫の名作「野菊の墓」で主人公が悪心を抱いた従姉の墓の周りに植えた野菊とは、舞台が千葉県であることから、カントウヨメナが類似種のユウガギク、ノコンギクあたりと推察されます。いずれの花も園芸種の菊と異なり、楚々とした花の風情が非恋を物語る趣によく似合います。



種子の冠毛は非常に短く肉眼では確認しづらい

<人との関わり合い>

春の七草のうちの「すずな」とはヨメナとの説もあるほど、万葉の時代からヨメナの仲間の若菜は「おはぎ」または「うはぎ」と呼ばれ食用野菜として利用されてきた。カントウヨメナはあまり利用されていないようだが、若芽や新芽を生のままサラダにしたり、炊きたてのご飯に塩茹でしたヨメナを混ぜ込みヨメナご飯とする。また、揚げ物、ゴマ和え、水気をとって油炒め、卵とじなどにする。花とつぼみも天ぷらにできる。また、乾燥したヨメナを解熱や利尿剤としても利用できるといふ。

<俳句や短歌への登場>

【春、嫁菜の花:秋】

妻もあらば 摘みて食(た)げまし 沙弥(さみ)の山 野の上のうはぎ 過ぎにけあらずや (万葉集)※うはぎ:ヨメナ
朝冷えは来(き)ていたなり初花のヨメナのひとつなつかしく咲く (鳥海昭子)
炊き上げてうすき緑や嫁菜飯 (杉田久女) 蘆垣に嫁菜花さく洲崎かな (泉鏡花)

分布：東北部以南

ツワブキ（キク科）

艶蔞、石蔞 別名：ツワ、イソブキ、タクゴ、ヤマブキ、タカラコウ、イシブキ

ファルフギウム ヤポニクム

学名：*Farfugium japonicum*

主な生育場所

元来、海辺に近い岩場などに自生していたが、観賞用に庭などに植えられることが多い。また、里山の林床などにも見られる。長時間の直射日光に弱く、直接日が当たることのない明るい日陰を好む。

名前の由来：フキに似て光沢(ツヤ)のある葉をつけることからツヤ蔞が訛ったとの説や、厚葉蔞(あつばふき)から転じたとの説などがある。

特徴

常緑の多年草で真冬でも枯れることがない。長い葉柄をもった円形に近い葉は強い光沢を持ち、厚みがある。地下には太く短い根茎をつくる。10-12月ごろ、葉の間から花茎を30～50cmほど伸ばし、その先に径5cmほどの黄色の頭花を数個つける。花は数枚の舌状花と多数の筒状花からなる。種子は綿毛で風によって散布される。



<農業との関係>

耕転や刈り取りに弱い。農地で見られることはほとんどないが、暖かい地方では果樹園や茶畑、山林を開墾直後の畑などで時に雑草化することがあるようだ。しかし、農地周辺に見られる場合の多くは、観賞用に人為的に植栽したか、故意に残しているものと思われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
生育期												
開花・結実期												
1年あたり												
世代												



舌状花と筒状花からなるキクに似た花をつける

<類似種> フキの葉には光沢がなく、また秋には葉が枯れてしまう。ゼニアオイなど丸みを帯びた葉をつけるアオイ科の仲間と似ることがあるが、濃緑色のツワブキの葉に比べ、アオイ科の葉は緑色が薄く、葉の厚みも少ない。

<一言うんちく>

海岸の岩場で、冬の厳しい潮風に堪え忍んで毎年きれいな花を咲かす姿から、ツワブキの花言葉は「困難に負けない」「愛を慰め」。庭先でも多くの花が姿を消す秋から冬にかけて花を咲かせ、真冬の寒さにも負けず葉を落とさないツワブキに励まされる方も多いのではないのでしょうか。



光沢を持ち厚みのある葉は冬でも枯れない

<人との関わり合い>

ツワブキは花の美しさだけでなくツヤのある葉も通年楽しめることから、江戸時代から観賞用に栽培されてきた。品種としても葉に星状の黄色い斑が入る星斑や葉縁が白くなるもの、縮れるものなど多くの品種がある。また、春先の葉柄を塩茹でし皮を剥いて細かく刻み、煮付け、和え物、揚げ物、佃煮などで食べられる。花と蕾も天ぷらにできる。また、葉には抗菌作用の強いヘキサセナルが含まれ、火であぶって腫れ物、切り傷、湿疹などの貼り薬として利用できる。根茎も胃腸薬として利用できる。

<俳句や短歌への登場>

【季語:冬】 咲くもおもはであるを石蔞の花 (与謝蕪村) ちまちまとした海もちぬ石蔞の花 (小林一茶)

蝶ひとつとばぬ日かげや石蔞の花 (宝井其角) 静かなる月日の庭や石蔞の花 (高浜虚子)

石蔞に隣りて生ふる山羊歯の黄に伏す時にわれは見にけり (斎藤茂吉) 空家やつくばい氷る石蔞の花 (夏目漱石)

石蔞に黄の花の立つところとなりにはかに近く照る対岸 (竹山 広) 枯木かこんで津波蔞の花 (種田山頭火)

分布：沖縄を除く全国

ニリンソウ（キンポウゲ科）

学名：Anemone flaccida

二輪草

別名：福平(フクベラ)、カショウソウ、子持菜(コモチナ)、セキナ

主な生育場所

落葉樹主体の雑木林や野山の林床、林縁、溪流沿いなどによく見られる。半日陰の湿気のある場所を好んで群生する。山地にも生えるが、人里近くの山麓や里山、山道沿いにも見ることができる。

名前の由来：茎先に花茎を2本伸ばし、2輪の花を咲かすことから、二輪草。また、深い切れ込みのある葉が鷲鳥の足形に見えることから、鵝掌草(がしょうそう)。

特徴

多年草。冬期に地上部は枯れるが地下茎で越冬する。春先2〜3月に萌芽し、落葉樹が葉を展開する前に短期間に葉を拡げ、3月から6月にかけて花を咲かせ種子をつける。他の植物の生育が盛んとなる初夏には枯れて休眠状態に入る。白い花被片5枚の直径2cmの二輪の花を茎先に付け、2輪目は最初の花に遅れて咲く。

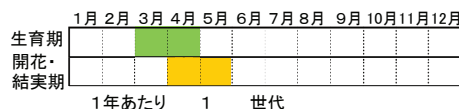


<農業との関係>

畑地に生育することはないが、粗放的管理を行っている果樹園で見られることがある。しかし、早春から春にかけての短い時間のみの生育し、他の時期には休眠状態となることから、農業上の被害は生じない。また、園芸種のアネモネの仲間では観賞価値も高いため、農地周辺に見られる場合には駆除の対象とはなりにくかったと思われる。

<生活史>

関東地方の例(目安)



<類似種>

イチリンソウの花は直径4cmと大きく、茎先に一輪のみ花をつける。茎先に3〜4輪の花をつけるサンリンソウの花は直径1.5cmほどと小さく花期も遅れる。ククザキイチゲやアズマイチゲの花被片は8〜13枚と多い。

<一言うんちく>

ニリンソウやカタクリに代表されるように、春先の落葉樹の林床で他の植物が葉を展開する前の短期間に、生育・開花し夏までに地上部を枯らしあとは地中で過ごす草花たちのことを、そのはかない花の可憐さからスプリング・エフェメラル Spring Ephemeral(春の妖精)と呼んでいます。

<人とのかかわり合い>

早春の林床にいち早く咲き乱れる群落は各地で親しまれ、まず一輪が咲きやや遅れて寄り添うように二輪が咲く様子は、夫婦の姿にも喩えられ、歌謡曲(「二輪草」唄：川中美幸)にも取り上げられている。毒草が多いキンポウゲの仲間では珍しく若菜は食用となり、特に北海道では山菜「ふくべら」として利用される。しかし、若菜は猛毒のヤマドリカブトに類似しており注意が必要。また、乾燥させた根茎は生薬「地烏(じう)」として、リュウマチや神経痛に効果がある。

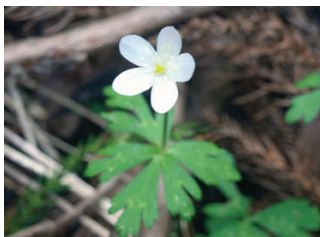
<俳句や短歌への登場>

【季語：春】

春なれや二輪草の花の群れ(一水) 二輪草の一輪すこし おくれけり(岡林英子)

森の奥に日ざしうつらふ二輪草(奥田とみ子)

清純に二輪草白咲きそろう谷間傾りを風わたりゆく(鳥海昭子)



白い花びらのように見えるのは、かく(花被片)



イチリンソウの花は4cmと大きい

分布：全国

ヘビイチゴ（バラ科）

学名：Potentilla hebiichigo

蛇莓

別名：ドクイチゴ、ウマイチゴ、キツネイチゴ、クチナワイチゴ

主な生育場所

水田や畑の畦、樹園、休耕田、野原、道ばた、土手、ときに田畑にも見られる。やや湿気のある日当たりのよい場所を好むが、陰地にも見られることがある。長く冠水するような環境には生育しない。

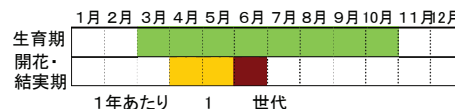
名前の由来：赤く熟した果実は人間の食用とならないがヘビが食べるとして、ヘビイチゴ。ただし実際にヘビが食べることはない。

<農業との関係>

田畑周辺の畦や農道草に多いが、畑に入り、群落を形成し害草となる場合もある。耕起には弱いので、問題となりやすいのは不耕起や未耕起部分に限られる。ほふく性のため、刈りとりには強く、また日当たりを好むため、田の畦畔などではヘビイチゴ群落が増えると適切に草刈り管理が行われていることの指標となる。除草剤には弱く、除草剤を散布している畦畔にはほとんど見られない。

<生活史>

関東地方の例(目安)



<類似種>

ヘビイチゴと同様な環境に生え、混生もするオヘビイチゴは5小葉からなり、花はやや小さく萼片は花より短く目立たない。また果実もイチゴ状に赤く膨れない。ヤブヘビイチゴは林縁に多く、全体に大型で小葉の先は丸みを帯びず尖る。

<一言うんちく>

蛇莓は、毒莓とも呼ばれ、名前を聞くと恐ろしいですが、果実も含め植物体は毒害で、トゲもなく無害です。ただし、食用となる他の野イチゴと異なり、果実には香りも甘みもなく全く美味しくありません。群生すると黄色の花は見事なので、別の呼び名を考えてあげたい草花の一つです。

<人とのかかわり合い>

田畑の畦などに普通にあり、恐ろしい名前に似合わず黄色の派手目の花をつけるので、昔からよく知られ、ママゴトの材料に使われたり、俳句や短歌などにもよく登場する。また、果実は生食には適さないが、色は鮮やかに出るので、ジャムやリキュールの色づけに利用できる。花の時期に採集し、天日乾燥した植物体は、生薬「蛇莓(じゃも)」と呼ばれ、解熱や神経痛などに効果がある。また、果実を焼酎に漬け込んだものは、虫さされやかゆみ止めになる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】 田水満ち日出づる露に蛇莓(飯田蛇笏)

春ふかい草をふみわけ蛇いちご(種田山頭火)

蛇いちご半弓堤で夫婦づれ(服部嵐雪)

川ばたのアカシアの森のした草は刈りあらされて蛇莓見ゆ(若山牧水)

血のいろのあな毒々し、蛇覆盆子、古沼(ふるね)の岸のうすくらりに(岡 楳里)

まだそれが恋と呼ばれる感情と知らないふたりの摘むヘビイチゴ(天野 慶)



萼片は花弁よりも大きく、花の隙間からよく目立



分布: 全国

ヤエムグラ (アカネ科)

八重葎

別名: 勲章草, クンショウバナ, トリグサ, スネカキ, イゲハコベ, クチキリ

主な生育場所

畑や果樹園, 田畑の畦, 荒地, 藪, 野原, 路傍, 庭先など, 人里に近い環境下でごく普通にみられる。被陰地にも生える。堆肥置き場など栄養分のある場所を好み, 水田裏作雑草にもなっている。

特徴

つる性の1年生, または越冬する2年生。茎の断面は四角形で枝分かれが多い。茎の長さ50~100cmほどになる。茎の稜には下向きのトゲがある。葉は6~8枚が輪生し, うち2枚が葉で4~6枚は托葉が変化したもの。5~7月に茎先や葉腋に湛黄緑色の径2~3mmの4裂した花をつける。果実は径2~2.5mmで2個ずつつける。

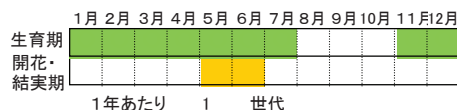


名前の由来: 節毎に数枚ごとに葉が輪生しているところから八重(ヤエ)。古語で草むらのように生い茂った状態をムグラと呼んでいたことから, ヤエムグラ。

<農業との関係>

春の代表的な雑草で, 特に麦畑などで秋に発生して越冬し, 春先の気温の上昇とともに, 作物にからみつくように生育・繁茂するため, 強害雑草となる。しかし, 夏の暑さには弱く, 盛夏には枯れてしまうため, 雑草害を生じるのは, 麦, キャベツなどの越年生作物に限られる。また, 畦畔などに繁茂すると, トゲで絡み合った群落となるため, 刈り払いが大変となることもある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 人里近い明るい草地に生えるヨツバムグラやヤマムグラ, ヒメヨツバムグラは4輪生で茎にトゲがない。クルマバソウは6~10枚の輪生葉となるが, 茎は無毛で花は白色で長さ5mmと大きく, 林内に生える。

<一言うんちく>

ヤエムグラの茎の稜や裏側の中肋には小さいトゲ状の毛があり, 輪生葉の部分をかざると, ちょうど勲章のように服にくっつきやすいため, かつての子供たちは, ヤエムグラの輪生葉をたくさん胸につけて, 勲章ごっこを楽しんだものですが, 最近ではそのような遊び方も見なくなりました。

<人と関わり合い>

「むぐら」とは, 雑草が密生して繁茂する状態を表し, 人手が遠ざかった風情を表す表現としてもよく使われてきた。2012年7月号のカナムグラの項で紹介したように, 百人一首で恵慶法師が詠った「八重葎(やへむぐら) しげれる宿の さびしき人こそ見えぬ 秋は来にけり」もツル草が生い茂った家屋の哀愁を詠っているが, この八重葎とは, 本項で紹介したヤエムグラではなく, カナムグラのこととされている。ヤエムグラは夏には枯れてしまうので, 秋まで茂ることはない。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

むぐらさへ若葉はやさし破れ家 (松尾 芭蕉) 夕顔のあとからのぼるむぐらかな (野沢 凡兆)
八重葎露ぞこりたる彼岸かな (石田 波郷) 八重葎漬えて咲ける茶の木かな (水原 秋桜子)
昼顔や種も蒔かれぬ八重葎 (尾崎 紅葉) がちやがちやや壺より黒き八重葎 (川端 茅舎)

ガリウム スプリウム エキノスペルモン
学名: *Galium spurium* var. *echinospermon*

分布: 全国

ムラサキツメクサ (マメ科)

紫詰め草

別名: アカツメクサ, 紅ウマゴヤシ, レッドクローバー

トリフォリウム プラテンセ
学名: *Trifolium pratense*

主な生育場所

牧草として渡来し, 全国の畑や樹園地, 畦畔, 路傍, 法面, 草地, 河川敷, 公園内などにみられる。日当たりの良い環境を好み, やや湿った場所でも生育するが, 乾ききった場所には見られない。

特徴

ヨーロッパ原産で明治時代以降に導入された多年草。直立して高さ20~60cmとなり, 全体に軟毛がある。小葉は先のとがった卵形で3枚で, V字型の白い斑紋がある。6月頃から秋にかけて茎先に紅紫色の多数の蝶型花からなる径1.5cmほどの球状花をつける。花序の直下には一対の葉がつく。種子は扁平な倒卵形で長さ約2mm。

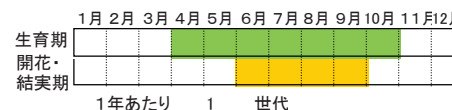


名前の由来: シロツメクサと同様に球形の花序を梱包材として利用してきたので詰め草。赤みがかった紫色の花色なので, 紫詰め草または赤詰め草と呼ばれる。

<農業との関係>

トルコ・ヨーロッパ南東部が原産で, 昔からムラサキツメクサの生える土壌は肥沃であることが知られ, 16世紀以降にはヨーロッパ中で緑肥や牧草として栽培されるようになり, 輪栽式農業(地力維持のためにコムギなどの冬作物, マメ類などの夏作物, 緑肥や牧草の栽培, をローテーション)などの確立に貢献した。日本には明治以降に寒地型牧草として北海道を中心に導入された。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> シロツメクサは全体無毛で茎は地表を這って立ち上がり, 花は白色。タチオランダゲンゲの茎は立ち上がり, 淡紅色の花をつけるが, 全体無毛で花序の直下には葉はつかない。ペニバナツメクサの花序は長さ2cmほどの円柱形となる。

<一言うんちく>

ヨーロッパでは, ムラサキツメクサやシロツメクサなど根粒菌と共生し地力を回復・維持させるクローバー類の牧草によって農業が支えられてきました。そのため, クローバー類は広く親しまれ, デンマークではムラサキツメクサが国花となるほど, 慕われる花となっています。



50~100個の小花が集まった花序と葉に出るV字形の白い斑紋

<人と関わり合い>

シロツメクサと同様に, 若葉を葉柄が柔らかくなるまで塩茹でし, 冷水に手早く晒してゴマ和え, 酢の物などにするか, 花や蕾は柔らかい葉と一緒に掻き揚げにして食べられるが, 味はシロツメクサより劣る。また, フラボノイド類を含み, 蕾や若い花を摘んで乾燥させたものを服用すると便通や咳, 痰に効果があるとされる。ヨーロッパではかつて, 患部に塗布し, 皮膚病や乳がん治療にも利用されていたようである。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 晩春】

赤詰め草白詰め草に勝る丘 (高澤良一)
詰草の紅きを詰めて南蛮船 (高島征夫)

分布：全国

クサネム (マメ科)

学名: *Aeschynomene indica*

草合歓 別名：一

主な生育場所

水田内、水田畦畔、休耕田、水路、河川敷など、湿った場所に生育する。ときに、転作畑など、湿潤な畑地にも生えることがある。ただし、ずっと湛水されている環境に見かけることはない。

特徴

一年草。茎は柔らかく中空で直立し、高さ0.5～1mに達する。葉には托葉があり、複葉は互生し、5～10mmの柄がある。葉の裏面は白味を帯び、光を浴びると左右に開き、暗くなると閉じる。7～10月に葉腋から短柄を伸ばし淡黄色の蝶型花を2、3個総状につける。花後、3～5cmの節果をつけ、熟すと節毎に離れる。種子は暗緑色。

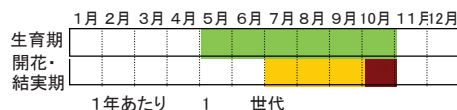


名前の由来：15～30対の小葉からなる羽状複葉が合歓の木(ネムノキ)に似て、木本ではなく草本であるため、草合歓(クサネム)と名付けられた。

<農業との関係>

田んぼに生える唯一のマメ科水田雑草。イネ生育期間中の競合はさほど大きくないが、節果がついた状態で稲とともに収穫されると、脱穀・籾すり後の選別時にクサネム種子がちょうど玄米と同じような大きさのため、玄米に混入して等級を下げてしまうため、農家に嫌がられる雑草の一つ。クサネムの種子が混入する可能性がある場合には、色彩選別機を通す必要がある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



淡黄色の蝶型花

<類似種> 西日本に帰化しているアメリカツノクサネムは全体大型で花もクサネムの1cmほどの花と比べて2cmほど、節果の先端には尖った角をつけ、長さ20cmと長い。また、黄色の5弁花をつけるカワラケツメイは乾いた場所に生育する。

<一言うちく>

クサネム属の学名である *Aeschynomene* (アエスキノメネ) とは、ギリシャ語で「恥ずかしがり」という意味です。これは、日が落ちる頃に、葉が閉じて垂れる様子から名付けられました。しかし、水田等にいったん定着すると、なかなか根絶が難しく、一面も持っているのです。



扁平な線形で無毛の節果
熟すと黒くなり節毎に離れやすい。

<人との関わり合い>

他のマメ科と同様、根粒をつけ窒素固定するので、緑肥として利用されることがある。また、生薬名を合歓といい、利尿、解毒、気管支炎、麻疹に用いる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】
草合歓手折りぬいまでも夢抱く (西尾 栄子)
草合歓はすでにねむれり夕ぐれの岡のへ来れば空のあかるさ (土田 耕平)
全身で郷愁をゆする 草合歓のとちるまで (前原 東作)

分布：全国

イヌタヌキモ (タヌキモ科)

学名: *Utricularia australis*

犬狸藻 別名：

主な生育場所

ため池や湖沼、水路、水田などに生育する。水田脇のちよつとした湿地帯にも見られることがある。水田の場合、湿田や多雪地帯などの冬期にも乾燥しにくく、強度の中干しを行わない条件下で多い。

特徴

根を下ろさずに水中を浮遊する多年生の水生植物。長さ1mに達することもある。葉は互生し基部で二本に分枝し、さらに二又に何回か枝分かれする。葉には捕虫囊がつく。夏に茎より太い長さ10～30cmほどの花茎を伸ばし、黄色い蝶型花をつける。秋に長さ4～10mm、幅3～7mmほどの長楕円形の殖芽を側枝に形成し、越冬する。

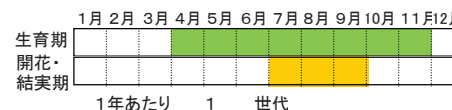


名前の由来：糸状に枝分かれする葉を茎に密につけ、水中にたなびく様子を狸のしっぽに見立てて、狸藻。加えて、自然湖沼に生育する狸藻に似るが、やや小型であることから、犬狸藻。

<農業との関係>

タヌキモ属の間では、イヌタヌキモの他にコタヌキモ、ヒメタヌキモが水田で見られるが、いずれも現在は各地で絶滅危惧種に指定されるほど少なくなっている。浮遊植物であり水稲に影響を与えることは少ないと考えられる。ただ、ため池では、繁茂しすぎると取水しにくいことがあるかも知れない。庭池などがあるとボウフラがわきにくく、花も可憐なため、利用されてきた一面もあるだろう。

<生活史> 関東地方の例(目安)



夏に花茎を伸ばし黄色の蝶型花が咲く



水面を漂うイヌタヌキモ

<類似種> タヌキモの殖芽は大きく球形となる。ため池に多いソタヌキモは3輪生しイヌタヌキモの葉が平面的な枝分けるのに対し、立体的な枝分かれする。やはりため池に産するフサタヌキモの葉はさらに細かく枝分かれし、花の色も淡い黄色となる。

<一言うちく>

タヌキモ属の多くは食虫植物として知られ、虫を捕らえる穂虫囊を持っています。普段は扉が閉じられ周辺より水圧が低い穂虫囊にボウフラなどが触れると扉に隙間が生じ、水圧差によって穂虫囊に吸い込まれます。穂虫囊に吸い込まれた虫はゆっくりと消化・吸収されていきます。



枝分れた葉に密につく穂虫囊

<人との関わり合い>

タヌキモの間は属名のウトリキュリアの総称と呼ばれ、観賞用の食虫植物として一部のマニアの中で人気が高い。しかし、近年、観賞用に導入された外国産のタヌキモ(エフクレタヌキモ: *Utricularia inflata*、オオバナイトタヌキモ: *U. gibba*)などが各地で逸出し、旺盛な繁殖力でイトタヌキモをはじめとする在来種のタヌキモを追いやり、水辺の生態系への悪影響が懸念されている。一旦、野外に定着すると駆除は難しく、ウトリキュリアに関わらず観賞用植物の管理には充分注意を払うべきである。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】
ためき藻の冬へ入らんと裏筑波 (宮坂静生)
カッパのまぼろしながる小狸藻 (小川芋銭)

分布： 本州，四国，九州

カワラケツメイ (マメ 科)

カマエクリスタ ノマメ
学名： *Chamaecrista nomame*

河原決明 別名：ノマメ(野豆)，マメ茶，ネム茶，ハマ茶，弘法茶，キシ豆，コウカイ茶

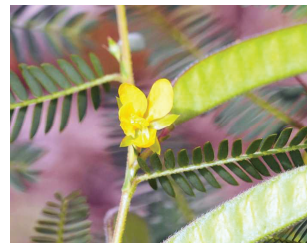
主な生育場所

日当たりが良く、やや乾燥した野原や路傍、土手、海岸草地、河川敷、田畑の畦畔、ため池堤体草地などに見られる。ときに畑や果樹園内などにも生える。焼け跡に群生することもある。

名前の由来：エビスグサ(決明：ケツメイ)(※種子は漢方薬の決明子：ケツメイシ)に似て、河原などによく生えることから。別名は莢果を健康茶として利用できることから、茶がつくものが多い。

特徴

高さ30～60cmになる一年草。茎は強く直立し、上部にやや密に短毛をしく。羽状複葉の葉は互生し、小葉は15～35対。托葉は線状皮針形で葉柄にイボ状の腺点がある。夏から秋にかけて葉腋から花柄を伸ばし、黄色の径約0.7mmの5弁花を1～2個つける。花後、扁平で多毛な莢果をつけ、光沢のある種子を8～11個入れる。



マメ科では珍しい梅花状の5弁花



莢果は茎に上向きにつく

<農業との関係>

畑内に群生することもあるが、発生頻度は多くないので害草とはなりにくい。エビスグサやハブソウの間で、健康茶として利用できるで、畦畔などの群落は茶葉としての適期の若い実ができる頃まで刈り残すことも多い。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 16年7月号で紹介したクサネムとそっくりだが、クサネムは湿地に生え、花はマメ科特有の蝶型花、莢果は横～下向きにつく。エビスグサやハブソウの草丈は1m前後と高く、小葉は幅が広い倒卵形で、花も大きい。

<一言うんちく>

カワラケツメイの全草を煎じたお茶は古くから健康茶として知られ、一説には弘法大師が愛飲し、全国各地にその効用とともに広めたとされています。青森県野辺地町や山口県山口市旧徳地町では、庭先等で栽培されてきたカワラケツメイを特産品として地域興しに利用しています。

<人との関わり合い>

8月から9月ごろの花と若い果実をつけた全草を陰干して刻んだものは、生薬名「三偏豆(さんべんず)」と呼ばれ、決明子と同様に、煎じて飲むと強壮、利尿、便秘などに効くとされる。茎葉を摘んで茶葉としても利用でき、ポリフェノールを多く含むため、整腸作用や脂肪吸収の抑制効果が高く、また、高血圧や動脈硬化予防に効果のある成分も含む。なお、絶滅危惧種のツマグロキチョウの唯一の食草で、ツマグロキチョウとともに保全対象としている地域もある。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】

別名も含めて、俳句や短歌への登場は見つからなかった。余談として、ジャパニーズポップグループの「ケツメイシ」は、薬剤師の資格を持っているメンバーも含まれていることもあり、グループ名は薬草「決明子」から由来している。これは決明子が便秘薬として使われていることから、「すべてを出し尽くす」という思いを込めたこととされている。

分布：全国

セイタカアワダチソウ (キク科)

ソリダゴ アルティシマ
学名： *Solidago altissima*

背高泡立草 別名：アワダチソウ，オウゴンソウ，セイタカアキノキリンソウ，代萩

主な生育場所

荒地、休耕地、田畑の畦、樹園地、道ばた、河川敷、土手、草地などのやや乾き気味の日当たりの良い場所を好んで群落を形成する。定着後の一時的な湛水に耐えるため時に湿地でも見られる。

名前の由来：在来種のアキノキリンソウ(別名：アワダチソウ)の草高が50～80cm程度に対し、1～2m以上と高くなることから。また黄色の頭花を泡のようにたくさん付けることから泡立草。

<農業との関係>

草高が2m以上と高く、地下茎で増え群生することから耕作放棄地や休耕地などで目立つが、耕起や湛水には弱いいためほ場内で問題となることは少ない。樹園地や不耕起ほ場で発生が多くなることがあるが、刈りとりやすいため、こまめの刈り払いで対処できる。刈り払い回数の少ない畦畔やほ場へのアプローチ道路など非農耕地で繁茂すると視認性や農作業の効率に支障があることがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 北海道などでセイタカアワダチソウよりも多く見られるオオアワダチソウの花は初夏から夏にかけてと早く、茎や葉は無毛でざらつけない。在来種のアキノキリンソウの草高は約50cmと低いが、頭状花の直径は約12mmと大きく、花序は穂状。

<一言うんちく>

戦後、各地に急速に拡がり、かつては花粉症の原因とされましたが、セイタカアワダチソウは虫媒花のため、花粉が風で拡散することは少なく、すっかり濡れ衣を着せられていました。しかし、他の植物の生育を抑える物質を根から出すため、在来の植生には大きな影響を与えています。

<人との関わり合い>

中高年以上の世代には見慣れない植物が急激に増えたイメージから「嫌われる者」の印象も強いが、若い世代には秋の風物詩として群生する花が景観として馴染んできているようだ。原産地のアメリカでは州花と扱われることも。また養蜂にとっては蜜源植物としても優秀。食用にもなり、新芽や花は天ぷらにすると独特の風味があり美味しい。またセイタカアワダチソウを含むSolidago属にはポリフェノール類が多く、利尿や炎症抑制作用がある。民間薬として皮膚炎などにも効用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 ※背高泡立草を縮めて「泡立草」と詠むことが多い。

よく笑う女背高泡立草(増田栄子) どこまでも雨の背高泡立草(小西昭夫) 墓山の泡立草の強気かな(福谷俊子) 忘れぬし空地黄となす泡立草(山口波津女) 沼を吹く風を黄色に泡立草(和知喜八) 湖西線背高泡立草に延び(京極紀陽) 沿線の三角空地を輝やかに泡立草の黄はうづめたり(田谷 鋭)



荒地に形成された群落



在来種のアキノキリンソウ

分布：全国

ツリガネニンジン（キキョウ科）

学名：アデノフォラ トリフィラ ヤポニカ
Adenophora triphylla var. *japonica*

釣鐘人參 別名：釣鐘草、沙参(しゃじん)、トキ、トキニンジン、ボタンヅル

主な生育場所

日当たりの良い畦や林縁、ため池の堤草地、河川堤防、山地や丘陵の草原などに生育する。刈り取りに強く、半自然草地（人の干渉が加わることで半自然的に維持されている草原）でよく見られる。

特徴

高さ30~100cmほどの直立する多年草。縁に鋸歯がある葉は3~5枚輪生し、たまに互生あるいは対生する。根生葉は円心形で花時には枯れてしまう。根は白くて太く朝鮮人參に似る。8~11月に茎先に花茎を伸ばし、長さ15~20mmの鐘型で垂れ下がった淡青色の花を輪生し数段につける。花茎下部は分枝し円錐形の花序となる。



名前の由来：鐘型で花冠から花柱が飛び出した花を寺の釣り鐘に喩え、また根が朝鮮人參に似ていることから釣鐘人參。また、若葉がおいしく「とっておい」だったことから「とき」。

<農業との関係>

刈り取りには強いが、耕耘によって太い根が切断されてしまうと枯れてしまうため、畑地などの耕地に入ることはほとんどない。耕地周辺の適度な刈り取り圧がかかっている畦や草地に多いが、基盤整備などで土が動かされ新たに造成されたような畦や草地には見られない。農作業の邪魔にはならず、秋に可憐な花をつけるので、古来から農耕地周辺で親しまれてきたのではないだろうか。

<生活史> 関西 地方の例(目安)



花柱は花冠から突き出し、花冠先端は反り返る。

<類似種> ツリガネニンジンの基本種であるサイヨウシャジン是中国地方以西の分布で、花冠が壺型となり先端部がすぼまり、花柱は花冠からツリガネニンジンより長く突き出る。山地の林縁に多いソバナの花は輪生せず漏斗状で葉も互生。

<一言うちく>

雑談に「山でうまいはオケラにトトキ、里でうまいはウリ、ナスビ 嫁にやるのも惜しうござる」とある「トトキ」とはツリガネニンジンの若芽のことで、茎を折るといやなおいの乳液が出ますが、味はクセがなく独特のコクがありとても美味しい山菜として全国的に知られています。



刈られると円心形の根生葉を出す

<人と関わり合い>

トキと呼ばれる若葉は茎先を摘んでタラの芽のように天ぷらにすると美味しい。また熱湯で茹で、冷水に晒して酢味噌や卵とじ、お浸し、油炒めなどにする。太い根はきんぴらや塩漬、味噌漬に、花と蕾はサラダに入れても良く、どの部位も利用できる。また、ツリガネニンジンの仲間の生薬「沙参」として知られ、根を乾燥させたものにはサボニンやイヌリンなどが含まれ、咳止め、痰切り、のどの痛み止めに効用がある。風鈴に似た輪生する花も風情があり、生け花の材料や観賞対象となる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】

吊鐘人參など咲き山に還る烟（須並 一衛） 山雨来て釣鐘人參鐘を打つ（前澤 宏光）
釣鐘人參揺れゐる観音詣かな（岡田 和子） ひよ渡る釣鐘人參揺れどほし（豊島美代）
日暮美し釣鐘人參など咲いて（松井 淑子） ゆく秋の鎌倉山の岩かげに釣鐘人參花下げておる（山崎 方代）

分布：全国

ハボタン（アブラナ科）

学名：ブラシカ オレラケア アケババ トリコロア
Brassica oleracea var. *acephala* f.

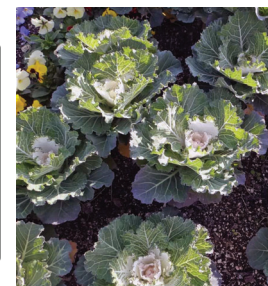
別名：

主な生育場所

株々に着色した葉を鑑賞対象とする園芸植物。耐寒性が強いので、冬季の花壇に植えられることが多い。地植え、プランターどちらでも育つ。また、お正月の飾り花として、門松に添えられることもある。

特徴

普通7月から8月に播種し、年を越し翌春に開花する。低温に会わないと葉の色づきは悪くなる。多年草なので開花後も育てることができるが、株元から分枝する草姿となる。また、自家不和合性（同じ個体の花粉で受精しない）のため、同じ系統の種取りを続けることは難しく、同じアブラナ属の近縁種と交雑しやすい。

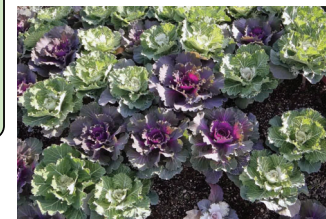


名前の由来：株々に色づいた幅広の縁が波打つ葉が同心円状についた様子が牡丹の花のように見えることから、葉牡丹。

<農業との関係>

原産地のヨーロッパでは古くから野菜として栽培されてきた。日本でも栽培されてきたが、導入当初から野菜としてではなく、観賞用として扱われてきたようだ。元々栽培種であったため、また主に葉を鑑賞対象とするため、花茎が伸びる前に処分してしまうことが多く、種子を付けることが少ないこともあって、花壇などの栽培場所以外に逃げ出している例はほとんどない。

<生活史> 関東 地方の例(目安)



冬の花壇に植えられたハボタン

<類似種> 分類学上はケールやキャベツ、ブロッコリー、カリフラワーを生み出したブラシカ・オレラケアの一変種なので、ケールやキャベツなどの葉とよく似ている。

<一言うちく>

原産のヨーロッパではケールと同じように味の良い野菜として知られていました。その後、日本では食味ではなく、葉色や葉形に着目して品種改良を行ってきましたので、キャベツほどは柔らかく美味しくありませんが、アメリカでは食用としても利用されているようです。

<人と関わり合い>

ハボタンは江戸時代に渡来した結球しないケールが観賞用に品種改良された我が国作出の観賞植物である。当初は平滑な葉の紅白に色づくものが好まれたという。現在は、葉が平滑で丸葉の「東京丸葉系」、縮れ葉のケールと掛け合わされた「名古屋ちりめん系」、東京丸葉と名古屋ちりめんを掛け合わせた「大阪丸葉系」、ロシアの切れ葉ケールと丸葉系の掛け合わせ「さんご系」の4系統が主となっている。

<俳句や短歌への登場>

【季語：晩冬】 日毎来て礫ひよりのついでみし葉ぼたんは茎長く抽きたり（岡野 弘彦）

冷えびえと雲(みぞれ)が洗ふ戸の外に明るさ占めて葉牡丹はあり（木俣 修）
葉牡丹の色かきなりて開きそむ（長谷川 かな女） 葉牡丹やわが想ふ顔みな笑まふ（石田 波郷）
葉牡丹にうすき日さして来ては消え（久保田 万太郎） 葉牡丹のいとけなき葉は抱き合ふ（日野 草城）

分布：沖縄を除く全国

フデリンドウ（リンドウ科）

筆竜胆

別名：筆龍膽(ひつりょうたん)

ゲンティアナ ソリンゲリ

学名：*Gentiana zollingeri*

主な生育場所

日当たりの良い草原や林縁、落葉樹林などの明るい林床に見られる。やや乾いた環境を好み、低地から山地まで分布する。人里周辺では、夏に適度に草刈りされ、冬に地面まで日が差す草地に多い。

名前の由来：リンドウの仲間、地面から伸びた茎の先に着く蕾(つぼみ)の姿がフデの穂先に似ていることから「筆竜胆」。

特徴

草丈5～10cmほどの二年草。秋に発芽し翌年の3月から5月にかけて開花結実する。卵形もしくは広卵形で厚みのある葉に葉柄はなく対生する。葉腋または茎頂に1～15個程度の花をつける。花冠は径2～2.5cm程度の淡い青紫色で、日が差すとラッパ状に開き先は5裂する。花色はときに白化や淡い桃色(トキ色)も見られる。

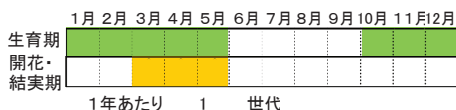


十数個の花を茎先に咲かせている様子



つぼみの状態がちょうど筆の穂先にみえる

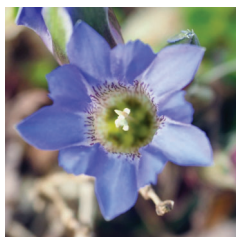
＜生活史＞ 関東地方の例(目安)



＜類似種＞ 同じ時期に咲くハルリンドウの花は径2～3cmとやや大きく、花色も濃い。またハルリンドウの茎につく葉の幅は披針形でやや狭く、根出葉が目立つ。コケリンドウは全体小ぶり、草丈3cmほどで花径も1cmに満たず花色も淡い青色。

＜一言うんちく＞

最近の研究からはフデリンドウの発芽や初期生育は明るい草地環境だけでなく、共生する菌根菌にも依存していることもわかってきました。フデリンドウの姿を見かけることが少なくなっているのは、草刈りなどの減少が日照条件に加え、土壌中の菌群にも影響しているためかも知れません。



裂片の間から副片が覗くため、花先は10裂にみえる。

＜人と関わり合い＞

フデリンドウは越年草であるが、カタクリやニリンソウなどと同様に春先の短い期間に可憐な花を着ける小型の植物として親しまれてきたと思われる。しかし、食用としては、秋から冬にかけて葉や茎を展開せず、開花期も短く植物体も小さいため利用されることはなかった。また、秋に咲くリンドウは根を天日で乾燥させて健胃薬として用い、フデリンドウにも食欲不振や消化不良などに効果が期待される成分が含まれるものの植物体が小さく生育期間も短いため利用されることはない。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：春】

ハルリンドウもフデリンドウも滅びた道に続けりフユノハナワラビ（石川不二子）

※秋に咲くリンドウについては俳句や短歌などに多く登場するが、意外と春に咲くフデリンドウやハルリンドウに関して詠われることは少ないようです。

分布：全国

コナスビ（サクラソウ科）

小茄子

別名：烏帽子草(エボシグサ)、草茄子(クサナスビ)

リシマキア ヤボニカ

学名：*Lysimachia japonica*

主な生育場所

畑、田畑の畦、庭先、路傍、草地、林内などに生育する。人里・里山から山地まで日当たりのよい草地からやや陰地まで広くみられる。やや湿り気のある場所を好み、湿地にも見られることがある。

名前の由来：先のとがった5裂する萼(ガク)に包まれた小さな丸い果実の形が、若い時期の茄子(ナスビ)や丸ナスの形に似ていることからコナスビ。

特徴

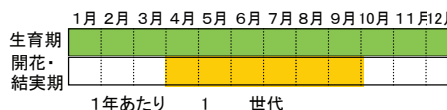
小型の多年草で冬でも葉は残る。茎は軟毛を密生し、株元から分枝し四方に這う。広卵形で鋸歯のない葉は対生し、長さ1～2.5cm、幅1～2cm。春から秋にかけて直径5～7mmほどの5裂した黄色い小さな花を葉腋に伸ばした短い花茎の先に1個ずつつける。花後にできる果実は径4～5mmの球形でまばらに長毛が生える。



＜農業との関係＞

畑や樹園地にも見られるありふれた雑草だが、地を這う小型種であること、目立った雑草害もないことから、話題にされることは少ない。畦畔に生えた場合、高い位置での刈り取りが続くと群落化しグランドカバーとして利用できることもあるが、繁殖力は強くないので同様に刈り取りに強いオオジシバなどほふく茎を旺盛に伸ばす植物との競合には弱く、実際に群落化することは少ない。

＜生活史＞ 関東地方の例(目安)



＜類似種＞ グランドカバーの目的で導入され、北海道や本州の一部に帰化しているヨーロッパ原産のヨウシュコナスビ(コバンコナスビ)は、花の直径が約2cmと大きく、葉は楕円形となり、全体に毛がほとんど生えていない。

＜一言うんちく＞

コナスビはありふれた地味な花なのですが、コナスビが属するサクラソウ科オカトラノオ属の仲間には、クサレダマやヤナギトラノオ、スマトラノオなど、茶花として利用されるほどの可憐な花をつける山野草も多く、海外の仲間にもリシマキアとして鑑賞利用されるものも多いです。



地面を這うように伸びる



丸ナスに似ている？果実

＜人と関わり合い＞

作用成分は明らかになっていないが、民間薬として夏に全草を採取して乾燥させたものを粉末にして腫れ物に塗ると効果があるとされる。また、全草を陰干しにして煎じて飲むと胃の痛みに効くという。また、小型種であり全体に毛があるためか、食用としての利用の記録は見当たらない。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：不明】

園芸種となっているものも多いサクラソウ科の仲間であり、平開する5裂した花はそれなりに趣もあるが、如何せん小型種で、同じような黄色い花でもカタバミやヘビイチゴの陰に隠れがちのため、短歌や俳句などに取り上げられることがないようである。もっと認知度が高まれば、ありふれた草だけに俳句などにも登場すると思われるのだが……

分布：全国

コメツヅメクサ (マメ科)

トリフォリウム ツビウム
学名: *Trifolium dubium*

米粒詰め草 別名：キバナツメクサ、コゴメツメクサ

主な生育場所

道ばたや空き地、荒地、土手、芝地、田畑の畦などにも見られる。往來の激しい道沿いに多く、あまり人が通らないような場所には少ない。日当たりが良く、やや乾いた場所を好むが、乾燥にも強い。

名前の由来：シロツメクサと同様に球形の花序を梱包材として利用してきたので詰め草。小さな花がまるで米粒のようであることから米粒詰め草。また、花色が黄であることから別名は黄花詰草。

特徴

ヨーロッパから西アジア原産の一年草ときに越年草。高さ約30cmで、茎は根元からよく分枝し、細く暗褐色。全体わずかに毛がある。葉は互生し3小葉からなり、小葉は長さ0.5~1cm、幅5~8mmの倒卵形で上部には鋸歯。托葉は2裂。葉腋から花柄を伸ばし、約3mmの黄色の蝶形花を5~20ほど球形につける。花序の直径は約7mm。

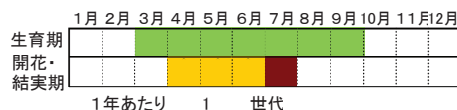


球形の花序を構成する花は小さい

<農業との関係>

道ばた等ではよく見かけるが、畑内に入り込むことは少ない。ときに芝生地の雑草となることがあるが、問題となることはあまりない。田畑の畦畔では、刈り取りに強いので、グラントカバープランツとして利用することができる。また、放牧地や採草地に生えることは少ないが、シバ草地では早春の重要な飼料となるとともに、シバの生産量も高めることが知られている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> クスダマツメクサ(外来種)は同じ黄花の集合花をつけるが、花はやや大きく、花序も2cm前後と大振りとなる。コメツヅウマゴヤシ(外来種)の球形花序も約2cmとコメツヅメクサよりやや大きく、花後に花弁は残らず果実がよく目立つ。

<一言うんちく>

日本には明治の終わりごろには東京など一部の都市に渡来したとされますが、戦後、急速に分布が全国に拡大しました。その背景には、連年軍の追放に伴う、物資や人の移動があるとされています。そのため、今でも幹線道路や往來の多い道沿いなどで多く見かけられるのです。

<人との関わり合い>

シロツメクサやクスダマツメクサなどのツメクサの仲間よりも花は小さく、観賞価値も低いので、これまであまり注目されてこなかった草花の一つである。ただ、生産量は少ないが、飼料価値はあるようで、草地に生えたと利用することができる。シロツメクサの葉などは食べることができるが、コメツヅメクサの葉は小さく、食用の記録はみつからない。また、民間薬や漢方利用も含めて、薬用に利用された記録も見当たらない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春？】戦後に広がった植物でもあり、花も植物体も小さいことから、詩歌に取り上げられることはないようだ。しかし、小さな黄花が集合した球状花はよくみるとそれなりに可愛らしく、花後の乾燥した花弁が残る風情も、もの哀しさを誘う。



葉は長さ1cmほどの3小葉



花後も花弁は白く枯れたまま、垂れ下がって残る

分布：本州・四国・九州(沖縄以外)

サンショウモ (サンショウモ科)

サルビニア ナタンス
学名: *Salvinia natans*

山椒藻 別名：モ、ウキグサ、サルビニアナタンス

主な生育場所

水田やハス田、ため池や湖沼、湿地に生える。流れのない、もしくは緩やかな水路にも見られることがある。河川下流部の氾濫源由来の水田に多い。大発生するとため池の水面を覆ってしまうことがある。

名前の由来：対生する浮葉が連なって水面に浮かんでいる様子が、香辛料に利用され山野に生育する山椒(さんしょう)の羽状複葉に似ていることから、水中に生える山椒の意で、山椒藻。

<農業との関係>

かつてはごく普通の水田雑草として、駆除の対象となるほど各地で繁茂していたが、除草剤に対する感受性が高く、また胞子は冬季の乾燥に弱いことから、除草剤の普及と乾田化による湿田の減少等により、各地で減少したり、生育環境が消失して、現在では絶滅危惧種として扱われている地域が増えている。また、ウキグサ類と混生するため、わずかに残っても気づかれないことも多い。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 熱帯アメリカ原産のオオサンショウモは、全体が白っぽく見え、サンショウモよりも一回り大きく、葉が二つ折りに重なっていることが多い。なお、オオサンショウモは繁茂すると在来種との競合が懸念され、要注意外来種に指定されている。

<一言うんちく>

サンショウモなど水生のシダ類の仲間の多くは、水田雑草としてかつては全国の水田で見ることができました。しかし、いずれも除草剤に弱いので、現在では、ほとんどの種類が絶滅危惧種に指定されています。地味な水生シダは、このまま未知れず水田から姿を消してしまうのでしょうか。

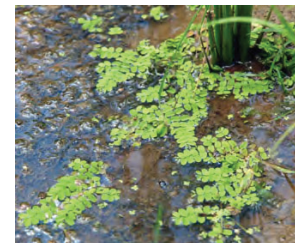
<人との関わり合い>

山椒に似た草姿の水草は他にあまり例がなく、また水生のシダ植物としても特殊であるため、サルビニア ナタンス として、観賞用の水草として栽培されることがある(※外来種のオオサンショウモもサルビニア ナタンス として販売されることがある)。また、かつては理科教材としても利用されていたようだ。山椒藻の名がついているが、食用としての記録はなく、薬効も報告されていない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】

かつては各地の水田に見られ、見慣れた植物と思われるが、ウキグサ類などと混生するため、あまり意識されてこなかったようだ。二枚の対生する山椒のような葉が水面に浮かぶ様子は風情を誘うが、野外で見かけることがすっかり少なくなってしまった現在では、今後も詩歌等に登場することは難しいか。



稲の株元に生えるサンショウモ



水中葉の基部にみられる胞子嚢

分布: 全国

ヘクソカズラ (アカネ科)

バエデリア フォエタイダ
学名: *Paederia foetida*

屁糞蔓

別名: ヤイトバナ(灸花), サオトメバナ(早乙女花), サオトメカズラ(早乙女葛)

主な生育場所

日当たりの良い路傍や林縁、荒地、草地、土手などに生える。休耕地や田畑の畦、樹園地にも見られる。地面も這うが、つる性植物なので、他の植物やフェンスなどに絡まって長く伸びていく。

特徴

つる性の多年草。茎が左巻きで他の植物などに絡まる。葉は対生し長さ4-10cm、幅1-7cmで全縁、先はとがる。葉の大きさ、毛の有無などは変異が多い。葉柄基部には鱗片がある。

葉腋から短い花序をだし、灰白色の花は長さ約1cmの釣鐘状、先は浅く5裂し内側は紅紫色となる。径約5mmの球形の果実には種子が2個入る。

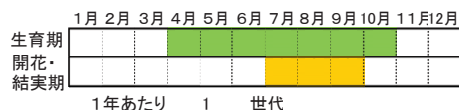


名前の由来: 葉や茎、実などにまるで「おなら」や「糞尿」のような悪臭があるつる草ということで屁糞葛。また、白い花の中心が赤紫となり、灸をすえた跡のように見えることから灸(やいと)花。

<農業との関係>

田畑の周辺にも見られ、水田内に侵入することはないが、ときに畑地や樹園地で雑草化する。耕地に発生するとつる性のため、作物に絡んで伸長し、除去が困難となる。また、畦畔の草刈り時に機械に絡まって作業効率を悪化させることがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 人里周辺にみられる対生の葉をつける単葉で全縁のつる植物には、ヘクソカズラのほかに、ガガイモやヤマノイモ、園芸種のツルニチニチソウなどがあるが、葉を千切って特有の悪臭を確かめればまず間違うことはない。

<一言うちく>

学名 *Paederia* も「悪臭」を語源とし、英名でも *Skunkvine* (スカンクの臭いの草) と呼ばれる悪臭が印象的ですが、白地に中央が深紅に染まる花を早乙女がかぶる田植え笠に見立て早乙女花との異名もあります。屁糞より早乙女と呼んであげればだいぶこの草の印象は変わるとおもいますが。



先端に萼片が残る直径約5mmの果実



他の植物などに巻き付いて伸長

<人との関わり合い>

人里に生え、その強烈な悪臭から昔からよく知られてきた草の一つである。「屁糞葛も花盛り」(鬼も十八、番茶も出花、と同様の意)ということわざもあり、悪臭だけでなく盛夏に咲く花の美しさにも気づいていたのだろう。

その悪臭ゆえ、食用には適さないが、水洗した生の果実をつぶしたものはしめやけ、あかぎれなどに効用が有り、化粧水にも利用できる。また、葉の汁は毒虫に刺されたときに塗布すると毒消しの効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】 名をへくそかずらとぞいふ花盛り (高浜虚子) 表札にへくそかずらの来て咲ける (館山 寛) かはらふちに這いおぼとれる屎葛絶ゆることなく宮仕えせむ (万葉集・高宮王) 秋されば へくそかずらの 花にさへうすくれないゐの いろさしにけり (尾山 篤二郎) くだらぬもののおもひをばやめにせむ、なにか匂ふは屁糞蔓か (若山牧水)

分布: 全国

ヒガンバナ (ヒガンバナ科)

リコリス ラディアータ
学名: *Lycoris radiata*

彼岸花

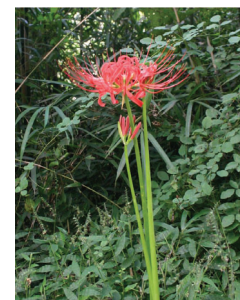
別名: 曼珠沙華(マンジュシャゲ)、狐花、はみずはなみず(葉不見花不見)など

主な生育場所

田畑の畦や路傍、土手、墓地など。稲作とともに有用植物として中国大陸から渡来した植物とされ、人里やその付近でしか見られない。あまり日がささない被陰環境にも強く、湿った場所を好む。

特徴

鱗茎で増える多年生。9月中旬に高さ30~50cmほどに花茎を伸ばし、鮮紅色の花を5~7個輪生させる。6枚の鮮紅色の花弁は長さ約4cm幅5mmで、強くそり返り、雄しべと雌しべは長く突き出る。晩秋に幅6~8mm長さ30~50cmでツヤのある線形葉を地面から放射状に伸ばすが、翌春には枯れる。夏は地中の鱗茎のみで過ごす。

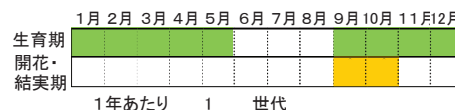


名前の由来: 秋の彼岸前後に開花することから彼岸花。また梵語で「赤い花」を *manjyusaka* と呼び、「曼珠沙華」とあてた。「はみずはなみず」とは花と葉が同時に存在することがないことから。

<農業との関係>

鱗茎には強い毒性もあるが大量のデンプンも含み、水に晒せば毒性分であるアルカロイドが除去されるため、古来から飢饉時の救荒作物として里地やアゼに植えられてきた。また、毒成分のため、ネズミやモグラなどが寄りつかないとされたことも、積極的に田畑のアゼなどに植え付けられてきた理由とされている。他の植物の発芽や成長を抑えることも知られ、アゼの雑草抑制にも使われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



棚田のアゼに植えられたヒガンバナ

<類似種> キツネノカミソリは8月のお盆頃に花茎を伸ばし、黄赤色の花をつけ、花弁は反り返らず雄しべと雌しべは外に突き出ない。ショウキズイセンはヒガンバナと同時期に咲くが、花は一回り大きく色は黄色で花弁の縁は波打つ。

<一言うちく>

毎年、秋のお彼岸頃に花茎を伸ばすヒガンバナ。その秘密は冬の寒さと夏の暑さにあります。ヒガンバナは冬季の低温に会わないと花芽分化せず、また25~30℃の高温によって花芽が成長します。花芽が充分成熟し、地温も下がる彼岸頃がちょうど花茎を伸ばすタイミングとなるのです。



アゼのヒガンバナ群落(葉期)

<人との関わり合い>

ヒガンバナは3倍体のため結実しにくく、全国に見られるヒガンバナはほとんど人の手を介して植え付けられたと考えられている。現在でも観賞用に植えられることが多い。有毒植物だが救荒作物や獣害よけなどに利用されるなど、古来から人間生活と関わりが深く、ヒガンバナの呼び名は全国に数百以上あるとされる。鱗茎は水に晒して毒成分のリコリンを除去しないと食用のデンプンをとることができないが、生の鱗茎はすり下ろして塗布すると、肩こりや乳腺炎、いんきん、打ち身などに効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】 路の辺の老師の花のいちしろく人皆知りぬわが恋妻を (柿本人麿歌集) 曼珠沙華の花あかあかと咲くところ牛と人との影通りを (北原白秋) 曼珠沙華あつけらかんと道の端 (夏目漱石) 曼珠沙華落暉(らくき)も薬(しべ)をひろげけり (中村 草田男) 歩きつづける 彼岸花咲きつづける (種田山頭火) 父若く我いとけなく曼珠沙華 (中村 汀女)

分布：全国

タウコギ (キク科)

ビデンス トリパルチータ
学名: *Bidens tripartita*

田五加木 別名：タコギ、クンショウ、カゼヒキグサ、カラスノハサミ、ダイサンソウ

主な生育場所

水田、水田のアゼ、休耕田、水路など湿った場所に生える。水稻の栽培に伴って日本にもたらされた史前帰化植物の一つで、水田やその周辺環境でよく見られ、全くの自然湿地で見ることは少ない。

名前の由来：落葉低木のウコギ(五加木)の葉に似て、田に生えることから田五加木(タウコギ)。また放射状の総苞片に包まれた頭花が煎草に見えることからクンショウ。

特徴

高さ20～150cmと直立する一年草。茎は全体無毛で葉は対生、葉柄にやや翼があり、深く3～5裂し粗い鋸歯がある。8～10月に上部の葉腋から花柄を伸ばし、多数の黄色の筒状花で構成され果実期に径25～35mmと大きくなる頭花をつける。総苞片は葉状で7～8枚、長さ4cmほど。2本のとげがある瘦果は長さ7～11mm、幅1.6～2.5mm。

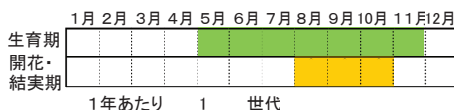


葉の総苞片に囲まれた大柄な頭花

<農業との関係>

特に東日本や北日本の水田でよく発生し、養分や光を競合してイネの生育を不良にして減収を引き起こす。また、大型の個体は茎も木化し、コンバインでの収穫時に障害となる。発芽に酸素を要求し、湛水条件下では発芽しないため、乾田や直播田、畦畔沿いなど田面が露出した部分に多く、湿田や湛水管理の水田では少ない。しかし、除草剤によって比較的簡単に防除可能である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> アメリカセンダングサ(メルマガ44号で紹介)も水田や水辺に生え、よく似るが、葉は3～5枚の複葉で鋸歯は浅く、また頭花も小さく総苞片も細い。センダングサやコセンダングサはやや乾いた場所に見られ、葉に毛があり瘦果は線形。

<一言うんちく>

瘦果にはとげがあり、センダングサなどと違って水田周辺での「ひっつき虫」として昔から身近なこの草ですが、西日本の各地では畦畔のコンクリート化による生育地の縮小や除草剤などの影響で減少傾向にあり、兵庫県などでは絶滅危惧種に指定されるほど姿が少なくなっていました。

<人との関わり合い>

アメリカセンダングサなどと同様に、二本のとげによって、衣服やベットの体によく果実がくっつくため、子どもたちは頭花を衣服等にくっつけて煎草のようにして遊ぶ。茎が固くなる前の若葉は茹でて食用になり、ゴマよごしなどにする。また、中国では全草を気管支炎、咽喉炎の薬に、茎および根を下剤、丹毒などの薬に用いる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】タウコギや田五加木として登場する俳句や短歌の作例は見当たらないので、花の終わった秋遅くにける「草の実」を読んだ句の中から、タウコギの実を思い起こせるものを紹介する。
草の実も人にとびつく夜道かな (小林 一茶) 草の実の袖にとりつく別れかな (岩田 涼菟)
草の実の招き寄せたる秋日かな (市場 基巳) 荒草の実もよく熟れて赤米田 (浅川 正)

分布：全国

ヤクシソウ (キク科)

クレピディアスチュラム デンチクラチュム
学名: *Crepidiastrum denticulatum*

別名：乳草(ちちくさ)、ウサギノチチ、ニガミグサ、ウマゴヤシ

主な生育場所

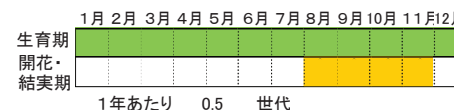
日当たりが良くやや乾いた山野、林縁、路傍、崖地などに生える。石灰岩や蛇紋岩地帯など特殊な地質のところにも分布する。

名前の由来：茎を抱く倒卵形の葉の形が薬師如来の背骨に似ているから薬師草。また、切ると出る乳液は苦く、薬となると考えられ、衆生の疾病を治癒する薬師さまの名に拠ったとの説もある。

<農業との関係>

山間部の田畑の畦畔や法面に見られることがあるが、畑の中に入ることはいくんどない。二年生植物であり、2年以上耕起などの攪乱が生じない環境にしか生育できず、耕地の雑草というより、山野草である。従って、耕地周辺あるいは野山が主な生育地であるが、ときに茅場や急傾斜地の焼き畑で見られることがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 花の形状だけみると、ニガナに似るが、ニガナは春から夏にかけて咲き、ヤクシソウのように茎先に固まって花をつけない。岡山県の石灰岩地帯には絶滅危惧種のナガバノヤクシソウが見られるが、ヤクシソウと異なり葉が茎を抱かない。

<一言うんちく>

薬師草という大変ありがたい名前がついているこの野草ですが、酢酸ゲルマニシール、ベータ・システロールなどの薬用成分を含み、実際に腫れ物などに効くことが知られています。また、苦みがありますが、食べることもでき、その名の通り、とてもありがたい野草のひとつなのです。

<人との関わり合い>

葉を茹でて、煮浸して辛子マコネーズとからめて食べる。また、苦みを活かして、千切った葉をサラダなどに散らしても良い。民間薬としては、開花期の頭花と茎を採取したものを天日で乾燥し、ゴマ油に漬けて腫れ物の患部に塗布して利用する。また、馬が好んで食べることから、かつては晩秋の青物が少ない時期に飼料に混ぜて与えていたらしい。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】
摘みえたる野菊犬夢薬師草(いぬたでやくしぐさ)妹(いも)がみたまは家に待たむぞ (吉野 秀雄)
薬師草草花も可愛ゆし蝶までも (牧野 富太郎)
素朴なる黄色ひろげるヤクシソウ秋深む野をにぎやかにして (鳥海 昭子) ※ヤクシソウの花言葉は「にぎやか」



枝先に直径1.5cmほどの花が固まって咲く



葉の基部は張り出して茎を抱く

分布：全国

フユノハナワラビ（ハナヤスリ科）

学名：*Botrychium multifidum* var. *robustum*

冬の花蕨 別名：冬蕨、花蕨、日陰蕨、カゲワラビ、トコワラビ、霜蕨、寒蕨

主な生育場所

落葉樹林の林床、田畑の畦畔、土手、山野の草地などに生育する。秋から冬にかけて日当たりの良い場所に見られる。

特徴

夏に枯れる冬緑性のシダ植物。無毛で暗緑色、3～4回羽状に深裂し、長さ5～10cm、幅8～12cmで革質の葉を9～10月に展開し、基部近くで胞子葉を分岐する。胞子葉は高さ25cmほどとなり、円錐状に球形の胞子嚢を多数付ける。晩秋から冬にかけて胞子散布後、胞子嚢は枯れ落ちる。胞子の外膜はほぼ平滑で胞子表面は網状。

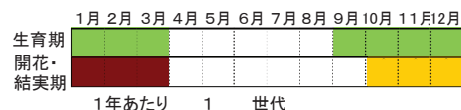


名前の由来： 夏には見られず、秋から冬にかけてワラビに似た栄養葉を展開し、高く伸びた胞子葉は円錐状にたくさんの胞子をつけ、まるで花のように見えたことから、「冬の花蕨」と称された。

<農業との関係>

草生管理で秋から春にかけて刈り取りを行わない果樹園下などで見られることはあるが、耕地内では見かけることは少なく、農業上の被害をもたらすことはない。耕地周辺の利用地では芝地やゴルフ場のラフなどに生えることがあるが、春には枯れてしまうため、ほとんど問題とならない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ナツノハナワラビは、春に芽生えて夏にかけて胞子葉を伸ばし、秋には枯れてしまう。オオハナワラビは全体大柄で葉の先が尖り、茎には毛がある。標高の高い山地にはよく似たヤマハナワラビが見られるが、茎にまばらに短毛がでる。

<一言うちゅ>

冬緑性の植物で、春早くには葉が枯れ、夏前にすっかり姿を消してしまいます。そして、秋風が吹き出す頃に再び葉を出し始め、本々が葉を落とすと青々とした葉と黄白色の胞子葉が目立つようになることから、花言葉は「再生」や「再出発」。来年の秋も無事を姿が見られるといいですね。

<人と関わり合い>

他の植物が枯れる頃、青々とした葉を地上に広げ、胞子葉が天に向かって伸びていく様子が好まれ、鉢植えや盆栽などに仕立てて観賞する愛好家も多い。食用にもなり、晩秋から初冬にきれいな若芽や若葉を摘み取り、姿揚げや鍋物に、さつと茹でて酢味噌だれにするとめづりめが楽しめる。しかし、同じシダ植物でもワラビとは異なる仲間なので、食感、味などは全く異なる。また、生薬では陰地蕨(いんちけつ)と呼ばれ、全草を刈り取って干し、煎じたものを服用すると腹痛や下痢に効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：冬】

ことごとくユダヤの土上冬蕨（齋藤 玄） 冬蕨「樹下の石仏」我と逢ふ（森 澄雄）
夢見るが夢見しあと冬蕨（青柳志解樹） 冬蕨日に反るや日を抱けるや（宮坂静子）
風韻のおもふべし冬蕨（鈴山 實）

分布：全国

オオジシバリ（キク科）

学名：*Ixeris japonica*

大地縛り 別名：ツルニガナ(蔓苦菜)、ジシバリ、這い地縛り、岩ニガナ

主な生育場所

田や畑の畦畔、休耕田、路傍、草地、樹園地、土手、原野などに生える。日当たりが良く、やや湿った場所を好む。最もよく見られるのは水田の畦畔で、伝統的な畦の植生を代表する草花の一つ。

特徴

多年生。根出葉を放射状に広げ、細い茎を地表あるいは浅い地中に長く四方に伸ばす。茎の節から葉や根を下ろし、長い柄の葉は互生し浅くまばらな鋸歯がある。葉や茎の切り口から出る白い乳液は苦い。葉脇から伸びる花茎は高さ20cmほどでタンポポに似た径約3cmの頭花を2～3つける。皮針形のそう果は長い冠毛をもつ。

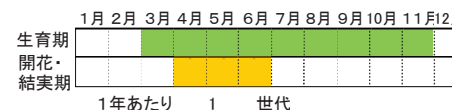


名前の由来： 細長いほふく茎で地面を這って広がっていく様子が、まるで地面を縛っているようだと地縛り。類似の地縛り(イワニガナ)より花や葉ががが大きくなることから、大地縛り。

<農業との関係>

成長点が低い位置にあるため、草刈りに強く、また被陰には弱いので、刈り払い機などで適切に管理されている水田畦畔で多くなる。除草剤を多用する畦や基盤整備直後に造成された畦畔では見かけることが少なく、伝統的な畦草刈りによる管理の指標となる。耕起には弱いので、水田や畑地内に入ることとはほとんどないが、耕起管理が少ない樹園地などではやっかいな雑草となることがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> タンポポ類は匍匐茎を伸ばさず、花茎につく花は一つ。やや乾いた場所にも生えるイワニガナはオオジシバリ同様に地面を這って四方に広がるが、全体小型で葉は広卵形、花の大きさは径2～2.5cmほど。

<一言うちゅ>

オオジシバリは春から初夏にかけて花数が多く、ミツバチなどの蜜源としても貢献しています。しかし、かつては各地の水田の畦にありふれた花でしたが、コンクリート畦の増加や除草剤による管理が増えたため、最近ではほとんど見かけることが少なくなってしまう地域もあるようです。



花は舌状花のみからなり、中央に黒っぽい雄しべがよく目立つ。

<人と関わり合い>

全体に苦みがあるが、若葉は「苦み菜」として食べることができる。開花期に全草を採取し、よく洗った後に干したものは生薬名で剪刀股(せんとうこ)と呼ばれ、健胃、消炎、解熱に効能がある。健胃薬としては、センブリの代用となる。また、蓄膿症にも効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：設定なし】

春から夏にかけて水田まわりでよく見かける花にかかわらず、意外だが、季語の設定もなく、これまで短歌や俳句に登場することはなかったようである。

分布: 全国

キショウブ

(アヤメ科)

イリス プセウドアコルス
学名: *Iris pseudoacorus*

黄菖蒲

別名: イエローアイリス、ウォーターフラッグ

主な生育場所

ため池や湖沼の岸辺、河川岸、水路、湿地など、水深が0~10cm程度の浅い水辺域を好む。湿った環境であれば畑地、林縁にも見られる。乾燥に注意すれば花壇や畑地で栽培することもできる。

特徴

太い地下茎のある大型の多年草で、高さ1.2mほど。扁平な幅2~3cmの剣状の葉が二列に根生。両面に明瞭な中央脈が隆起する。花茎は少数の枝を分け、枝先に1~2個の鮮黄色の花をつける。花は大型で先が垂れる外花被片3枚、小型で直立した内花被片3枚からなる。果実は断面が三角形の長楕円形で中に扁平な種子が入る。



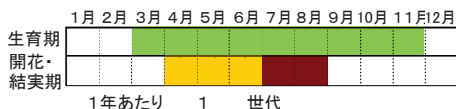
名前の由来: 同様に湿地に生えるショウブ科のショウブ(菖蒲)の葉によく似て、黄色の花をつけることから黄菖蒲。ちなみにショウブ科のショウブの花は花弁がなく緑色の円柱花序となる。

<農業との関係>

水田や畑にも生えることがあるが、耕うんに弱いため問題にはならない。しかし、ため池や水路では大群落を形成して、取水や通水障害を引き起こすことがある。花がきれいなため、池やビオトープなどにひとたび導入すると、地下茎だけでなく水に浮く種子による拡散により、あちらこちらに群落をつくり、吸肥力も強く、在来種を含む他の水辺植生を駆逐してしまうおそれがある。

<生活史>

関東地方の例(目安)



鮮やかな黄色の花。外花被片基部に斑紋が入る。

<類似種>

在来種のアヤメの仲間はずべて紫色の花を咲かせ、黄色の花をつけるものはない。また、ショウブ科のショウブの葉には独特の芳香がある。

<一言うんちく>

キショウブは日本に自生せず、明治30年に観賞用としてヨーロッパから持ち込まれた外来植物です。現在は全国に野生化し、繁殖力が高いため、水路やため池の強害雑草となったり生態系に大きな影響を与えています。きれいな花ですが、逃げ出しやすいため栽培することは避けましょう。



葉に隆起した中央脈がめだつ。

<人と関わり合い>

在来種のアヤメやカキツバタの栽培品種には青系や白系などが多く、黄色系の花がないため珍重され、観賞用として各地の水辺で導入されてきた経緯がある。庭池にもスイレンと並んで多く植えられてきたが、大繁殖し手に負えなくなることもしばしばある。また、景観を兼ねた水質浄化植物としてビオトープや水路に植えられることもあるが、水質浄化能力はそれほど高くない。なお、全草に含まれるイリジンは摂取すると胃の障害を引き起こすおそれがあり、食用や薬用には不向きである。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

黄菖蒲のをはりの花のをはりかな (山口青邨) 黄菖蒲が瓦様に咲ける曇かな (富安風生)
黄菖蒲の黄の映る水平らかに (池内たけし) 黄菖蒲の中洲が漲つ梓川 (白岩てい子)
黄菖蒲に踞ひとり人や喪の明けず (阿部みどり女) 黄菖蒲や魚板のかわく翁堂 (高井去私)

分布: 全国

ヤブカラシ

(ブドウ科)

カイトリア ヤボニカ
学名: *Cayratia japonica*

藪枯らし

別名: 貧乏蔓(びんぼうかずら)、貧乏葛(びんぼうくず)、ビンボウグサ

主な生育場所

野原、堤防、林縁、道ばた、荒地、庭先などの日当たりの良い場所を好む。ツルを伸ばすため、フェンスなどにも絡まりやすい。市街地にもよく見られる。樹園地やアゼなどに生育すること多い。

特徴

ツル性で2~3mも伸びる多年生。茎は角張り、節を中心に赤紫色を帯びる。小葉5枚からなる葉は互生する。小葉には低い鋸歯があり、基部に托葉がある。夏に花柄を伸ばした先の集散花序に多数の緑黄色の小花をつける。小花の直径は5mmで、花弁が落ちると黄赤色の花床が目立つ。地下茎は太く横に長く伸びる。



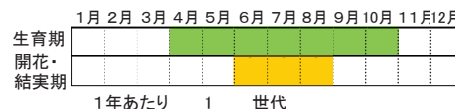
名前の由来: 繁殖力が非常に強く、竹藪なども枯らすほど繁茂することから。また、別名は庭の手入れどころではないような荒れ放題の貧乏の家でよく見られることから。

<農業との関係>

果樹園では、繁殖力が旺盛で、地下茎も深く長く伸びるために、いったん定着すると防除が難しい強害雑草となる。地下茎は耕起等によって断片化しても萌芽能力を有し、切断された茎も土中に埋められると活着することがある。種子からも簡単に発芽するので、農地では、いったん侵入・定着をみたら、花をつける前に丹念に抜き取るか、除草剤によって地上部を枯らすなどが重要である。

<生活史>

関東地方の例(目安)



すぐ落ちてしまう淡緑色の4花弁をもつ花

<類似種>

ウリ科のアマチャヅルも5枚の小葉からなるが、小葉はヤブガラシよりも柔らかく、幅も狭い。また、茎はヤブガラシのように茎は赤紫色を帯びることがない。

<一言うんちく>

庭先にヤブガラシが繁茂すると貧乏につなげるともされ、まるで貧乏神のような言い草ですが、若葉は食べることができ、また根も生薬となるほか、茎や花を茎と一緒にすりつぶすと墨色が濃くなるなど、いろいろと役に立つ器用貧乏な一面も持っているのが、このヤブガラシです。



葉柄や茎は紫色を帯び、小葉5枚のうち、先端が最も大きい。

<人と関わり合い>

ツル性で庭先などを覆い尽くすため、古来からカナムグラと並んで、手入れが行き届かない荒れ果てた風情を醸し出す草として扱われてきた。若芽や柔らかい茎先は、天ぷらのほか、よく茹でてアクを抜き、水にさらせば、辛みがアクセントとなる和え物などに利用できる。また、根を乾燥させたものは烏賊母(ウレンボ)と呼ばれる生薬で、利尿や鎮痛、解毒効果があるとされる。生の葉をすりつぶした汁は腫れ物や虫刺されに効くという。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 初秋】

あるといふところにありし藪枯 (星野 立子) 月出でて蔓先潤ふ藪がらし (岸田 稚魚)
藪がらしも枯れてゆく時みやびやか (細見 綾子) 血縁に百姓の妻藪がらし (百合山 羽公)
外濠を埋めたつむりの藪がらし (鷹羽 狩行) 学ぶヒマラヤシダへ藪がらし (中村草田男)

分布: 全国

アメリカアゼナ (ゴマノハグサ科)

学名: *Lindernia dubia* subsp. *major* リンデルニア ドゥビア メジャー

亜米利加畦菜 別名: アキボコリ, ハエドマリ

主な生育場所

水田内や畦畔, 休耕田や耕作放棄地, 湿地, 湿った畑にも生えることがある。人の手が加わっている, もしくはかつて加えられた湿地に見られ, 開発を受けたことのない湿地には侵入していない。

名前の由来: 在来種のアゼナの仲間, 北アメリカからの帰化植物なのでアメリカアゼナ。

特徴

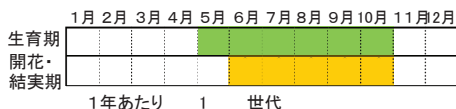
北米原産の一年生の帰化植物。基部付近でよく分枝し, 直立または斜上する。無毛で高さ10~30cm。葉の表面はしばしば赤みを帯び, 縁に低い鋸歯があり, 表裏とも5本(まれに3本)の葉脈が目立つ。夏に葉腋から葉の長さより短いか同等の花柄を伸ばし, 唇型で8~10mmの淡紫もしくは白色の花をつける。果実は狭楕円形。



<農業との関係>

アゼナ類は水田でよく見かける雑草だが, 大発生することがない限り, 害草とはなりにくい。しかし, アメリカアゼナをはじめとするアゼナ類は, 水田で使われる除草剤のうち, スルホニルウレア系の成分に対し抵抗性を示すタイプが出現し, 各地で問題となった。除草剤に対する耐性を有する雑草が増えたため, 最近では非スルホニルウレア系の成分も配合した除草剤が主流となりつつある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 在来種のアゼナの葉には鋸歯がなく, 3本の葉脈が目立つ。同じく北米原産でアメリカアゼナの1タイプであるタケトアゼナの鋸歯は不明瞭で, 葉の基部が丸く卵形。ヒメアメリカアゼナの葉は長さ約15mmと小さく花柄が葉の2~3倍と長い。

<一言うんちく>

畑地ほどではありませんが, 水田内にも近年, アメリカアゼナをはじめ, アメリカコナギ, アメリカセンダングサ, アメリカタカサブロウ, アメリカミズキンバイ(ヒレタゴボウ), アメリカミソハギなど, 北アメリカや欧州原産の帰化雑草が増えてきており, 「欧米か!」が進んでいます。

<人との関わり合い>

アメリカアゼナがいつ頃から帰化したのかは不明だが, 戦後, 西日本を中心に各地に広まった。新しい帰化植物ではあるが, いまや水田では, タケトアゼナとともに在来種のアゼナに置き換わって見かけることが多くなってきている。また, アゼナ類は水田の主要な雑草の一つであるが, 食用や薬用の記録はない。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】

アメリカアゼナを含めたアゼナ類の花はよく見ると可憐ではかなげな美しさがあると思うのだが, これまで詩歌などに登場したことは寡聞にして知らない。よく見る「ただの田の草」の一つであるが, 除草剤耐性タイプの出現によって, 初めてその名を広く知られるようになったとは, 残念なことである。

分布: 全国

ツルボ (キジカクシ科)

学名: *Barnardia japonica* バルナルディア ヤポニカ

蔓 穂 別名: ツルボウ, スルボ, サンダイガサ(参内傘), スミラ

主な生育場所

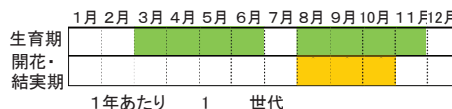
田畑の畦畔, 畑, 樹園地, 山野, 路傍, 堤防, 河原など日当たりの良い草地に見られる。沿海部の崖部にも生育する。公園内や人家の庭先の芝生内にも見られることがある。基地に咲くことも多い。

名前の由来: はっきりしないが, 群生し穂が連なって咲く様子から, 連穂(つれば)が転化したとも。別名の参内傘は, 公家が宮中に参上する際に使った柄の長い傘の閉じた様子の連想から。

<農業との関係>

鱗片や種子で増殖し, 芝地や牧草地, 果樹園で害草となることがあるが, 盛夏には葉がいったん枯れてしまうので, 気になることは少ない。畦畔などに群生すると花期にはそれなりにきれいであるため, 意識して刈り残す場合も多い。春と秋の新葉が出る前に草刈りを終えると毎年花を楽しむことができる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 海岸部には全体がより大型で葉の幅も10~20mmと広い変種のハマツルボがみられる。ヤブランは林床など日陰に生え, 葉の枚数は多く, 葉色も濃い。

<一言うんちく>

ツルボもヤブランもかつてはユリ科に属していましたが, DNAの塩基配列情報に基づく最新の分類体系では, アスパラガスなどを含むキジカクシ科に移ってしまいました。新たな分類体系下で旧来のユリ科は大きく解体され, キジカクシ科やヒガンバナ科など8つに分かれてしまいました。

<人との関わり合い>

ツルボの鱗茎にはデンプンが多く含まれ, 外皮を向けば食料となるため, かつては飢饉時の救荒植物として利用されてきた。小さな鱗茎は皮をむいてそのまま食べることができ, 大きなものは割って, 塩を入れた熱湯でよく茹でた後, 塩や砂糖で味付けして食べる。花や葉も茹でて, サラダにしたり, 炒めて食べる。また, 鱗茎をすり下ろしたものをガーゼに塗布して湿布とすれば, 腰痛や打撲傷, 腫れ物の吸い出し, 初期の乳腺炎などに効果がある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 初秋】 ※同じごろに咲く彼岸花と比べて, 少々地味なせいか, 詩歌に取り上げられることは少ないようだ。

くさはらの中よりひとり背のびするツルボむらさき来ている秋 (鳥海昭子)



6枚の花被片は平開する。



花茎の下方についた花から咲いていく。

分布：全国

ヤナギタデ (タデ科)

柳 蓼

別名：マタデ、ホンタデ

ベルシカリア ヒドロピペル
学名：Persicaria hydropiper

主な生育場所

水田、畦畔、休耕田、用水路わき、川辺、ため池、湿地など、水辺に生育する。転換畑など水田跡の湿っぽい環境下だけでなく、発芽時に湿潤であれば生育期には乾くような畑地にもみられる。

特徴

高さ40～60cmほどになる一年生。根本は地面を這い、やや太くなる節から根を下ろし斜上する。短い葉柄で互生しほとんど無毛の葉の葉鞘には1～5mmの緑毛がある。夏から秋にかけ、茎や枝先に淡緑色か淡紅色の花をまばらな穂状につける。腺点の多い花被に包まれた濃褐色で3稜またはレンズ形の種子には光沢がない。

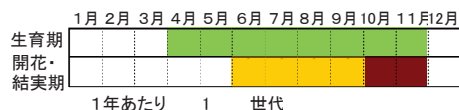


名前の由来：タデの仲間のうちでも葉が披針形で、同じように湿地に生えるヤナギ類の葉に似ていることから、柳蓼。

<農業との関係>

全国の水田に普通に見られる雑草であるが、大発生しない限り水稲と競合するようなことは少ない。しかし、西南暖地では、通常は夏緑一年生のヤナギタデの株が越冬して残り問題化することもある。霜が降りない地域でヤナギタデが多発生する場合には、イネ収穫後に早めに秋耕することも重要。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同様の湿地環境に生育するポントクタデの葉の脈や縁には伏毛が生え、表面にハの字型の斑が目立つ。また、イヌタデの葉鞘の縁毛は長く、花穂には密に花をつける。類似種と最も異なる点は、ヤナギタデの葉のみずみがあること。

<一言うんちく>

ことわざ「蓼食う虫も好き好き」の蓼とは、ヤナギタデのこと。辛味成分ポリゴジアルを含むため、葉を噛むとビリリとしびれるほどで、ネパールでは魚毒として漁にも用いられるそうです。それにもかかわらざんモンアカヨトウ（蛾）の幼虫などは好んでこの葉を食べるそうです。

<人との関わり合い>

ヤナギタデの辛味は特有の香りを持ち、変種ムラサキタデとして栽培されるなど、薬味として昔から利用されてきた。芽生えた紅紫色の双葉を刺身の「つま」として利用したり、葉をすりつぶしリンゴ酢に加えたものは「タデ酢」として鮎の塩焼きによく合う。味噌とみりんに加えると「タデ味噌」となり、白身魚につけて焼くとおいしい。また、辛味成分のポリゴジアルには、抗菌効果、がん細胞の増殖抑制などが報告されている。また、ヨーロッパではヤナギタデの葉から黄色の染料をとっている。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋(蓼の花) ※水辺に生育する蓼類を含む。】 しのゝめや雲見えなくに蓼の雨 (与謝 蕪村)
蓼の葉や泥鰌隠るゝ薄濡り (正岡 子規) 刈りかけて去る村童や蓼の雨 (杉田 久女)
やほ蓼も川の瀬みればおいにけり辛しやわれも年をつみつ (曾禰 好忠)
からきにも馴るれば馴れて過ぐす世に蓼はむ虫を何かとがめむ (村田 春海)

分布：北海道を除く全国

ツルマメ (マメ科)

蔓 豆

別名：ノマメ、クズカヅラノハエ(久須加都良乃波衣)

グリシナ マックス ソヤ
学名：Glycine max subsp. soja

主な生育場所

水田や畑の畦畔、路傍、野原、堤防法面などに生える。河原の高水敷や水路沿いなどやや湿った水辺の近く日当たりのよい場所によくみられる。ツル植物なので、フェンスなどに巻き付くとよく伸びる。

特徴

一年生つる性植物で下向きに粗い毛の生えた茎は細く長く伸び他に巻き付く。長い柄がある葉は互生し、両面とも伏毛を密生する狭卵形～披針形の3小葉からなる。8～9月に葉腋から花柄を伸ばし長さ5～8mmで紅紫色の蝶形花を3～7個つける。まれに白花もある。豆果は長さ2～3cmで、淡褐色の毛を密生し2～3種子を入れる。



名前の由来 茎はツルになって伸び、大豆のようなサヤをつけることから、ツルマメ。別名のノマメ(野豆)は大豆に似ていて野原に生えることから。クズカヅラ(葛蔓)もマメ科のツル植物を表す。

<農業との関係>

野辺に生えるツルマメを品種改良したものが、栽培種の大豆となったとされる。そのため、ごくまれに大豆と交雑することが知られ、その雑種はツル化したり、熟すとサヤがはじけるなどツルマメ由来の不良性質が発現することが多く、大豆畑の周辺では大豆の品質低下を防ぐため除草することがのぞましい。また、畦に見られることがあるが、ほ場内に生えて雑草化することは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 混生もするヤブマメの葉は丸みを帯び、花はツルマメの倍以上の大ききで開花時期もやや遅い。やや乾いた草地や林縁などに生育するヤブツルアズキやノササゲの花は黄色。ヤブツルアズキの葉は軽く3裂し、ノササゲは毛が少ない。

<一言うんちく>

大豆の原種なので、花や豆果は大豆にそっくりです。縄文時代前期の三内丸山遺跡などからはツルマメと考えられるマメが出土しており、日本でも大豆の栽培が伝播する以前には食用として利用されていたようです。種子には大豆と同様にイソフラボンなどポリフェノールも含まれています。

<人との関わり合い>

種子は大豆と同様に食べることができるが、サイズが小さく熟すとサヤからはじけやすいため、大量に集めることが難しい。固くなる前の柔らかいサヤを集めて茹でると枝豆のように食べられるが大豆ほどの味はなくそっけない。また、大豆は食用だけでなく、サポニンやポリフェノールが多く含まれるため、その煮汁は女性の産後の回復促進、食中毒、多くの胃腸病に効果があるとされるが、ツルマメは大豆ほど機能性成分の含量は少なく、効果を有するほどでない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】 大豆の原種で野辺に普通にみられるツルマメですが、これまで詩歌に詠まれたことはないようです。栽培種の「大豆」は秋の季語で、収穫やその後の作業風景を「大豆ひく」「大豆干す」などとした季語もあります。

豊稔の稲も大豆も色づきて (高野 素十) 豆引も足駄でおはす御僧哉 (会津 八一)



小葉は長さ2.5～8cm、幅1～3cmの狭い楕円形



サヤに褐色の毛を密生する豆果

分布：関東地方以南

コセンダングサ

(キク科)

学名: *Bidens pilosa* var. *pilosa*

小柄種草

別名：ひつつきむし、三葉鬼針草

主な生育場所

路傍、田や畑の畦畔、畑地、牧草地、
芝地、荒地や空き地、野原、河原など
に普通にみられる。日の当たるやや乾い
た場所によく群生するが、適応性が高く
日陰の湿地環境でも生育できる。

特徴

江戸時代に伝播した熱帯アメリカ原
産の一年草。細かい毛が生え、断面
が4～6角形の茎は直立し、高さ約0.5
～1m。3～5葉からなる複葉は下部
で対生、上部で互生し、丸みを帯びた
鋸歯がある。茎上部の枝先に、黄色
の筒状花だけからなる頭状花をつけ
る。果実はやや平たく4稜形。下向き
のとげを並べた3～4本の芒がある。



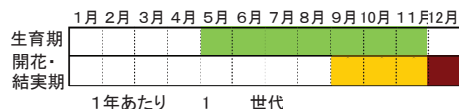
名前の由来：樹木の柵(センダン)の葉に似て
いることからセンダングサ。また類似種のセンダ
ングサに比べ、花弁のない花が小さく見え、また
葉も丸みを帯びることから小(コ)センダングサ。

<農業との関係>

農地周辺に普通にある雑草で、同属で湿地を好むアメリカセンダングサと異なり水田内に入ることのないものの、畑地や果樹園で群生し、作物との水分・養分競合や収穫作業の障害を引き起こし強害雑草となることがある。コセンダングサの仲間は、衣服等にくっつきやすい果実が農作業に伴って農地に拡散されるので、その多くの種類が世界の暖帯から熱帯の農地で問題雑草となっている。

<生活史>

関東地方の例(目安)



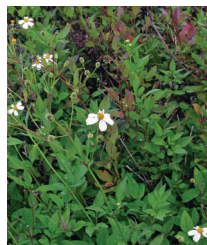
黄色の筒状花からなる頭状花(右)と果実(左)

<類似種>

湿地に生えるアメリカセンダングサの茎は赤みを帯び、頭状花の総苞片が目立ち、果実には2本の芒。似た環境に生育するセンダングサの頭状花には1～5枚の舌状花があり、小葉に不規則な切れ込みが出やすい。

<一言うんちく>

世界の温帯～熱帯に広く分布するコスモポリタンなコセンダングサは、種内変異も大きく、日本でも頭状花に白い舌状花があるシロバナセンダングサや白色の舌状花が1cm以上の大輪となるアワユキセンダングサなどの分布が知られ、沖縄県ではサトウキビ畑の大変な問題雑草となっています。



白色の舌状花が目立つ変種アワユキセンダングサ

<人との関わり合い>

果実は「ひつつきむし」として、服などにくっつくとなかなか取れないが、アメリカセンダングサと比較すると、芒(のぎ)の数は3～4本と多い(アメリカセンダングサは2本)ものの、果実は細長い四角柱でつまみやすく、扁平なアメリカセンダングサの果実よりは衣服からはがしやすい気がする。

<俳句や短歌への登場>

センダングサの仲間は、「ひつつきむし」として昔から晩秋の野辺を代表する植物だが、残念ながら季語への登録はないようである。また草種名が6文字で語呂が良くないためか、俳句や短歌に詠われた例を知らない。

分布：東南北部以南

ウラボシ

(ウラボシ科)

学名: *Diplazium glaucum*

裏白

別名：シダ(歯染)

主な生育場所

里山など主に低山地帯の林床などに生える。日当たりがよく乾き、貧栄養な場所を好む。疎林の林床や日の当たる斜面部でよく見られ、ときに大群落となる。山火事跡などにもよく見られる。

特徴

固い葉柄は直立し、その先に一対の葉を約120度の角度で広げる。葉は羽状に2回深裂し、長さ30cm～1mほど。表面は緑色だが、裏面は粉白色。二枚の葉の間から次年度以降、新たに葉柄を伸ばして一対の葉つけ、毎年葉の段を重ねていく。7月をはじめ、葉裏の裂片中央脈の両側に黄緑色のソーラス(胞子囊群)を並べる。



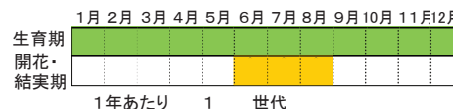
名前の由来：葉の表面は非常につやがある緑色だが、裏側は粉を吹いたように白いことから。また元来、「歯染(シダ)」とはウラボシを指す。

<農業との関係>

畑地や田内に生えることはないが、谷津田に接する山腹斜面に見られることがある。本州中部以西の里山ではよくみかけ、葉は1mと大きくなるので、野良仕事で一休みする際の敷物や、枯れ葉を焚き付け用に利用していたと思われる。

<生活史>

関東地方の例(目安)



葉の裏はその名の通り白い

<類似種>

コシダはウラボシと同じような環境に生え、葉裏も白く、一対の葉を展開しながら成長する様子もよく似ているが、コシダの葉は15～40cm程度とウラボシより小型。またウラボシの葉は羽状に2回深裂するが、コシダは羽状に1回深裂のみ。

<一言うんちく>

ウラボシが縁起物として重宝されるのは、葉裏の白さが、神様に対して裏表のない潔白で清廉な心を表しているからともされています。また花言葉は「無限に」。来年こそウラボシにあやかっ、心安らかに清い心持ちで平和な時間が続くことを願うばかりです。



一対の葉の間から新たな一対の葉が展開

<人との関わり合い>

毎年一対の葉を重ねていく様子や葉が垂れ下がる様子を「歯垂る(しだる)」として長寿をイメージすること、また葉裏が白いことから代々白髪になるまで長生きするようにとの願いを込めて、古くから軒先の注連飾りやお供え餅のお飾りなどの縁起物として使われてきた。また、光沢のある葉柄は固く丈夫なため、編みカゴなどの材料としても利用される。食用には適さないが、冬に地上部を採り、刻んで日干しにしたものは、利尿剤となる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：新年】歯染(しだ)はウラボシのこと。
餅を夢に折むす歯染の草枕(松尾芭蕉) 新年の山深く歯染はみどりなる(室生犀星)
名こそかはれ江戸の裏白京の歯染(正岡子規) 裏白に齢かきね父と母(百合山羽公)
裏白のうらまで年の光かな(川瀬巴水) 裏白や父が飾れば青まさら(中村汀女)

分布: 全国

ゲンゲ (マメ科)

学名: *Astragalus sinicus*

蓮華

別名: レンゲ, レンゲソウ, テンマリソウ, ゲゲバナ, ミコシソウ, 紫雲英, 翹揺

主な生育場所

耕作前の水田, 休耕地, 田畑の畦畔, 法面草地, 河川敷など。湿った場所を好むが, 長時間冠水するような湿地には生えない。また日陰でも生育できるが, よく日の当たる場所で大きな群落となる。

特徴

下部は地面を這い, 上部は斜上し10~25cmの高さとなる越年草。茎の断面は四角形で柔らかく, 有毛で根元からよく分枝する。葉は互生し, 9~11枚の小葉からなる奇数羽状複葉で小葉は倒卵形で円頭あるいは凹頭。10~20cmの花柄の先に紅紫色の蝶形花を輪状につける。果実は黒熟し, 長さ2~3cm。種子は勾玉形で茶系色。

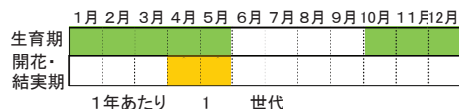


名前の由来: ゲンゲとは漢名の「翹揺」の音読みに由来する。また, 春先に伸ばした花茎の先につける7~10個の輪生状の花の様子を仏様が乗る「蓮華」(ハスの花)の座に見立てて, レンゲ。

<農業との関係>

古来から緑肥や飼料として各地で栽培されてきた。とくに化学肥料が登場するまでは, 窒素固定能が高い根粒菌をよくつけ, 毎年自生するゲンゲは水稲休閑中に土壌を肥やすことのできる優秀な緑肥であり, 10aあたり5kg以上の窒素を供給することができた。しかし, 化学肥料の普及や田植えの早期化による生育盛期や結実期前の耕うんにより, 急速に春の水田から姿を消していった。

<生活史> 関東地方の例(目安)



水田に緑肥として栽培されるゲンゲの開花期

<類似種> 春の水田で似たような植物は見当たらない。同じ豆科のヤハズエンドウ(カラスノエンドウ)も羽状複葉だが, 小葉の幅は狭く, 小葉数もゲンゲより多く, 偶数枚となる。また蝶形花を同じように頭状につけるシロツメクサの花の色は白い。

<一言うんちく>

ゲンゲは, 日本産の草花ではなく, 奈良時代頃に中国から緑肥や飼料用に導入された帰化植物です。その後, 春の水田の風物詩となるほど日本の風土に馴染み, 和歌や俳句などにも多く詠われています。しかし, 緑肥や飼料用のゲンゲ種子の生産はいまだ中国で行われることも多いのです。



花茎の先に蝶形花7~10個を輪生

<人との関わり合い>

緑肥や飼料用に栽培されるほか, ミツバチの良質な蜂蜜を提供する蜜源植物として養蜂家にもよく利用されている。また, 水稲不耕起栽培と組み合わせて, 水稲移植前後の雑草抑制にも利用されることも。各地の休耕地等に鑑賞用にも栽培される。若菜や花は食用となり, 花付きの茎を湯揚げにし, 花と蕾を酢を入れた熱湯にくぐらせ三杯酢で食べたりする。開花期に採りし天日乾燥したものは, 咳やのどの痛みなどに効くとされ, 民間ではうがい薬等にも使われることがある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】 手に取るな やはり野に置き 蓮華草 (滝野 瓢水) 胸までの紫雲英仔犬は迷ひゆく(中村 草田男) 野道行けばげんげんの束すところある(正岡 子規) げんげんを打ち起したる瘦田かな(正岡 子規) 春の田はまただがやずれんげうさあぜのさかひもあらず咲きたり (三ヶ島 霞子) 蒔土(あかつち)の山の日かげ田にげんげんの花咲く見れば春たけにけり (島木 赤彦)

分布: 全国

イチョウウキゴケ ウキゴケ 科)

学名: *Ricciocarpus nataus*

銀杏浮き苔

別名: イチョウウキクサ, イチョウモ, ムラサキイチョウゴケ

主な生育場所

水田やため池, 流れの穏やかな水路など。水面を浮遊するため, 流れのある河川ではワンドなど水がよどんでいるような場所で見られることもある。また, 湿地などの泥上では陸生形でも生育できる。

特徴

水面を浮遊する苔類。多年草で肉厚の葉状体をもつ。春先から晩秋にかけて赤みを帯びた緑色で長さ10mm幅5mmほどの肉厚で扇形の葉状体を分裂し増殖する。裏側には紫色の鱗片を根状に伸ばす。水田では湛水期間中に葉状体中央部に胞子体形成する。落水以降, 葉状体裏側から仮根を下ろし, 陸生形で越冬する。

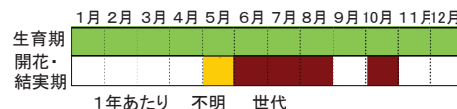


名前の由来: 水面を浮遊するコケで, 葉状体(葉のように見える部分)が扇形に広がり表面には葉脈のような浅いしわができることから, 銀杏(いちちょう)の葉に見えて銀杏浮き苔。

<農業との関係>

冬期でも冠水したり, 土壌が乾きにくい湿田, 半湿田に多く見られたが, 乾田化や除草剤の影響等により, 一時ほとんど見られないほど減少し, 絶滅危惧Ⅰ類に指定されていた。しかし, 最近では無農薬水田以外でも各地で見られる機会が増えてきており, 2007年度版のレッドリストでは準絶滅危惧に格下げされた。しかし, まったく見られない地域もあり, その原因はいまだ不明である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



中干しによる落水期に着土したイチョウウキゴケ

<類似種> 同じウキゴケ科に属するウキゴケ(カヅノゴケ)は, 水面ではなく水中を浮遊する。また葉状体は白緑色で厚みはなく, 二股に分枝する。ハタケゴケはよく似た肉厚の葉状体をもつが, 規則的に二股分岐して円形ロゼット状となる。

<一言うんちく>

イチョウウキゴケは日本で唯一の水面を浮遊するコケですが, かつてはどの水田でも見られた普通の水田雑草でした。しかし, いつの間にか各地で姿を消し, 一時はその実態が謎わしい(虚仮)ほど少なくなりました。最近, 復活傾向にありますが, 決してこけおどしとなりませぬように。



ウキクサと混生

<人との関わり合い>

食用や薬用としての利用の記録は見当たらない。しかし, イチョウウキゴケは除草剤に対して感受性が高いと考えられることから, 最近, 水生植物に対する農薬の影響評価用の材料としての検討も始まっているようである(FAMIC広報誌No.54 2018年秋号より)。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】 「苔(こけ)」は, 「苔青し」「苔茂る」「苔の花」(いずれも夏の季語)のように俳句や短歌などにはよく取り上げられる題材だが, かつては水田でよく見られた水面を浮遊する唯一の苔であるイチョウウキゴケに関しては誰も関心がなかったようである。田んぼの観察会では見かけることも多くなったので, もっと注目されてもよい水草の一つといえよう。

分布：全国（北海道南部以南）

ウツギ（アジサイ科）

ドイツア クレナータ
学名：Deutzia crenata

空 木 別名：卵の花（ウノハナ）、雪見草

主な生育場所

里山の日当たりのよい林縁や路傍、崖地などに生える。溪流沿いなど川辺にも多い。また、人家の庭先や生け垣、所有する畑や水田の境界部に目印用に植栽することもある。

特徴

樹高1～3mほどで株立ちする低木。葉は対生し、若枝は赤褐色で星状毛がある。縁に微細な鋸歯があり長さ4～9cm、幅2.5～3.5cmほどの楕円形～卵状披針形の葉は対生する。葉の両面や葉柄にはやや密に星状毛をしく。5～7月に枝先に下向きの白色の花を多数つける。花後、碗形で花柱が残った果実をつけ、晩秋に熟す。

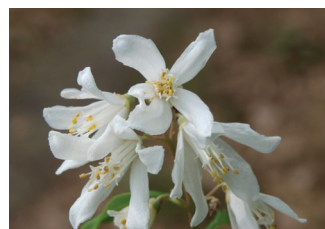
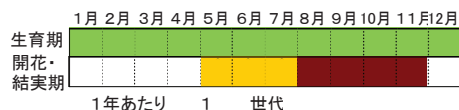


開花期にも前年度の果実が残る

<農業との関係>

里山によく見られる清楚な白いウツギの花は邪気を払うと考えられ、生け垣や畑の境界などに植えられてきた。また、開花期が田植えの時期にあたるため、今でも東北地方を中心に水田の水口に花のついたウツギの枝を差し、イネに邪気が宿らないように折る風習が残る。たくさんの枝を水口に差し、枝先に密生して咲くウツギの花をたわわに穂るイネの穂に見立てて豊作を願ったともされる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



花弁は5枚。花弁よりやや短い雄しべが10本ある

<類似種> 関東地方以西には4月ごろから咲き始め、小振りな花がつくヒメウツギが河川沿いの崖地などに見られる。またやや標高の高い山地に育つマルバウツギの葉は卵形で丸い。バイカウツギの花はウツギより大きく芳香があり、花弁は4枚。

<一言うちく>

中空の幹をもつ低木は「ウツギ」と呼ばれることが多く、今回取り上げたアジサイ科のウツギの他に、淡紅色～赤色の花をつけるスイカズラ科のタニウツギや、小降りの花のバラ科のコゴメウツギ、また有毒植物のドクウツギなど多数あり、いずれも里山に身近な植物となっています。



梅雨時の林縁を彩るウツギ

<人と関わり合い>

初夏に咲く清楚な卵の花は、万葉歌人の大伴家持が好んで詠んだように、古来からよく知られ、詩歌にもよく取り上げられてきた。同じく初夏の季語であるホトギスとともに詠われることも多い。唱歌「夏は来ぬの冒頭にも「卵の花の匂う垣根に」と取り上げられている。また、関東地方などでは豆腐の絞りがすである「おから」を「から（空）」を連想し縁起が悪いとし、「おから」と同様になく、小さな花をたくさんつけるウツギの花に喩え「卵の花」と呼ぶ。ただし、ウツギ自体は食材として適さない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：初夏】 卵の花の過ぎば惜しみか霍公鳥雨間も置かずこゆ鳴きわたる（大伴家持）
なく声をえやは忍ばぬほととぎす初卵の花の影にかくれて（柿本人麻呂）
卵の花をかざしに関の晴着かな（河合曾良） 卵の花や神と乞食の中に咲（小林一茶）
卵の花のこぼる露の広葉かな（与謝蕪村） 卵の花は日をもちながら曇りけり（加賀千代女）

分布：全国

コニシキソウ（トウダイグサ科）

カマエサイセ マクラータ
学名：Chamaesyce maculata

小 錦 草 別名：アカクサ、チチクサ（乳草）

主な生育場所

畑地や芝地、路傍、裸地、庭先などに普通に見られる。日当たりの良い環境に多い。また湿り気のある場所でも生育するが、乾燥に非常に強く、砂礫地など植物が生育しにくい環境にもみられる。

特徴

地面にへばりつくように生える北米原産の小型一年性。全体に白い伏毛が多く、地上を這う茎は長さ20cmほどで切ると白い乳液を出す。葉は対生で長さ5～13mmの長楕円形、上部に浅い鋸歯、中央部に暗紫色の斑紋がある。6～11月ごろ葉腋に花弁のように見える4個の小さな付属体を持つ花をつける。果実には種子3つが入る。



<農業との関係>

夏作の畑にも生え、秋遅くまで生育するが、小型の植物であるため優占する場合を除いて、雑草害はほとんど生じない。作物の根が入りにくいほどの固い土壌では優占してしまうことがある。地面にへばりつくようにして生えるので、手取りでの除草は困難だが、除草剤を連用するなど管理強度の高い水田畦畔では増えてしまう。湛水環境には見られないので、水田雑草とはならない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



四方八方に茎を伸ばし地面を這う様子

<類似種> 在来のコニシキソウの葉は長さ7～15mmとやや大きく、コニシキソウよりも茎が赤みを帯び、全体に毛が少なく葉に斑紋は出ない。北米原産の帰化植物オオニシキソウの葉は15～35mmとさらに大きく、茎は立ち上がり高さ40cmほどとなる。

<一言うちく>

コニシキソウを観察するとアリがたかっていることがあります。アリは雄しべや雌しべのもとにある蜜線から出る蜜が目当てで、蜜を集める際に頭に付く花粉を運んでくれます。餌としてアリが運ぶ種子も生育地の分布拡大に貢献します。コニシキソウは巧みにアリを利用しているのです。



葉腋ごとに花をつける

<人と関わり合い>

コニシキソウやニシキソウは背の高い草などに覆われてしまう場所は苦手で、裸地のような環境を好み、刈り込みに強く短期間で生育するため、畑や畦畔、芝生内などよく管理されている環境を好む雑草として馴染み深い。しかし、小型の植物のため、これまで積極的に食用などに利用された事例は聞かない。また、九州地方以南に見られる近縁のシマニシキソウについては皮膚炎や水虫、たむしなどの民間薬として利用された記録はあるが、コニシキソウの薬効については知られていない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】
ニシキソウやオオニシキソウも含めて、小型で地味な植物のため、これまで詩歌に詠まれることはなかったようである。

分布：北海道を除く全国

ミズマツバ（ミソハギ科）

水松葉

別名：とくになし

学名：*Rotala mexicana*

ロタラ マキシカナ

主な生育場所

水田や休耕田、湿地に見られる。とくに草丈が低く、開放空間が確保されているような場所に多い。湛水下でも生育可能だが、日光が届かないような水深では見られない。

名前の由来：線形で柄のない葉が左右に広がる様子を松葉にたとえて、水中で生育することから、水松葉(ミズマツバ)。

特徴

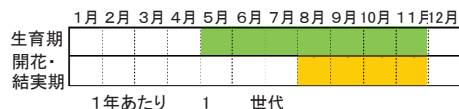
高さ3～10cmほどの小型の一年草。全体柔らかく、茎は赤色を帯び、下部で枝分かれして地面をやや這うが、その先は立ち上がる。長さ5～10mm、幅1.5mmほどの柄のない葉を3枚、ときに4枚を輪生。花は葉腋に淡紅色の5枚の半球形のがくからなる花を単生。果実は0.8～1mmの球形で、成熟すると3裂し、多数の微小種子を出す。



<農業との関係>

水田という環境によく適応してきた水田雑草の一つ。本田の中だけに生育し、畦畔や水路にはほとんど見られない。関東地方以西では、かつて大発生するほ場も多く、水稻の強害雑草となっていた。最近では除草剤の普及などで各地で減少しているが、同属の水田雑草キカシグサと同様、スルホニルウレア(SU)系除草剤に対しての抵抗性型の出現が報告されている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 水田に生育する同じ小型種のキカシグサの葉は対生し、やや厚みがあり、幅3～4mmと広く丸みを帯びる。関東以西に稀にみられるヒメキカシグサは高さ2～7mmとミズマツバより小型で、丸みのある葉は対生で幅1.5～4mm。

<一言うんちく>

各地で減少しているミズマツバ。しかし、目立たない小型の植物なので、今や実態がよく分かっていない側面もあり、丹念に田んぼの中を探すと各地で比較的に見つけやすい絶滅危惧植物でもあります。ミズマツバは稲刈り後の刈り田で、田んぼの宝もの探しにはうってつけの題材なのです。

<人と関わり合い>

各地の水田に普通に見られた水田雑草だが、目立たず食用や薬用などの記録もないことから、その存在を認識する農家は少ない。除草剤やほ場整備による乾田化の進行などによって、近年、各地の水田で激減し、絶滅危惧種に指定する地域も多く(環境省カテゴリ:絶滅危惧Ⅱ類、レッドリスト指定:37都道府県)、やがて人知れず水田から消え去ってしまうかも知れない。ただ、最近では、海外の近縁種も含め、水槽のなかの鑑賞用の水草としてある程度支持されており、売買されることもある。

<俳句や短歌への登場>

【季語:不明】

水田に生える目立たない小さな植物で、とくに利用もされてこなかったことから、これまで詩歌等に取り上げられることはなかった。



葉腋に球形の果実をつける



葉は3～4枚輪生

分布：全国

アキノノゲシ（キク科）

秋の野芥子

別名：乳草(ちちぐさ)、ウマゴヤシ、ウサギグサ、ホソバアキノノゲシ

学名：*Lactuca indica*

ラクツカ インディカ

主な生育場所

野原や道ばた、田畑の畦畔、畑、樹園地などに生える。日当たりがよくやや乾いた場所を好む。刈取りにも強く、草刈りがよくなされ、他の大型植物に覆われていない肥沃な場所に多く見られる。

名前の由来：葉の形や花の形が主に春に咲くノゲシ(ハルノゲシ)に似ていて、秋に花が咲き出すので、秋のノゲシ。また、別名の乳草は葉や茎を切ると、白い乳液が出ることから。

<農業との関係>

南アジア、東南アジア、東北アジアにかけて広く分布し、稲作の伝播とともに附随して日本へ渡って来た史前帰化植物の一つとされる。草刈り頻度の低い樹園地や、畑地で除草しにくい株間に生えたと大株となり、密生すると雑草害を引き起こす。しかし、耕起に弱く、また草刈りによって草高が抑えられるため、耕起や草刈り頻度が高いと害草化することは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ノゲシは春先から花が咲き始め、花色は黄色で葉の基部は三角形。秋に咲くヤマニガナやヤクシソウは山地に生え、アキノノゲシより舌状花数が少ない。また、コウゾリナには全体に剛毛が生え、葉は羽状に裂けない。

<一言うんちく>

アキノノゲシ属(*Lactuca*)には、野菜のレタスも含まれます。レタスもアキノノゲシと同様に西アジアを原産とし、レタスのヘタを切ると同じように乳液が出ます。また、レタスの中には苦みが強いものがありますが、アキノノゲシの葉をかじってみると、やはり苦いことがわかります。

<人と関わり合い>

アキノノゲシの変種で葉の切れ込みがなく前縁の細い葉となるリュウゼツサイ(竜舌菜)は食用や飼料となり、中国や台湾で利用されている。日本にも昭和初期に鶏の餌として導入されたが、今は栽培はほとんど見かけずに、各地で野生化している。アキノノゲシも食用となり、苦みの少ない春先の若芽はサラダになる。6月以降は苦みが強くなるため、塩茹でして水に晒し、お浸しや油炒めなどにする。また、民間療法では、胸やけや皮膚病の薬と利用されていた記録がある。

<俳句や短歌への登場>

【季語:秋?】

農村に一般的な草花で、秋に背高たくさんの花を付ける様子には風情があり、また大きく羽状に裂ける葉も目立ち、それなりに目にとまる花だと思うのだが、名前が6文字と中途半端であることもあってか、俳句や短歌に登場する例は見かけず、季語の設定もないようである。



直径2cmほどの淡い黄色(クリーム色)の頭花



下部の葉は羽状に大きく裂ける

分布：北海道を除く全国

クログワイ（カヤツリグサ科）

エレオカリス クログワイ
学名：*Eleocharis kuroguwai*

黒慈姑、烏芋 別名：エグ、タイモ、ピリピリグサ、クワイズル、イゴ、ゴヤ、ギワ、クワイ、クワエ

主な生育場所

水田や休耕田、水路、ため池、湿地、湖沼などで生育する。水田では冬期に乾きにくい湿田や半湿田で多く見られる。塊茎の寿命が長いので、転作後の畑にも見られることがある。

特徴

主に塊茎で繁殖する高さ30～90cmの多年生水草。最初、直立する細い針金状の茎が、径3～4mmとなり叢生し大株となる。葉のない茎は中空で多数の横隔膜で仕切られる。茎先に黄褐色で円柱形の花穂をつける。地下茎は地表下を水平に伸び、次々と子株を形成。秋に各株の基部から下方に地下茎を伸ばし先に塊茎をつくる。



畦際に生えるクログワイ

名前の由来：クワイ(慈姑)とは芋状の塊茎を食用とするオモダカの栽培品種のことで(2011年8月号で紹介)、クワイの塊茎によく似て色の黒い塊茎を形成することからクログワイ(黒慈姑)。

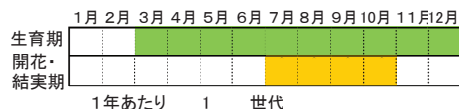
<農業との関係>

水田で多発生すると、イネの分けつを阻害し収量が半減することもある。またイネを倒伏させたり、絡まって収穫効率を低下させてしまう。除草剤も効きにくいので、なかなか駆除しにくい難防除雑草のひとつである。塊茎は冬期の乾燥に弱いため、多発生した場合、収穫後の秋耕や土壌深く形成された塊茎を表層に露出させる反転耕など、塊茎の密度を下げる努力を続けることが大切である。



伸ばした地下茎の先に塊茎(左上)をつける

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じような塊茎をつくるオモダカの葉はヤジリ型で塊茎も白っぽい。イヌホタルイやイグサなども葉のない茎が叢生するが、クログワイの茎内には所々にしきりの壁(横隔膜)があり、茎をつぶすとぶちぶちと音がかかることで見分けられる。

<一言うちく>

もともと湿地や湖沼の植物だったクログワイが水田にも定着するようになると、イネ栽培に伴う耕うんや水管理のスケジュールに適応して、塊茎を形成する時期などが変化してきました。このように生育環境にあわせて生育パターンが変わっていくことを「生態型の分化」と呼んでいます。



花穂

<人との関わり合い>

古く万葉集の時代から塊茎を野菜として利用しており、江戸時代には救荒作物として水田の脇などに栽培されてきた地域もあった。また、近縁種で主に西日本で見られるイヌクログワイの栽培種(シナクログワイ)の塊茎は直径2～3.5cmと大きく、中華料理の食材として使われる。ただえぐみが強い(別名の由来)ため、下茹でしアクを除いてから油で炒めたり煮物にする。また、塊茎の皮にはフラボノイドが含まれ、塊茎を煎じたものは目の腫れや痛みなどに効用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：初春】

君がため、山田の沢にえぐ探むと、雪消の水に、雲の裾ぬれぬ (万葉集 詠み人知らず) えぐ=クログワイ
あしびきの、山沢えぐを採みに行かむ、日だにも逢はむ、母は責むとも (万葉集 詠み人知らず)
うば玉の烏芋のにしめ花柚哉 (三浦 禰良) 時雨るや辛抱づよき烏芋掘 (鶴田 卓池)

分布：全国

チカラシバ (イネ科)

ペンニセツム アロペクロイデス
学名：*Pennisetum alopecuroides*

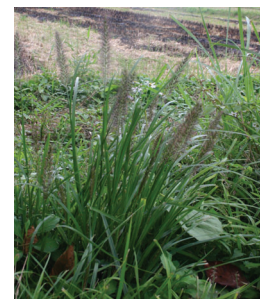
力芝 別名：ブラシ草、ミチシバ、タヌキノシリオ、カグマ、コマツナギ、コッテイコカシ

主な生育場所

道ばた、野原、堤防や土手の法面、田畑の畦畔などに生える。日当たりのよい草地を好む。乾いた環境によく見られるが、いったん根を張ってしまうと多少の冠水を受けるような場所でも生育する。

特徴

高さ30～80cmとなる多年生。茎は直立し、叢生して大株となる。葉はほとんどが根生葉で暗緑色、長さ30～70cm、幅5～8mmと細長い、強く強い。夏から秋にかけて花茎を直立し、先に黒紫色で長さ10～20cm、幅2cmほどの円柱形の花序をつける。果実の先端には2～3mmほどのノギがあり動物などにくっつきやすい。



名前の由来：根がしっかりと土の中に張り、茎や葉も強く千切れにくいので、手で引っ張ってもなかなか引き抜けないことから、力強い「シバ」との意味で力芝(ちからしば)。

<農業との関係>

頻繁に耕耘が繰り返されるような畑地や水田内には侵入しないが、果樹園や牧草地ではときに群落化する。放牧牛は出穂後のチカラシバを採食せず、また果実のノギが牛の眼や鼻を痛めてしまい問題となる。放牧地のチカラシバは放牧牛の密度を高め、春から秋まで連続放牧することで防除できる(<https://www.naro.affrc.go.jp/project/results/laboratory/nilgs/2001/nilgs01-27.html>)。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 秋の道ばたで円柱形の花序となるのは他にエノコログサの間があるが、エノコログサの間は叢生せず、また花序の幅は狭く、垂れ下がるものが多い。チカラシバの近縁の外來種ネピアグラスは大型で2mにも達し、穂は黄色い。

<一言うちく>

チカラシバの近縁種には、主にアフリカや東アジアの乾燥地帯で栽培されるトウジンビエがあります。チカラシバよりも密に果実をつけたガマの穂に似た穂をつけ、実は粉にされ、北アフリカ料理のクスクスの材料にも利用されています。ただ、高温多湿の日本では栽培は難しいようです。



道ばたによく見られる



ブラシのような穂

<人との関わり合い>

食用や薬草として利用された記録はないが、まるで試験管ブラシのような穂はよく目立ち、子どもたちの野辺の遊び道具として使われてきた。例えば、簡単には引きちぎりにくいことから、あぜ道の両側に生えるチカラシバの葉を結んで、足をひっかけさせる罫としたり、エノコログサの穂のように穂を握りて斜上するノギを利用して毛虫のように動かしたりして遊ぶ。また、いわゆる「ひつつきむし」のひとつで、セーターによくノギが絡まりなかなか取れなかった記憶のある方も多いのではないだろうか。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋？】

立ちかわり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり (万葉集 田邊福麿)
花ぞ見る道の芝草ふみわけて好野の宮の春のあけぼの (藤原 季能)
ふるさとを恋ふる涙やひとりゆくとみな山道の芝の梅雨 (慈円)
道芝や露ふみわけて見しほどに逢ふ夜の袖もぬれにけるかな (大江 匡房)

分布：本州・四国・九州

ウラボシ科チコグサ（キク科）

裏白父子草 別名：アメリカチコグサ

グナファリウム コアルクタータ
学名：Gnaphalium coarctata

主な生育場所

田畑の畦、道ばた、堤防、芝地、公園、庭先、果樹園、荒地、植え込みの下、コンクリの隙間など。種子が風散布されるので、乾いていて日が少しでもあたる土地ならどこでも侵入・生育する。

名前の由来：チコグサ（右下写真）に似て、葉の裏面がチコグサよりも白く見えることから裏白チコグサ。また別名は、南アメリカ原産から。

特徴

南アメリカ原産の多年生。高さ30～80cmほど。茎は基部から短く横に這って分株をつくる。葉はへら状で表面は光沢のあるやや明るい緑色、裏面には密着した白毛が密生し、白く見える。ロゼット葉で越冬。茎につく葉の縁は波打つ。茎の上部に多数の花を集めた頭状花をつけ、総苞片は光沢のある緑色。種子には冠毛がある。

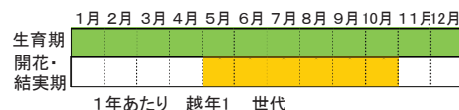


初夏から秋にかけて長期間開花がみられる

<農業との関係>

基部から枝分かれし、地面に張り付くように密に分株を形成しながら広がり、踏みつけや刈り込みに対しても強く、果樹園や畑地、芝地で害草となることがある。また除草剤に対しても枯れにくいことから、ゴルフ場などでは近年増加しているようだ。ただし、耕起には弱く頻繁に作付けするような畑には見られない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> チコグサの葉は線形でウラボシ科チコグサよりも細い。また葉の裏面はウラボシ科チコグサと同様白っぽくなるが、葉の表の色は濃緑色。チコグサモドキの葉は幅広いが葉の裏面はあまり白くならず、葉の表面にふんわりした毛が多い。

<一言うんちく>

チコグサの仲間には外来種が多いのですが、最近（昭和40年代後半ごろ）定着するようになった新参者です。急速に分布を拡げており、他のチコグサの仲間よりも花期が長く遅くまで花をつけていることから、各地の庭先などにも葉の裏が白いロゼットが目立つようになってきました。

<人との関わり合い>

同属のハハコグサは春の七草のひとつとなっていますが、同じように在来種であるチコグサや外来種のウラボシ科チコグサなどを食べたり薬用に利用した記録はない。ただ、庭先などで冬期に光沢のある明るい緑色の葉を広げているロゼットの姿はよく目立ち、名前は知らずとも憶えのある方も増えてきているのではないだろうか。お正月飾りに使われるウラボシなどに通じ、どこかすがすがしや縁起物を感じさせてくれる草花である。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春 ※チコグサ】 ウラボシ科チコグサの季語は不明。
父子草父の寡黙をわれも享く（椎木万紀子） たまさに子と野に出れば父子草（曾田 進）
けぶれるは羅漢の山の父子草（原田 喬） 父子草母子草その話せん（高野素十）
父子草もどきが飛ばす梅雨の絮（青木重行）

分布：全国

コナギ（ミズアオイ科）

小棚 別名：ナギ、ミズナギ、イモグサ、ツバキグサ、ハート草

モノコリア ヴァージナリス プランタギニア
学名：Monochoria vaginalis ver. plantaginea

主な生育場所

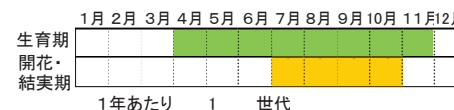
かつて原産地の東南アジアから稲作とともに伝わってきたイネの伴生植物とされ、日本では水田や休耕田など、水田周辺にしか生育しない。種子寿命は長く、耕作放棄田でも復旧すると発生してくる。

名前の由来：同属のミズアオイとともに、マキ科の樹木である榊（なぎ）の葉に似ていることからナギ。ミズアオイよりも小型のため、コナギ（小棚）。またサツマイモの葉にも似ているためイモグサ。

<農業との関係>

ノビエと並び、稲作で見られる代表的な雑草。草高は低く、10～30cmほどだが、窒素等の吸肥力が高く、密生するとイネの生育が抑制されるため、古来から強害雑草として除草の対象となってきた。大株になると根が強く張り、除草に苦労するため、芽生えただけのコナギを這いつくばり取っていた。しかし、戦後の除草剤の普及により、今では有機農業などの水田以外にはあまり見かけない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 北日本に多いミズアオイは、湖沼や河川にも見られ、コナギより大型で葉の上まで花茎が伸び、総状に径2.5～3cmの花（コナギの花は径1.5～2cm）をつける。外来種のアメリカコナギは西日本に多く、葉は細長く基部は心形にならない。

<一言うんちく>

語源となった榊（ナギ）は熊野神社の神木とされ、風ぐや薙ぐと通ずることから、船乗りを中心にその葉を身につけ災難除けや厄除けとしていました。またコナギの葉と同様に平行脈で縦方向には裂けにくいことから、夫婦円満の象徴ともされます。コナギも同じ効能があるかも知れません。

<人との関わり合い>

コナギは、イネの栽培に伴って大陸から渡ってきた水田雑草で、万葉集などにも登場するなど、古くから馴染みの植物である。ミズアオイも含む「ナギ」は、平安時代ごろまでは食用として栽培され、今でも東南アジアでは食することがある。最近、コナギを栄養分析した結果、ビタミンやミネラルが多く含まれ、野菜として栄養価が高いことが報告された。そのため、改めて食材としての価値が注目されている。また、中国では民間薬にも利用され、解毒、鎮咳作用から、高熱、喘息などに用いられる。

<俳句や短歌への登場>

【小水葱（こなぎ）の花：秋】 母の里へ辿る稲田のこなぎかな（松瀬青々）
苗代の 子水葱が花を衣に摺り 馴るるまにまに何か愛しき（詠み人知らず）『万葉集』
春霞 春日の里の 植子水葱（うゑこなぎ）苗なりといひし 枝はさしにけむ（大伴駿河麻呂）『万葉集』
おのれまで恋路にぬれて苗代のこなぎがもともとに鳴くはづかな（藤原知家）



水田のコナギ（右下：マキ科の樹木ナギの葉）



幼植物（やや幅の広い線形葉）



コナギの花

分布：全国

キキョウ (キキョウ科)

学名: *Platycodon grandiflorus*

桔梗 別名：キチコウ、おかととき、アリの火吹き、桔草(コウソウ)

主な生育場所

草原や、山間部の水田などに隣接する斜面林の裾刈り草地、ため池の堤体法面など、定期的に草刈りされるような日当たりの良い草地にみられる。観賞用に庭や公園などに植栽されることも多い。

特徴

太い根茎を持つ多年生。茎は直立し高さ0.5～1mほど。卵形～狭卵形の葉には鋭い鋸歯があり互生、ときに輪生状。葉裏は粉白色を帯びる。夏から秋にかけ茎先に青紫色の径3～5cmほどの広鐘形で5裂する花を数個つける。園芸種には白花や八重咲などがある。花後、果実が熟すと上部が5裂し、翼のある多数の種子を吐き出す。

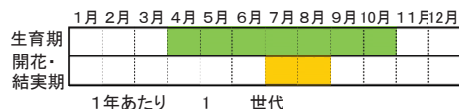


名前の由来：漢名の桔梗をキチコウと呼んでいたものが、キキョウに転訛した。トキとは同科のツリガネニンジンの異名。また罐のギ酸に触れると花弁が赤く染まることからアリの火吹き。

<農業との関係>

畑地などで雑草となることはない。しかし、日照を確保するための水田わきの裾刈り草地やため池堰堤、世界農業遺産に認定された静岡県の茶園周辺にみられる良質茶生産のためのススキ敷草を確保する「茶草場(ちやくさば)」など、農地周辺の程よく草刈りされている草地でよく見られ、里山ではフレモコウなどと同様に農業に伴う草刈りに依存している草原性の植物の一種といえる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



ため池の堤体法面にフレモコウなどと咲くキキョウ

<類似種> 同じような草地に生えるツリガネニンジンには3～5枚の葉を輪生し、円錐形の花序で狭鐘形の花を輪生。リンドウの花期は晩秋で、葉は3脈が目立ち対生で先がとがる。また花色は紫色で先が浅く5裂するが筒状、葉脇にかたまってつく。

<一言うちく>

古くから親しまれるキキョウの花は家紋の意匠としてもよく用いられます。明智光秀をはじめ、美濃の土岐一族の桔梗紋は有名ですが、平安時代の陰陽師、安倍晴明が用いた魔除けの呪符である五芒星は、五裂するキキョウの花に見立てられ、「晴明桔梗」として神紋にも使われています。



さまざまな意匠の桔梗紋 中右：土岐桔梗、右下：晴明桔梗

<人と関わり合い>

秋の七草で朝顔とあるのはキキョウとされ、身近にみられる青紫の大きな花は昔から観賞用として愛でられ、江戸時代以降、多くの園芸種も生まれた。またキキョウの花のような青みを帯びた紫色は伝統色「桔梗色」にもなっている。しかし、里山の荒廃に伴い、適度に管理される草地が減少したことから、現在では野生のキキョウは、絶滅危惧種に指定されるほど少なくなってきた。また、根に多くサポニンを含み、生薬にも利用され、鎮咳、去痰、排膿作用がある。若芽や根は水に晒し食用にもなる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】こいまるび恋は死ぬともいしろく色には出でし朝顔の花 (詠み人しらず)『万葉集』 ※朝顔=キキョウ
きりきりしやんとして咲く桔梗かな(小林 一茶) 白桔梗君とあゆみし初秋の林の雲の静けさに似て (若山 牧水)
椎の樹に鳴鶴まで夕日影なめに照すきちかうの花 (正岡 子規) 草刈の籠の目を流る桔梗かな (夏目 漱石)
きちかうのむらさきの花萎む時わが身は愛しとおもふかなしみ (斎藤 茂吉)

分布：全国

クコ (ナス科)

学名: *Lycium chinense*

枸杞 別名：ゴジベリー、ウルフベリー、カラスナンバン、カワラホオズキ、しこ

主な生育場所

日当たりの良い人里近くの堤防や荒地、路傍、藪などに見られ、山地ではみかけない。市街地や庭先などに植栽されることも多い。やや湿った水辺を好み、海岸沿いの砂地や溝の中にも生える。

特徴

1～2mほどの落葉低木。細長い枝を株元からよく分枝し斜上して叢状となる。楕円形の葉は互生し、長さ1.5～6cm、幅0.5～2.5cmほど。葉の付け根に小枝状の棘がでやすい。夏から秋にかけて葉腋から細い花柄を伸ばし直径1cmほどで長い雄しべが目立つ薄紫色の花を1～3個つける。果実は赤く熟し、楕円形で長さ1.5cmほど。

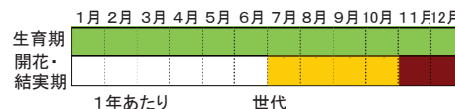


名前の由来：中国名の「枸杞」を音読みし、クコ。「枸」とはカラタチ(枸橼)を指し、「杞」はコリヤナギ(杞柳)のこと。カラタチのようにトゲがあり、コリヤナギのような葉や枝を持つことから。

<農業との関係>

河川敷などでは数となり雑草化すること多いが、耕起には弱いので耕地上で見ることはない。粗放的な管理の果樹園や休耕地、耕作放棄地ではときに繁茂がみられる。また、畦畔や農地わきに植栽されると、ほふく茎によって株を増殖し農地に侵入しやすくなるので注意が必要である。また叢状になると、棘によって刈り払いなどの管理がしづらくなる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



ヤナギのような枝葉で葉の基部に棘がある

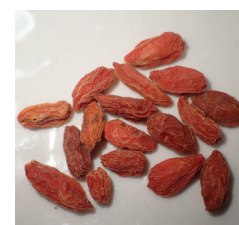


ナスの花を小さくしたような薄紫色の花

<類似種> クコと同様に路傍や原野などに生え、よく似た赤い実を付けるに樹種にグミ(グミ科)の仲間があるが、グミの葉の裏は銀色の鱗状毛を密生し、ナツグミの果実は5～7月に熟す。またアキグミの果実は直径1cmほどの球形で表面に毛がある。

<一言うちく>

クコは日本でも古くから健康長寿の食材と知られ、「徒然草」にも登場する文豪仙人も愛用し18歳まで長生きしたとされます。また、文豪夏目漱石の名著「草枕」にも「家の南面に枸杞の生け垣を植えると、病人が出ない」の一節があるほど、長寿・厄除けとして身近な植物だったのです。



果実を乾燥させた「クコの実」

<人と関わり合い>

低木でトゲがあり萌芽力も強いので、厄除け・魔除けも兼ねて、生け垣に利用されることも多い。また、果実が「枸杞子(くこし)」、根皮が地骨皮(じこっぴ)、葉は枸杞葉(くこよう)と、全草が生薬に使われるなど、古来から有用な植物として利用されてきた。枸杞子には強壮、疲労回復、頭痛、かすみ目などに、地骨皮には解熱、鎮咳、去痰作用、枸杞葉は動脈硬化や高血圧症に良いとされる。また、果実は杏仁豆腐の添え物などデザートや菓子に、若葉は天ぷらや炊き込みご飯にして食べられる。

<俳句や短歌への登場>

『季語：晩秋(枸杞の実)』
枸杞垣の似たるに迷ふ都人(与謝蕪村) 草枯るゝ隙の垣根や枸杞赤し(正岡子規)
枸杞の実を噛み東京を憎みをり(原田 喬) 枸杞の実のさびしさも夜を越えざりき(加藤秋郎)
枸杞にかも雨降る晩覚めざるは(千代田葛彦) 枸杞の実の人知れずこそ灯しをり(富安風生)

分布：本州、四国、九州

チャノキ（ツバキ科）

茶の木 別名：チャ、茶樹

学名：Camellia sinensis

主な生育場所

茶畑での栽培のほか、庭木や生垣などとして植栽される。また、畑と畑の境界を示す畦畔木として植えられることもある。野生では、伊豆半島や九州地方の照葉樹林帯の低木～中層木として育つ。

名前の由来：中国大陸から茶の木がもたらされたときに、漢名の「茶」を音読みし、「チャ」とした。

特徴

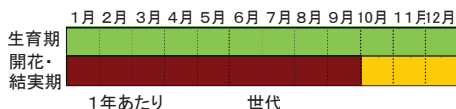
野生では10m程度の高さにも成長するが、栽培下では刈り込まれるためよく分枝し高さ2mほどに株立ちする。樹皮は灰白色。葉は表面に光沢があり、縁が波状の細かい鋸歯となり互生する。晩秋に枝先の葉腋に直径2～3cmで花弁が5～7枚の白い花を下向きにつける。果実は直径1.5～2cmのほぼ球形で翌年9月ごろに成熟する。



<農業との関係>

現在、栽培されるチャノキは、1191年に禅僧の茶西が中国から持ち帰った種子の子孫とされる。最も栽培面積が広いのは静岡県で、次いで鹿児島県、三重県と続く。静岡県牧之原市などでは、茶園周辺に採草地を設け、刈り取った草を茶樹の株元や畝間に敷いて良質茶を生産する伝統的農法が行われており、2013年にFAO（世界食糧農業機関）から世界農業遺産として認定された。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じツバキ科のヤブツバキの葉には鋸歯がないかまたは目立たない。サザンカの花はツバキやチャノキと異なり、花ごと落ちずに花弁がバラバラに散る。低木で葉の形や大きさがよく似るヒサカキの花は直径5mmほどと小さく春に咲く。

<一言うんちく>

中国の古書「神農本草」には、古代中国で医療と農業を広めたといわれる伝説的な大帝神農が、様々な草木を自ら食しその薬効を調べた際に何度も毒に当たり、茶の木の若葉で解毒したと紹介されるほど、古くから薬効あつた茶葉として知られていたようです。

<人との関わり合い>

飲用の茶葉は新葉を摘み取ったもので、乾燥させ緑茶や抹茶とする。茶葉を発酵させるとウーロン茶や紅茶となる。緑茶などの茶葉は、飲用後の茶殻も含め食べることができる。主な薬効成分はアルカロイド、フラボノイド、タンニンなどで、茶葉には利尿、発汗、下痢止めなどの作用があるとされる。民間療法では、口内炎、咽喉炎、風邪予防のうがい薬として利用されたり、細菌性の下痢に濃く煎じた渋茶が効くとされる。また種子は去痰や咳止めに効果があるといわれている。

<俳句や短歌への登場>

【季語：初冬（茶の花）】

日によって茶の花をかく命かな（飯田蛇笏） 茶の花の映りて水の澄み日かな（飯田龍太）
いつしか明けてある茶の花（種田山頭火） 茶の花に今夕空の青さかな（久保田万太郎）
茶が咲いていけばん遠い山が見え（大峯あきら） けふあす何事もないやうに白く咲いた茶の花（中川一碧樓）

分布：全国

ジャノヒゲ（キジカクシ科）

蛇の髭

別名：リュウノヒゲ（竜の髭）、ネコダマ（猫玉）、麦門冬（ばくもんとう）、はずみ玉

学名：Ophiopogon japonicus

主な生育場所

林床や林縁、樹木の根元、路傍、草地などに生育する。落葉樹林の落ち葉がよく積もる木陰などに多い。やや日陰を好むが、日当たりのよい場所でもみられる。公園や庭園に植えられることも多い。

特徴

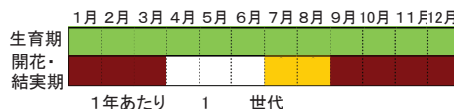
短い走出枝を伸ばし群生して増える10～15cmほどの多年生。幅2～3mm、長さ10～20cmほどの細長い葉を多数根生し株状となる。7～8月にかけて高さ7～18cmほどの花茎を出し、ややまばらな花序をつける。6花弁で径約7mmの花は白色あるいは淡紫色。花後にできる径7mmの球形の種子は冬期に瑠璃色に熟してよく目立つ。



<農業との関係>

畑や水田内に生えることはなく、邪魔になることはない。一方、ジャノヒゲや園芸種で草丈が低い「タマリユウ」は、乾燥や冠水にも強く扱いやすいため、畦畔法面の管理を省力化するカバープランツとして利用される。例えば、タマリユウを10cm間隔で植え付けると約2年間で全面を被覆し雑草抑制に有効である（https://www.naro.affrc.go.jp/org/warc/research_results/h19/01_sakumotu/p21/index.html）。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ヤブランの草丈は20～40cmほどとなり、葉も広く、花穂が長区伸びる。また果実はジャノヒゲの鮮やかな瑠璃色に対し黒色。日当たりのよい場所にみられるツルボの花はジャノヒゲよりもやや遅く、小さな花を穂状に密につける。

<一言うんちく>

これからの季節、ジャノヒゲの光沢のある瑠璃色の種子がよく目立つようになります。この種子、かなり弾力性に富み、アスファルトなどの地面に投げつけるとまるでスーパーボールのように強く弾みます。園芸種のタマリユウでも同じような実がなりますので、採って試してみてください。

<人との関わり合い>

肥大した根を夏期に掘り上げて水洗い後、乾燥させたものは麦門冬（ばくもんとう）と呼ばれ、昔から滋養強壮、咳止め、去痰、利尿などに利用されてきた。また、四国などでは湯がいた茎は油揚げなどと一緒には煮こんで食べる。タマリユウも含め作庭やグランドカバーにもよく利用され、植え込みの前景などに使われる。冠水にも強いので、最近では観賞用の水草と扱われることもある。熟すと光沢のある瑠璃色の種子は、冬枯れの野でよく目立つので、冬の季語として多くの俳句等にも詠われてきた。

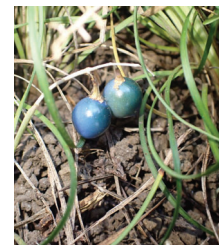
<俳句や短歌への登場>

【季語：蛇の髭、麦門冬＝夏、竜の玉＝冬】

一日のほんの日当り竜の髭（角 光雄） 行わたる掃除や藪に麦門冬（清民）
竜の玉深く蔵すといふことを（高浜虚子） 竜の玉などもあそぶ日もありぬ（山口青邨）
ひたぶるに急俄いたせ龍の玉（辻桃子） 地球またく青からむ龍の玉（鷹羽狩行）



樹木の根元に群生するジャノヒゲ



熟すと鮮やかな瑠璃色となる種子

分布：本州・四国・九州

ナンテン

(メギ 科)

ナンディナ ドメスティカ
学名: *Nandina domestica*

別名：南天竹(ナンテンチク)、南天燭(ナンテンショク)、ナルテン、ナツテン

主な生育場所

公園や庭木などに鑑賞用として植栽される。関東以西の暖地では山地の溪流沿いなどに自生する。半日陰を好み、強い西日が当たると嫌う。また、水はけの良い土地を好む。

特徴

中国原産の常緑の低木で樹高は1～3mほど。株立ちし、分枝せずにまっすぐ伸びる。直径2～3cmほどの幹の先端に羽状複葉を互生する。初夏に円すい状に花序を伸ばし、白い六弁花を多数つける。径6～7mmほどの丸い果実は晩秋から初冬にかけて鮮やかな朱色に熟す。果皮は薄く、中に1～2個の白い種が入る。

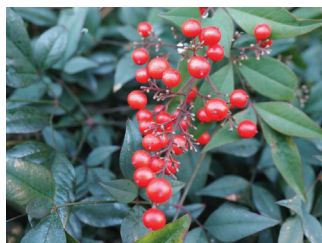
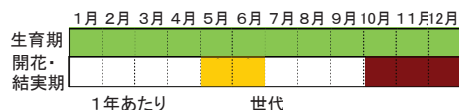


名前の由来：冬に目立つ赤い果実に野鳥が集まることを食堂の灯火(中国名で南天燭(ナンテンチュウ))に見立てた。また葉が竹に似ることから南天竹とも呼ばれ、これらを音読みしナンテン。

<農業との関係>

ナンテンの実が真っ赤に熟するのは二十四節季の大雪(12月7日ごろ)のころで、雪国では収穫した野菜を保存するために雪の中に埋める作業を行う目安となる。また、石川県奥能登地方では、年の暮れのこの頃に、ユネスコ無形文化遺産にも指定された、田の神様へおもてなしを捧げる祭事「あえのこと」がおこなわれる。ナンテンはその年の収穫への感謝を象徴する植物の一つである。

<生活史> 関東地方の例(目安)



食堂の灯火に見立てられた密集する赤い果実

<類似種> ナンテンと同様に初冬に赤い実が成り、庭先によく見かける小低木にセンリョウ(千両)やマンリョウ(万両)があるが、センリョウもマンリョウも複葉とならず葉の縁は波打つか鋸歯がある。またトキワサンザシ(ピラカンサス)の枝には棘がある。

<一言うんちく>

ナンテンは「羅を転ずる」に通ずる縁起の良い樹木とされますが、御祝い膳の赤飯や魚料理にナンテンの小枝が添えられるのは、縁起を担ぐだけでなく、葉に含まれる「ナジニン」が熱や水分に触れることにより防腐作用がある「チタン水素」を発生させ腐りにくくする効果もあるのです。



小葉は革質でやや光沢がある

<人と人の関わり合い>

縁起木や厄災除けとして、玄関前や鬼門や裏鬼門に植えられてきた。また、さまざまな園芸品種も作り出され、白い実のシロナンテン、葉が黄色から赤に紅葉するオタクフ南天、葉が糸状となる錦糸(キンシ)南天などがある。果実に含まれるドメスチンは運動神経の末梢に対しマヒ作用があり、ぜんそくなどの咳止めに効果がある。ハチ刺されには、よく揉んだ葉の汁をつけると痛み止めになる。ナンテンの葉や果実を刻みお茶にすると咳止めだけでなく、疲労回復や強壮などにも効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：冬(南天の実、実南天)、初夏(南天の花)】 日当りに南天の実の笑初 (高澤良一)
日当りや南天の実のかん袋 (小林一茶) 風なくば好き日和なり実南天 (小野房子)
とやかくの家相を払ふ実南天 (能村登四郎) しぐれたるあとの日が射し実南天 (鶯谷七葉子)
南天の花の白さのめでたけれ (高野素十) 麒麟の間南天の花を見て坐る (山口青邨)

分布：全国

ブタナ

(キク科)

ヒポコエリス ラディカータ
学名: *Hypochoeris radicata*

豚菜

別名：タンポポモドキ

主な生育場所

道端、野原、空き地、庭先、水田の畔、法面草地、畑、芝地、果樹園、牧草地など明るく乾いた環境によく見られる。草刈りがよく行われる場所に多く、やぶのような草刈りの少ない場所には見られない。

特徴

ヨーロッパ原産の多年草。葉は根生し、タンポポの葉のように分裂する。両面に黄褐色の硬い毛が密生する。4月ごろから花茎を高さ50cm程度まで伸ばし、上部で数本に枝分かれた先に径3～4cmほどの舌状花のみからなる頭花をつける。花後はタンポポのように冠毛をつけたそう果となり、表面には細かい突起が密生する。



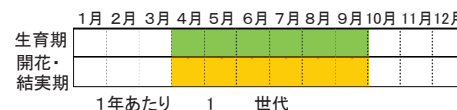
花茎は枝分かれし2～3個の頭花をつける

名前の由来：本種は原産地のフランスで「salade de pore(豚のサラダ)」で呼ばれており、それを直訳したものだ。別名の「タンポポモドキ」とは、外見がタンポポによく似ていることから。

<農業との関係>

タンポポと同様に直根を地面深く伸ばすが、耕起には弱い。畑や水田で問題となることは少ない。他の植物よりも刈り取り圧に強い。果樹園や芝地では群落化してしまうことがあり、特に芝生を生産する畑ではブタナの群生によって芝生が刈れてしまうため、強草として扱われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)

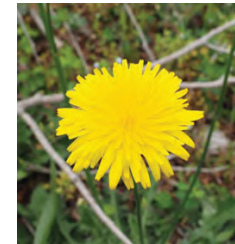


切れ込みが浅く硬い毛が密生するロゼット葉

<類似種> タンポポの仲間は、花茎が枝分かれせず茎頭に頭花を一つだけつけ、葉にはほとんど毛が生えない。同じヨーロッパ原産のヒメブタナは、全体的に小型で毛も少ない。

<一言うんちく>

セイヨウタンポポの増殖力も旺盛ですが、ブタナも環境に対する適応性が高く、都市部から農村部、海浜から高山帯まで広く分布を拡大しています。踏みつけや刈り取りにも耐性があり、類似種のヒメブタナとの雑種も報告されており、すでに全国各地で初夏の風景の一部になりつつあります。



タンポポに良く似た頭花

<人と人の関わり合い>

植物体全体が食用となり、ヨーロッパなどではポイルされた葉を野菜のように食べているようだ。タンポポ同様に苦みはあるものの、若葉は苦みが少なく、サラダ、茹で野菜、揚げものなどにすると美味しい。成長が進んだ茎葉部は硬く、あまり食べられない。根もタンポポと同じく、コーヒーの代替品として炒ってハーブティーとして利用される。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】 昭和初期に帰化してからまだ間もないため、俳句や短歌などへの登場は見ない。

分布：北海道を除く全国

コマツヨイグサ

(アカバナ科)

オノネテラ ラキニアータ
学名: *Oenothera laciniosa*

小待宵草

別名：キレハマツヨイグサ(切れ葉待宵草)、ツキミノウ(月見草)

主な生育場所

路傍や荒地、庭先、畦畔、土手、河原、海岸などの明るく乾いた場所に生育する。砂地を好み、砂浜や砂丘によく見られるが、冠水する環境には生えない。畑地内や樹園下にも見られることがある。

特徴

北米原産の外来種。生育条件によって越年草にも二～数年草にもなる。地面を這うことが多いが、斜上し草高50cmほどに達することもある。茎や葉に開出毛があり、葉は羽状に中深裂する。4月から11月にかけて、葉腋に径1～2.5cmほどの淡黄色の4弁花をつけ、しおれると黄赤色に変わる。円柱形の果実には短毛が生える。



名前の由来：マツヨイグサの花は夕方になると開き、翌朝に萎むので、宵(よい)を待って花が咲くということで待宵草。マツヨイグサの仲間のうちで本種は花が小さいので小待宵草。

<農業との関係>

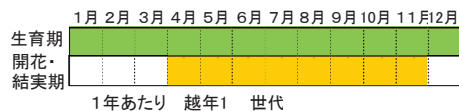
刈払いで管理される乾いた休耕地などで群落化することがある。基盤整備などで造成直後や低位置での刈取頻度が高く裸地化している畦畔にもよく見かける。耕起に弱く、よく耕されている畑地内には定着しにくい。アメリカでは不耕起栽培の普及による増加が報告されており、耕起が少ない畑や明るい果樹園下で増殖し雑草化することがある。



地面を這って広がっている株

<生活史>

関東地方の例(目安)



<類似種> 日本に帰化するマツヨイグサのうち、地を這い、葉に大きな切れ込みがあり花の直径が2～2.5cmであるのはコマツヨイグサだけ。他のマツヨイグサやメマツヨイグサ、オオマツヨイグサは直立し、葉は切れこまず花の直径は3～5cmと大きい。

<一言うんちく>

夜に咲くマツヨイグサの花は、主に夜行性の蛾によって受粉されています。そのため、蛾の長い口に対応し蜜腺は花の下部に伸びる筒状の部分の奥にあり、花粉はクモの糸のように繋がって、鱗粉のためハチなどに比べて付着しにくい蛾の羽にうまく絡まりやすいようになっています。



四弁花は夕方開花し、翌朝に萎む

<人と関わり合い>

美人画で有名な竹久夢二が「待てど暮らせども来ぬ人を 宵待ち草のやるせなさ 今宵は月も出ぬそうな」と詠った「宵待ち草」はマツヨイグサのこととされる。夜咲く黄色い花で夜目にもよく目立つことから観賞目的で導入されたが逃げ出し、各地で雑草化している。とくに鳥取砂丘など海浜で繁茂し、在来種の植生に大きく影響を与えるため、生態系被害防止外来種に指定されている。花は夕方に摘み、天ぷらなどで食べられる。また、マツヨイグサの仲間には咳止めや健胃に効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

かの母子の子は寝つらんか月見草(中村草田男) とびかかる煙炉の火の粉月見草(富安風生)
破船埋もれ待宵草を点す闇(佐藤鬼房) 花引きて一たび嘆げばおとろへぬ少女ごころの月見草かな(与謝野晶子)
霜あれの庭にしじまり青々と待宵草のもと株ふたつ(鹿兒島寿蔵)

分布：北海道を除く全国

チドメグサ

(ウコギ科)

ヒドロコティレ シブトルピオイデス
学名: *Hydrocotyle sibthorpioides*

血止草

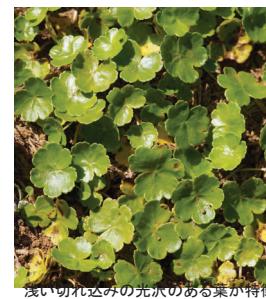
別名：ゼニクサ、チョウチングサ、ウズラグサ、カガミグサ

主な生育場所

水田の畦畔、路傍、庭先、芝地、野原など、やや湿った環境下で見られる。刈取りや踏みつけにも強く、開けた明るい環境や被陰された場所でも見かけるが、植物に完全に覆われる環境は好まない。

特徴

茎はよく分枝して地をはう多年生。節からひげ根をだして繁殖する。表面に光沢のある葉は互生し、直径1～1.5cmの円形で掌状に浅く裂ける。基部は心形。葉は浅く裂け、さらに3～5個の歯牙がある。葉腋から長さ0.5～1.2cmの短い花柄を伸ばし、先に帯緑色の花を10数個つける。花序は葉より短い。果実は直径1mmの扁球形。



浅い切れ込みの光沢のある葉が特徴

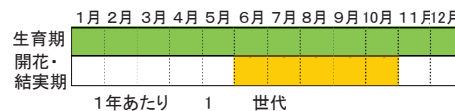
名前の由来：水田や沼などでヒルに吸われたときに、葉を揉んで患部に貼り付けると血が止まることから。別名の銭草(ゼニクサ)は丸い葉の形がお金に似ていることから。

<農業との関係>

やや日陰の湿った果樹園では一面に覆ってしまい害草となることがある。また、芝地に生えると刈り払いで防除できず、芝生を覆ってしまうと芝生の生育を悪化させる。刈取りに強く、チドメグサで覆われてしまうと他の草が生えにくくなることから、水田の畦畔では意図的にチドメグサを優占させるように誘導する場合もある。なお、湛水や耕耘には弱いので田内に生えることはあまりない。

<生活史>

関東地方の例(目安)



<類似種> 葉の切れ込みが深く、基部はV字形に開くのがノチドメ。オオチドメの葉は直径1.5～3cmと大きく、花序は葉の位置よりも高く伸びる。また、ヒメチドメは葉の直径0.5～1cmと小さく深く切れ込み、基部はV字形に開き、花も2～4個と少ない。

<一言うんちく>

チドメグサはかつてセリ科に属していましたが、最近の分類ではウコギ科に編入されました。ウドやタラノキ、コシアブラなど野菜や山菜として利用されるものが多く含まれるウコギ科ですが、今後さらにチドメグサの分類的位置づけが変わる可能性があります。



空き地に見られる群落



葉は深く切れ込み、基部がV字に大きく開いたヒメチドメ

<人と関わり合い>

チドメグサの仲間には収斂作用による止血成分が含まれ、止血の民間薬として古くから利用されてきた。一般的な方法は、葉をよく洗い、揉む、磨り潰すなどして外傷部(擦傷や切創などの出血性外傷)に塗布する。葉を洗ったあと乾燥すれば、生薬のように服薬して用いることができる。食用に関しては記録がない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 オトギリソウ科のオトギリソウも別名、血止草と呼ばれ、オトギリソウを指している可能性がある。

明方の滝のよき音血止草(飯田龍太)
首塚の影のうごかぬ血止草(渡辺 昭)
抜くたびに殖えてゐるなり血止草(富沢みどり)

分布：全国

ヤブラン (キジカクシ科)

学名: *Liriope muscari*

藪 蘭

別名：サマームスカリ、ノシメラン、ジャガヒゲ、テッポウダマ、ネコノメ、麦門冬

主な生育場所

林内の林床や藪(やぶ)などの木陰となるような場所。畦畔や樹園で見られることもある。庭先に植栽されることも多い。日陰を好むが、日がよく当たる場所でも生育する。貧栄養な環境や乾燥にも強い。

特徴

多数の葉が根生し30~60cmほどの高さの大きな株となる多年生。線形の葉は濃緑色で厚く光沢があり、幅約7~12mm。夏から秋にかけて株間から多くの花茎を30~50cmほど伸ばし、穂状に径7mmほどの淡紫色の6弁花を多数つける。花終に径5mmほどの光沢のある球形の種子をつけ、最初緑色だが熟すと黒色となりよく目立つ。

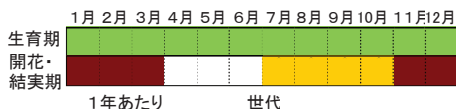


名前の由来：低木や笹などが密集したやぶでよく見られ、葉が蘭に似ていることから。また、葉も茎も火熨斗(ひのし:昔のアイロン)で熨(の)したように平たいことから熨斗目蘭(のしめらん)。

<農業との関係>

日陰となるような水田畦畔などに見られることがあるが、農地には入らず、また畦畔管理の邪魔とならない。一方、近年、ヤブランが他の雑草の発生を抑制する効果が高いことが報告され、畦畔などで被覆植物(カバープランツ)としての可能性が高まっている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



木陰では葉はまばらになり、花付きも悪くなる

<類似種> ジャノヒゲ(2020年11月号で紹介)の葉は幅2~3mmと狭く、花序はまばらで、果実は鮮やかな瑠璃色。日当たりのよい場所を好むツルボ(2018年8月号で紹介)の葉も細く、葉の枚数は少なく、花は径7mmと小さく雄しべがよく目立つ。

<一言うちく>

本陰にひっそりと咲くヤブランですが、ヤブランに含まれるアゼチジン-2-カルボン酸という物質が、他の植物の生育を阻害する効果が高いことが報告されました。花言葉にあるように「忍耐」「謙虚」だけでなく、他の植物に負けないうたたかさも持ち合わせているのですね。



穂状に6弁花を多数つける

<人との関わり合い>

夏から秋の長い期間に穂状に咲く淡紫色の花を楽しむだけでなく、年間を通じ濃緑で丈夫な植物のため、「ノシメラン」の名で古くから庭園などに観賞植物として利用されてきた。近年ではガーデニング素材としても人気があり、白や斑入りの葉など品種も豊富である。また、ジャノヒゲと同様、肥大した塊根を水洗いし天日で乾燥させたものは漢方で「麦門冬」と呼ばれ、高血圧や鎮咳、解熱、滋養強壮などに効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：初秋】※万葉集で詠まれる「山菅」はヤブランやジャノヒゲを詠んだものともされている。
山川の水陸(みかげ)に生(お)ふる山菅(やますげ)の やまずも妹は思ほゆるかも (柿本人麻呂：万葉集)
衣熨斗目蘭植のころは紫に (後藤比奈夫) 雁のわが家わたりぬ熨斗目蘭 (岡井省二)
藪蘭のうすむらさきに長命寺 (山尾玉藻) 門までの藪蘭につぶやいてゐる (折井紀衣)

分布：全国

ジュンサイ スイレン科

学名: *Brasenia schreberi*

草 菜

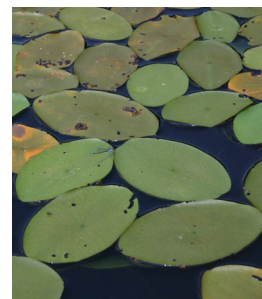
別名：ヌナワ(沼縄)、ぬなは、ネヌナワ(根沼縄)、みずどころ、馬蹄草

主な生育場所

多量の腐植質を含み、水色が褐色を帯びるような腐食栄養または栄養塩が少ない貧栄養な湖沼やため池に生育。ときに中栄養な環境にも見られるが、富栄養下では生育しない。流水中にも生えない。

特徴

多年生の浮葉植物。やや堅い地下茎が地中を匍匐し、節から葉柄を伸ばしその先に盾状に長さ5~15cm、幅3~8cmの楕円形の葉をつける。葉裏は赤紫色。若芽や葉柄、葉の裏は透明な寒天質の粘液に覆われる。夏に葉脇から花柄を延ばし、先に径約1.5cmの暗赤色の花を水面上に咲かす。果実は細長く、1~1.5cmほど。

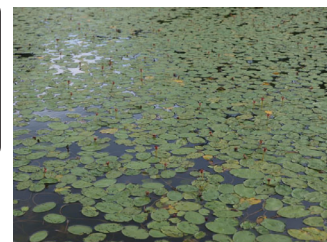
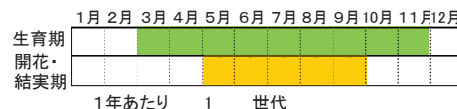


名前の由来：漢名「蓴」の発音「チュン」がなまって「ジュン」となり、水菜なので菜をつけてジュンサイ。また別名は、茎が縄のように長くてぬるぬるすることから滑る(ぬめる)縄、略してヌナワ。

<農業との関係>

独特のぬめりを持つ若菜や茎は日本料理の食材として利用され、湖沼だけでなく水田や休耕田で栽培されることもある。とくに水温が低い東北地方の秋田県、青森県、山形県で生産量が多い。栽培は水田を掘り下げ60cmほどの水深を保ち、6~7月に苗を植え付け、3年目以降の6~8月に若芽を収穫する。なお、食害する害虫にはジュンサイハムシやトラフユスリカなどが知られている。

<生活史> 関東地方の例(目安)

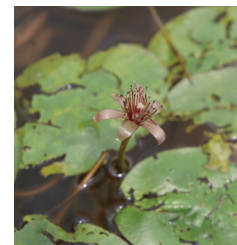


ジュンサイとヒツジグサが混生する池

<類似種> 湖沼で混生することもあるオヒルムシロやフトヒルムシロの浮葉は葉端から葉柄につながる。また、ジュンサイと同様に葉柄が盾状につくヒツジグサ(15年7月号で紹介)やマルパオモダガ、アサザなどの葉の基部は大きく切れ込んでいる。

<一言うちく>

京言葉で「じゅんさいをお人やわあ」とは、どちらつかずでつかみどころがない人を遠回しに指す場合に使うようです。一方、ジュンサイは除草剤の影響を受けやすく、除草剤の含まれた用水が浸入すると枯れてしまうため、水質のセンサーとしては、とてもはつきりした水草なのです。



淡い暗赤色の花被片6枚の花

<人との関わり合い>

若芽はガラクトマンナンを主成分とする寒天質に覆われ、独特の風味が食材として珍重されてきた。各地の産地では若菜の瓶詰めなどが販売されている。若菜は軽く水洗い後、湯に通し冷水で締め酢の物や、吸い物・味噌汁の具、天ぷらなどで楽しめる。また、乾燥した茎葉には解熱や利尿作用もある。浮葉や葉柄の生のしぼり汁は腫れ物にも効くとされ、各地で利用されてきた。しかし、池沼の開発や富栄養化などで各地で消え、現在26の都府県で絶滅危惧種に指定されているほど減少している。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】
わがこころ ゆたにたゆたに 浮きぬはな 辺にも沖にも 寄りかつましじ(万葉集・作者未詳) ※ぬなは=ジュンサイ
草菜や一鎌入る浪の隙 (広瀬惟然) 青田より水の高さや蓴(じゅんさい)沼 (高浜虚子)
草菜を 掬へば水泥 掌にあまり 照り落つるなり また沼ふかく (北原白秋)

分布：北海道を除く全国

アゼトウガラシ（ゴマノハグサ科）

ヴァンデルリア ミクランタ
学名: *Vandellia micrantha*

畦唐辛子 別名：とくになし

主な生育場所

水田や畦畔、やや湿った畑地などに生える。河川敷や湿地環境などにも見られるが、耕地周辺でよく見かける。明るい湿地を好み、背の高い草に被陰されるとなくなる。また、少々冠水にも耐える。

特徴

高さ10～20cmほどの小型の一年草。茎は四角形で無毛。株元でよく分枝し、直立または斜上する。縁には2～4個の低い鋸歯がある葉は対生、狭卵形。上部の葉脇から5～20mmの花柄を伸ばしに約1cmほどの淡紅紫色の唇形花を単生する。萼は深く5裂し、萼片の先は尖る。果実は線状狭卵形で熟すと萼より3～4倍の長さとなる。

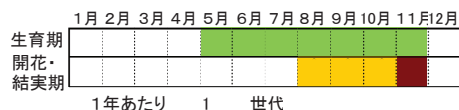


名前の由来：水田の畔など湿っぽい環境下でよく見られ、果実の形がトウガラシの果実に似ていることから、畦唐辛子。

<農業との関係>

かつて水田でよく見られた雑草だが、暗きよ等が整備され乾田化が進んだ水田では見かけることが少なくなった。小型の雑草であり、田植え直後からではなく、やや遅れて発生し、中干し期以降に目立ってくるので、イネと競合しにくく害草となりにくい。しかし、アゼナ類と混生して大群落を形成すると、収穫時にコンバインを滑らしたリイネに絡んだりして、作業効率を下げることもある。

<生活史> 関東地方の例(目安)

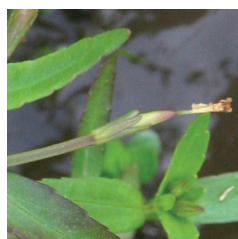


花は白に近い淡い紅紫色で花柄の先に単生する

<類似種> エダウチスズメノトウガラシやヒロハスズメノトウガラシの葉の幅はアゼトウガラシよりも広く、鋸歯も多く鋭い。アメリカアゼナ(18年7月号で紹介)やタケトアゼナの葉脈は3～5本の平行脈となる(アゼトウガラシの葉脈は中央脈が目立つ)。

<一言うんちく>

水田周辺でよく見られるアゼトウガラシは、稲栽培に伴って古い時代に日本に渡ってきた史前帰化植物とされています。乾田化の進行やアゼナ類によく効く除草剤の登場等により、近年、各地で減少傾向がみられ、長野県では絶滅危惧種にも指定されるほど見かけなくなっているようです。



若い果実。萼よりも長く伸びる熟すと萼長の3～4倍となる

<人との関わり合い>

稲作とともに渡ってきた古くから馴染みのある植物だが、アゼナ類などよく似た仲間と同様に小型かつ味でさほど邪魔にならなかったことから、これまで積極的に利用したり、注目されてきたことはなかった。しかし、その特徴的な果実の形から「アゼトウガラシ」と呼称し、よく似た仲間と区別してきたことなどからは、田の畦に見られる小さな草花に対しても、農家の方々は目をとめ、よく観察してきたことがうかがわれるだろう。なお、「トウガラシ」と名につくが、毒は無いが果実も含め食用には適さない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】

アゼナ類など水田やその周辺でよく見かける他の良く似た仲間も含めて、これまで詩歌などに登場したことはないようである。目立たない植物であるが、淡紅紫色の小さな唇形花やトウガラシに似て長く伸びる果実など、よく見るとそれなりに趣があるので、もっと目をとめてもらいたい「推し」の草花の一つである。

分布：本州・四国・九州

ヨモギ（キク科）

アルテミシア インディカ マクシモヴィッチ
学名: *Artemisia indica* var. *maximowiczii*

蓬 別名：モチグサ(餅草)、モグサ、ヤイトグサ、サシモグサ、ヤイクサ(焼い草)

主な生育場所

野原、路傍、田畑の畦畔、畑、樹園下、川辺、法面、など至る所に見られる。日当たりの良いやや乾いた場所を好む。水辺にも生育し冠水にも耐えるが、常時水位が高いような場所には見られない。

特徴

主に地下茎で繁殖する多年生。茎は直立し50～100cmほどとなり多くの分枝を出す。裏面に綿毛を密生する葉は羽状に中・深裂し縁に鋸歯を持つが変異に富み、茎上部の葉は小型で切れ込み・鋸歯ともに少ない。秋に枝先に径1.5mmほどの目立たない小型の頭花を多数、円錐状につける。種子に冠毛はないが小さく風散布される。



名前の由来：直立した古い茎は木質化し良く燃えるので「善燃木(よもぎ)」との説や地下茎を四方に這わすことから「四方木(よもぎ)」の説など諸説ある。また草餅の原料となることから餅草。

<農業との関係>

定着すると地下茎を旺盛に発達させるが、耕起や湛水に弱いため、水田内や耕起が繰り返される畑地ではあまり問題とならない。しかし、耕起を行わない果樹園下や草地などでは発生量が多く、作物と養分や水分を競合し、強害雑草となる。また刈取り管理はかえって地下部の増殖を促し、新たな萌芽も促進させてしまう。また雨の多い時期の耕起も萌芽可能な断片をばらまくことになる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



白い綿毛を密生する葉裏と花序

<類似種> ヨモギの葉は変異が多く、トリカブトなど切れ込みのある葉をつける毒草などと間違われることもあるが、ヨモギの葉の裏には綿状の毛が密生すること、葉をちぎると特有の香りがあることから見分けられる。

<一言うんちく>

近年、道路工事や災害復旧などで造成した法面の緑化にヨモギなどが使われていますが、そのほとんどは中国や韓国からの輸入種子の利用です。中国や韓国のヨモギも国内のものと同種とされていますが、その遺伝的タイプは異なり、国内系統との交雑や置き換わりが懸念されています。



生育期のヨモギ

<人との関わり合い>

昔から食用、お灸、薬草など多くの用途に利用されてきた身近な有用植物の一つである。若葉を摘んで餅に混ぜて搗くと草餅となり、特有の香りが楽しめる。また、天ぷらにしたり、塩茹でし、お浸し、ゴマ和え、クルマミ和えなどにしても美味しい。乾燥させた葉の毛だけを集めると艾(もぐさ)となる。また乾燥した葉は「蚊遣り」として蚊除けにも利用される。ショウブの葉とともに風呂にも入れられる。陰干した葉は「艾葉(かいよう)」という生薬となり、止血などに効く。煎ずれば腹痛、喘息に良いとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春】春雨や蓬をのぼす草の道（松尾 芭蕉）

風吹いて持つ手にあまる蓬かな（水原 秋桜子） つみたてて臼尻に撰る蓬かな（飯田 蛇笏）
しやうつかのばばが蓬を摘んでゐる（山口 青樹） 学校へ行かぬ子達が蓬摘（正岡 子規）
ほととぎす来鳴く五月の菖蒲蓬蓬かつらき酒みづき遊び和ぐれど（万葉集・大伴家持）

分布：全国

ヌスビトハギ (マメ 科)

盗人萩

別名：ひつつき草、山馬蝗(さんばこう)

学名：Desmodium podocarpum subsp. oxyphyllum

主な生育場所

平地から山地までの林縁や草地、路傍などに生育する。谷津田など、林縁が迫っている田畑の畦畔や、樹園地でも見られることがある。単生することは少なく、林縁などにまとまって生えることが多い。

特徴

高さ60～120cmほどの直立する多年生。3枚の小葉からなる葉は長い柄を持ち、互生する。夏から秋にかけて枝先や葉脇から伸ばした花枝に3～4mmで薄紅色の蝶形花をまばらにつける。果実は節でばらばらになる節果で、種子1つを含む半月形で扁平な節果が2つ連なる。果実の表面には細かな毛が密生し、衣服などによくつく。



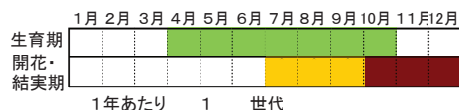
名前の由来：半月形の節果が2つ連なる果実の形を泥棒が忍び足で歩く足跡に見立てたとの説や、果実が気づかないうちに衣服などにひつつき草から「盗人」を想起したなどの説がある。

<農業との関係>

ヌスビトハギは「ひつつき草」である果実の特徴から種子で拡がりやすいと思われるが、実際の群落を見てみると地下茎を形成して定着していることが多い。頻りに耕起されたり草刈りが行われる畑内や畦畔などでは地下茎を充実させられずに、種子で侵入しても長期間にわたって定着することは少ない。類似種アレチヌスビトハギのほうがより繁殖力が強く樹園地などで雑草化しやすい。

<生活史>

地方の例(目安)



への字形に連なる半月形の節果2つからなる果実

<類似種>

関東地方以西には、ヌスビトハギよりも大型で花も大きく、5～6個の節果が連なる外来種アレチヌスビトハギが見られる。山地の林内には、小葉が幅広く倒卵形のマルバヌスビトハギ(在来種)が分布する。

<一言うんちく>

ヌスビトハギの果実の表面には短い硬い毛が密生していますが、拡大して見てみると、毛の先端がアルファベットの「J」を逆さにしたように鉤上に曲がっています。これは面ファスナー(マジックテープ)のフック面と同じ構造で、扁平な形状もあり毛織物の衣服に付くと剥がれにくいのです。



外来種アレチヌスビトハギの花

<人との関わり合い>

節果に入っている種子は豆果として食べられるようだが、小さく採集も面倒のため、利用されることはほとんどない。一方、生薬としては、山馬蝗(サンバコウ)として、中国では全草を咬止めや切り傷用に利用されるようだ。

また、名前に萩とつくが、花は地味で小さく観賞されてこなかったが、「ひつつき草」としての果実はその特徴的な形状からも詩や俳句などの材料として関心を持たれ、下記に紹介するように宮沢賢治も作中で取り上げている。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 曲りある盗人萩の花の先 (京極紀陽)
てぶくろに盗人萩の実を付け来 (辻 桃子) 踏きて盗人萩の名を賞ゆ (松山足羽)
「(略) はやしのくらいとこをあるいてみると 三日月がたのくちびるのあとで 脇やずばんがいつぱいになる」
宮沢賢治「春と修羅」の中から「一本木野」 ※ヌスビトハギの果実を「三日月がたのくちびる」と表現。

分布：山口県、四国、九州、沖縄

サザンカ (ツバキ 科)

山茶花

別名：イワハナビ(岩花火)、ヒメツバキ、コツバキ、コカダシ、茶梅

学名：Camellia sasanqua

主な生育場所

自生地では山地の照葉樹林に生育。陰地でも日当たりのよい所にも見られる。全国の公園や庭先などに植栽されており、水はけが良く肥沃な土壌でよく育つ。低温には弱く寒い地方では防寒が必要。

特徴

2～6mほどの高さとなる常緑の広葉樹。樹皮は平滑で灰褐色。枝は淡褐色で無毛。革質で鈍い光沢のある葉は互生し、葉身の長さ3～7cm、幅2～3cm、縁に鈍い鋸歯がある。晩秋から冬にかけて枝先に直径5～8cmほどの白い花をつける。果実は球形で直径1.5～2cmほど。中には褐色で1～1.5cmほどの種子が2.3個入る。



名前の由来：本来、ツバキを指す中国名の山茶花がツバキには「椿」の漢字があるためサザンカにあてられ、いつか「茶山茶」と誤記され、その読み方として「さざんか」と呼ばれるようになった。

<農業との関係>

同じツバキのチャノキと同様に、隣接する畑の境界に畦畔木として植栽されることもある。また、材は小細工物に適しているため、農具の柄などにも利用されてきた。茶花や生け花の材料としても使われてきたため、農家の庭先や生け垣などに植栽されることも多い。

<生活史>

関東地方の例(目安)



八重咲きの濃いピンク色の花を付ける品種

<類似種>

よく似たツバキとの見分け方は、サザンカの花は花びらが一枚ずつ散るのに対し、ツバキは花ごと落ちる。また、花のない時期では、サザンカの葉裏の脈に毛が目立ち鋸歯はやや深い、ツバキの葉裏に毛はなく鋸歯は浅く目立たない。

<一言うんちく>

冬に咲く椿の仲間にはサザンカ、ツバキのほかカンツバキ(寒椿)があります。カンツバキはサザンカとツバキの交雑種とされますが、花はサザンカのように花びらが散っていくため、サザンカの仲間とされます。寒さにも強く、サザンカよりも遅く厳冬期(1～2月)に花をつけます。



公園に植栽されたサザンカの大木

<人との関わり合い>

南九州地方ではサザンカの新芽を摘んでお茶としたり、また新芽には芳香があることから香袋に利用することがある。種子からはツバキ油と同様にサザンカ油も取れ、毛髪香油や軟膏基剤などに利用される。花の少ない時期に咲くことから「冬の花」として好まれ、江戸時代中期からツバキと掛け合わせ多くの品種がつくられ各地に植栽された。そのため誰でも馴染みのある花木であり、市町の本となったり、童謡の「たき火」や「さざんかの宿」、「サザンカ」など演歌やポップスでも題材となることが多い。

<俳句や短歌への登場>

【季語：冬】 山茶花を雀のこぼす日和かな (正岡子規) 小鳥来る山茶花一つ花咲かせ (山口青邨)
佳き石のあれば山茶花散りおほふ (水原秋櫻子) 山茶花の咲くより散りてあたらしき (日野草城)
雲による御仏といふ床わきにいつきまつらひ山茶花の花 (伊藤左千夫) 山茶花を椿とくも草枕 (成田蒼虬)
さざんか、さざんか咲いた道。たき火だ、たき火だ。落ち葉焚き。あたろうか、あたろうよ。異聖歌 童謡「たき火」より

分布: 全国

ナガミヒナゲシ (ケシ科)

学名: *Papaver dubium*

別名: ひなげし, ポピー, 虞美人草, コクリコ

主な生育場所

路傍, 荒地, 空き地, 河川敷, 畦畔, 畑地, 草地, 樹園地など, 日当たりがよく乾いた場所なら里地の至所に見られる。貧栄養の環境でも生育するが, 肥沃な土地ほど群生しやすい。

特徴

越年草(一年草)。地中海原産の帰化植物。高さ20~60cmで全体有毛。根生葉は長さ20cmに達し, 茎につく葉も含め1~2回羽状に深く裂ける。朱赤色または淡紅色の4弁からなる径3~6cmの花を茎の先端に単生する。花後に円筒状の子房が2cmほどに伸び果実となる。熟すと上面の蓋がめくれ, 1,000以上の小さな種子がこぼれる。

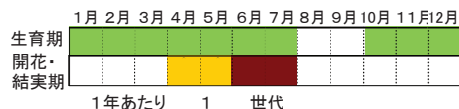


名前の由来: 近縁で鑑賞用のヒナゲシ(ポピー)に良く似ているが, 花後に丸い果実となるヒナゲシに対し, 細長い円筒状の果実をつけることから長実ヒナゲシ。

<農業との関係>

種子を多数つけ, 繁殖力が旺盛なことから, 畦畔だけでなく, 畑内や樹園地にも侵入し, 害草化している。花がきれいいため, 花後を待って草刈りなど行ってもすぐに結実種子がこぼれていることも多く, まん延を助長している面もある。また他の植物の生育を阻害するアレロパシー成分を含むことも報告されており, 麦畑などでは駆除が難しい難防除な雑草となる場合もある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 園芸用のヒナゲシは良く似ているが果実の形が球形~長球形で円筒状にならない。栽培が禁止されている「ケシ」は全草が無毛。同様に栽培が禁止されるアツミゲシには剛毛が生えるが, 葉は深く切れ込むだけで, 果実は長球形となる。

<一言うちく>

葉や茎を折ると乳白色あるいは黄色の乳液が出ますが, アルカロイドが含まれており素手で触るとかぶれることがあり, 除草する際には要注意です。このアルカロイドには麻酔作用があり古代ギリシャでは麻酔薬に使われたそうです。ただし, ケシのように阿片の成分は含まれていません。

<人との関わり合い>

日本には鑑賞用ではなく輸入穀物に混じって渡来したとされる。園芸種のヒナゲシに似ることから駆除せずに花を楽しむことも多く, 種子生産を助長している一面もある。また, 大量に生産される小さな種子は風による飛散だけでなく車のタイヤや靴裏などに付着して分散していることも考えられ, 人為によってまん延化を招いているといえよう。有毒なので食用にはならないが, ヨーロッパでは古くから, 睡眠導入, 鎮静, 止痛成分を含む薬草として利用してきた。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】※ヒナゲシ全般

箭哉虞美人草の薔哉 (正岡子規) 花芥子の雨に堪へつゆがみたる (高浜 年尾)

ああ草月 仏蘭西の野は 火の色す 君もコクリコ われも鑑罌粟 (与謝野 晶子)

ひなげしのちる日のほどを歌の選 (三好達治) ポピー野に咲けば加州の春といふ (山口 青邨)



花弁中心部の子房が花後に円筒状の果実となる



有毛で羽状に細かく切れ込む葉 開花前のつぼみは下を向く

分布: 全国

ギンギシ (タデ科)

学名: *Rumex japonicus*

別名: 牛草, 牛の葉大王, 陸蓴菜, 渋クサ, シノネ, イヌスイバ, ウマズイコ

主な生育場所

畑や樹園地, 畦畔, 休耕地, 荒地, 路傍, 野原, 河原などに普通に生育する。やや湿った環境を好む。耕起など土壌の攪乱が少ない場所に多く, 収穫後, 翌春まで耕さない水田にも見られる。

特徴

直立する高さ60~100cmほどの多年草。黄色で太い直根が地中深く伸びる。茎は太く中空で縦に筋が多い。根生葉は長い柄を持ち長楕円形で10~25cm, 基部は心形か丸い。上部の葉は小型で柄がない。花序は円錐状で多数の小花が茎に輪生。果実には翼状の3枚の花被片が残り, 縁に粗い鋸歯がある。中肋は瘤状に膨れる。

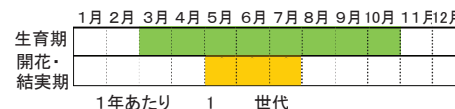


名前の由来: 茎や葉穂をすり合わせるとギンギシと音が鳴る。たくさんの果実をつけた穂を振るとギンギシと鳴るから, など諸説あるがはっきりとはしない。

<農業との関係>

ギンギシの根は太く地下深く伸び, 種子生産数も多いため, 繁殖力が非常に強く, 畑や果樹園に定着すると害草化する。刈り取りに強く, 何度も再生してくるため, 畦に生えたとなかなか除去しにくい。農地内ではトラクターなどでいねいな耕起を短期間に複数回行うことで植物体が消耗し, 低密度まで抑制できる。頻繁に耕起できない畦畔などでは, 除草剤を用いた防除が有効となる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> スイバ(2013年3月号で紹介)は葉の基部が矢じり状にとがり, 茎は赤みを帯びる。外来種のエゾノギンギシは葉の中脈が赤みを帯びやすく, 果実花被片の縁が棘状となる。同じく外来種のナガバギンギシの果実花被片の縁は全縁。

<一言うちく>

ギンギシは全国各地でみられる在来の雑草ですが, 最近では海外起源のナガバギンギシやエゾノギンギシ, アレチギンギシなど外来種が脅威し, ギンギシそのものを見かけることが少なくなりました。外来種はギンギシとよく似ていますが, 果実の花被片の縁を見ると見分けやすいです。

<人との関わり合い>

東北地方では, 若芽を地際から摘み取り, 袋口のさやを取り除き軽く茹で水に晒し, お浸しやマヨネーズ和え, 汁の実などに利用する。透明なぬめりと酸味を楽しめることから, 「オカジュンサイ(陸蓴菜)」と呼ばれる。乾燥後, 茹で戻しても食べられる。地上部が枯れた後に掘り上げた根を天日干したものは, 生薬「羊蹄」で, アントラキノン誘導体などを含み, 便秘薬となる。また, 煎じた汁はいんきん, たむし, 水虫などの皮膚病に効くとされる。染料にも用いられ, 鉄媒染で鼠色に染められる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春(ぎしぎし), 夏(羊蹄の花)】

羊蹄に石摺り上る湖舟かな (杉田久女) 羊蹄花(ぎしぎし)や飯橋長き干拓地 (山田みづえ)

羊蹄は世に多がほの枯野かな (野澤凡兆) ぬき出でぎしぎし高し小田の畦 (高瀬夢生)

音たてて流るる水は春の水ぎしぎしの紅の芽を浸しゆく (土屋文明)



葉は長楕円形, 柄は長く基部は丸みを帯びる。



果実は中央部が瘤状に膨らみ, 花被片の縁には粗い鋸歯がある。

分布：全国

ユキノシタ（ユキノシタ 科）

サキシフラガ ストロニフェラ
学名：Saxifraga stolonifera

雪の下

別名：ゴジソウ、ミミダレグサ、イドクサ、鴨足草、虎耳草

主な生育場所

山裾や谷川沿いの湿った場所や湿った石垣や岩場に生える。木陰やあまり日の当たらない環境を好む。庭先や生け垣の下に栽培されることも多い。日陰に強いことから坪庭で使われることも多い。

特徴

高さ20～50cmほどになる多年草。根元から走出枝を伸ばし、小苗をつける。緑が浅く切れ込んでいる葉はほぼ円形、表面に長めの毛が密生し、表面は葉脈に沿って白色の斑が入る。初夏に花茎を伸ばし円錐花序に左右相称形の5弁の白い花を多数つける。花は上部の小型の卵形の3弁と大きくて細長い下部の2枚からなる。

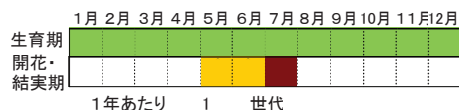


名前の由来：常緑の葉に出る白斑を雪に見立て、その下に緑の葉があることから、また、積雪期でも枯れずに緑の葉が残ることから、白い花弁を降る雪に喩えた、など諸説ある。

<農業との関係>

半日陰の環境を好むので農地に侵入することはほとんどないが、日の当たりにくい湿っぽい畔や手入れの悪い樹園下などに見られることがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> よく似た花をつけ、山地の湿気のある岩場などに生えるハルユキノシタやジンジソウ、ダイモンジソウの葉には白斑が入らない。人里に生えるカキドオシも葉が似て地面を這うが、茎の断面は四角く紅紫色の花を葉腋につける。

<一言うちく>

ユキノシタの若い葉の裏はもともと白色ですが、やがて紫色から暗紅色に変わっていきます。これは葉を透過する太陽光を暗い色で反射させ、もう一度光合成に用いるためとされ、暗い場所でも生育できるユキノシタの「生活の知恵」とも言える工夫なのです。

<人との関わり合い>

被陰にも強く、花も葉も特徴的なことから、古くから鑑賞用に栽植されてきた。また、食用にもなり、清潔な柔らかい葉を摘み、丁寧に水洗い後、葉の下面だけコロモをつけて天ぷらにすると葉の表面の模様が美しく残り、かつ美味しく食べられる。また、さっと茹でて水に晒し、ゴマ和えや辛子和えで味わう。葉は民間薬としても利用され、開花期に採取した葉を日干しし、火であぶって軟らかくしたものをやけどや腫れ物、しもやけに用いられる。煎じ液は下痢や胃もたれなどにも効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】※鴨足草、虎耳草 いずれも ゆきのした と読み、多数、詠まれてきた。卵の花の散り残りけるは鴨足草(ゆきのした) (尾崎放哉) 鴨足草雨に濁らぬ泉かな (飯田蛇笏) 花散るやひそかにそだつ雪の下 (中村汀女) 虎耳草葉の紋を葉の紋に (山口青邨) 日さかりの花や涼しき雪の下(春舟) 夕焼は映らず白きゆきのした (渡邊水巴)

分布：関東・北陸以西

ホテイアオイ（ミズアオイ 科）

エイクホルニア クラスシベス
学名：Eichhornia crassipes

布袋葵

別名：ホテイソウ(布袋草)、ウォーターヒアシンス

主な生育場所

ため池や湖沼、流れの穏やかな水路、河川のなかで構造物などに囲まれて流れがほとんどない淀みなどに見られる。湿田由来の休耕田に生育することもある。鑑賞用に庭池や鉢でも栽培される。

特徴

南米原産の水面に浮かぶ多年生浮遊植物。葉は水面から立ち上がり高さ10cm程度からときに1mを超える。葉柄はスポンジ状に膨らみ浮き袋となる。走出枝を伸ばし子株を形成する。夏に花柄を伸ばし淡紫色の径3cmほどの6弁花をつける。花後に種子もつけるが、日本では結実しにくいとされ、主に越冬株や萌芽で増殖する。

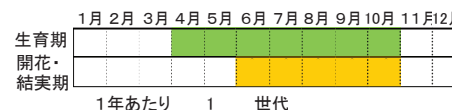


名前の由来：浮き袋の機能をもつ丸く膨らんだ葉柄を七福神の一人である布袋尊の膨らんだ腹に見立てて、またカンアオイの仲間のような卵心形の葉であることから、布袋葵。

<農業との関係>

ときに水路等から水田に侵入することがあるが、水田内で繁茂したり害草化することはほとんどない。灌漑水源のため池や水路に繁茂し、取水時に取水口に溜まるなどして取水量の低下を引き起こしたり、排水時に大量に水利施設に押し寄せることで、樋門の開閉操作に支障をきたしたりする。物理的にすくい上げるしかなく、駆除は困難。冬期に大量に枯死し腐敗すると水質の悪化も招く。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じミズアオイ科のミズアオイやコナギ(2020年7月号で紹介)は葉柄が膨らまず葉の先はとがる。ため池などでよく見られるヒシの葉柄もホテイアオイと同様に膨らみ浮き袋状となるが、葉は菱形で縁に鋸歯がでる。また花は白く小さい。

<一言うちく>

英名でウォーターヒアシンスと呼ばれるほど花は美しく、鑑賞用として世界各地に持ち込まれましたが、繁殖力が強く短時間で水面を覆い尽くし利水や漁業の大きな障害となったため「青い悪魔」として嫌われています。在来の水草や水生動物への悪影響も懸念される困った水草なのです。

<人との関わり合い>

日本には江戸時代後期に持ち込まれ、浮世絵にも金魚とともに題材にされるなど、鑑賞用として今でもホームセンターなどで販売されるほど身近な水草である。一方で、野外で繁茂すると産業や生態系への影響が大きく、「重点対策外来種」として生態系被害防止外来種リストに記載される。吸肥力が高く水質浄化に役立っていることも試みられているが、繁殖したホテイアオイの回収・処理にコストがかかるため現実的ではない。そのほかに、バイオ燃料や家畜の餌などとしての利用も模索されている。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】布袋草喰う牛 探餌の鷺伴い (伊丹三樹彦) 布袋草は膨らむ緑原爆忌 (佐藤愚房) 布袋草金魚のために育てたる (山口誓子) 水牛の分けゆく布袋葵かな (館山 實) 腐つても沈まざる舟布袋草 (阿波野野歌) 布袋草咲かせ水槽何もあらず (清崎敏郎) 神が作る浮袋の詩布袋草 (山口青邨) 萬葉の海濃縮す布袋草 (百合山羽公)



花弁は6枚で、上部の花弁は幅広く黄色い斑紋



ため池を覆い尽くすほど繁茂したホテイアオイ

分布：全国

ミズオオバコ (トチカガミ科)

オッターリア アリスモイデス
学名: *Ottelia alismoides*

水大葉子

別名：水車前草(みずしやぜんそう)、水朝顔(みずあさがお)、龍舌草

主な生育場所

ため池や湖沼、水路、水田に生育する。湛水状態が長く続く休耕田にもみられることがある。富栄養で比較的浅い水域を好む。光が良く届く水深の深いため池では、大型化した草姿がみられる。

特徴

沈水性の一年草。葉は根生し、有柄。葉の形と大きさは変異に富み、長さは3-40cm程度、幅も1-18cm程度となる。水面に花茎を伸ばし、3弁の紅色がかった白い花をつける。花後に花茎は縮んで水中に没する。果実は長さ2-5cmで多数のひだを持つ楕円形。種子が熟すと果実は三裂し、水面に種子を散布する。



名前の由来：広卵形で平行脈の出る葉が、道端植物のオオバコの葉によく似ており、水中に生育する水生植物であることから、水オオバコ。

<農業との関係>

かつては全国の水田に普通にみられる主要な雑草であったが、除草剤に弱い。ため池、除草剤の普及により、また排水改良等による乾田化の促進などにより、水田から激減した。ため池も埋め立てられたり、水質の悪化等により、生育環境が悪化している。現在では無農薬の水田や谷津田、棚田などの良好な環境が残っている水田にみられるにとどまっている。

<生活史> 関東地方の例(目安)



水中で根生する姿もオオバコを想起させる

<類似種> 同じく沈水植物で根生するスプタの葉は幅1cm未満の線形で、平行脈も持たない。また陸上植物のオオバコは水中に生えず、葉の質もミズオオバコと比べ厚い。

<一言うんちく>

ミズオオバコは種内変異の多い植物として知られ、水田では赤褐色の葉で5cm程度に小型化する一方、ため池などではキャベツと見違えるほど大型化します。また、花茎に複数の花が咲くタイプもあり、別種とされていましたが、現在では種内の形態の一つと考えられています。



紅色がかった3弁の白い花

<人との関わり合い>

水田での減少など、全国的に見られることが少なくなっており、環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類となっているほか、北海道などを除く43都府県で絶滅危惧指定を受けている。東南アジアや沖縄地方では葉を食用とする。また、全草を乾燥させたものは、喘息、咳、水腫、できもの、むくみ、やけどなどに用い、鎮咳、去痰、解熱、消腫、利尿作用がある。できものややけどなどには粉末にしたものを患部に塗布する。

<俳句や短歌への登場>

【季語：晩夏】

季語は設定されているようだが、詩歌への登場はまだみない。

分布：本州・四国・九州

ヤブツルアズキ (マメ科)

ヴィグナ アンガラリス
学名: *Vigna angularis*

ヤボネンシス
var. *nipponensis*

藪蔓小豆

別名：オマンアズキ

主な生育場所

やや草丈の高い草地や荒地、河原、路傍、林縁、休耕田などで、他の植物に絡みついて生育する。よく手入れされた草丈の低い草地にはあまり見られない。

特徴

茎が他の植物に絡みつきながら、3m以上にも伸びる1年生のツル植物。茎や葉には粗い長毛がある。葉は3小葉からなり、小葉は狭卵形で浅く3裂する。初秋に葉腋に総状に2-10個の花をつける。花は黄色の蝶形花だが、左右非対称で筒状の花弁は回転するようにねじれる。果実は線形で垂れ下がり、種子は長さ3-5mmほど。



名前の由来：栽培する小豆(アズキ)に似るが、ツル性で、草丈の高い藪などによく生える野生のアズキであることから、藪(やぶ)蔓(つる)アズキ。

<農業との関係>

休耕田や耕作放棄地に生育することはあるが、よく手入れされている畦畔や畑には見られず、畑内で問題となることは少ない。ただ、ダイズ畑などで繁茂して害草化する場合がある。豆果は熟すと弾けて種子を飛ばしやすく、果実が熟す前の防除が重要。

<生活史> 関東地方の例(目安)



旗弁は左右非対称で筒状の花弁はねじれる

<類似種> 日当たりのよい草地に生え、良く似た左右非対称の黄色い花をつけるノアズキの葉には切れ込みがなく、やや菱形に近い。また豆果はヤブツルアズキの線形に対し、ダイズのように幅広い。

<一言うんちく>

現在、栽培されているアズキはヤブツルアズキと同じ遺伝的特徴を持つことから、ヤブツルアズキはアズキの祖先種と考えられています。縄文遺跡からは多くの種子が出土し、それらは中国や韓国の遺跡より古いことから、日本起源でヤブツルアズキからアズキが生まれたのかも知れません。



細長く伸びる豆果
種子はアズキよりも小さい

<人との関わり合い>

種子は栽培種のアズキと比べるとかなり小さいが、アズキと同様に利用できる。とくに砂糖を入れて煮込むと汁粉や餡になり、アズキよりも豆の香りがよく美味とされる。古来から、居住地の近くのヤブに生えていたヤブツルアズキの豆を煮込んだときのおいしさを縄文人たちは知っており、栽培化が進んだと容易に想像できる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】(小豆) ※ヤブツルアズキそのものを詠った句は見当たらないので、以下は「小豆」の句を紹介。

水郷や小豆も草の実の数に (原 月舟) 瞬けば小豆こぼる彼岸かな (橋石 和栲)

日に弾く小豆の莢のうす煙 (野見山 朱鳥) つぎ當たる農婦のズボン小豆選る (富安 風生)

嬉しさや大豆小豆の庭の秋 (村上 鬼城) 瞬けば小豆こぼる彼岸かな (橋開石 和栲)

分布：北海道を除く全国

キツネノマゴ (キツネノマゴ科)

ユスチキア ブロクムベンス
学名: *Justicia procumbens* var. *procumbens*

狐の馬子

別名：カグラソウ、メグスリバナ、カヤナ

主な生育場所

路傍や空き地、田畑の畔、水路やため池の法面など日当たりのよい明るい草に普通にみられる。湿地わきの草原などやや湿った環境を好むが、頻繁に冠水するような場所には見られない。

名前の由来：花が密についた花穂は深く5裂した萼がよく目立ち、花後にはふさふさと小さな狐の尾のように見えるから、唇花の丸く大きな下唇が狐の顔のよう、とか諸説あるがはっきりしない。

特徴

高さ10～40cmほどの小型の一年草。茎には縦の稜があり短毛が生える。根元はやや地面を這い、よく分枝する。葉は対生し、長さ2～4cmほど。両面に毛がある。茎先に長さ7mmほどの淡紅紫色の唇花を密につける。下唇には白い斑紋。萼や苞の縁には白色の長毛があり、萼は深く5裂。さく果には卵円形の種子が4つ入る。



<農業との関係>

樹園下に見えることがあるが、草丈が低いので強雑草とはなりにくい。畦畔に生え、何回か刈取りに会うと分枝が増え、花穂も多くなる。

<生活史> 関東地方の例(目安)

生育期	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
開花・結実期												
1年あたり												
世代												

<類似種> 琉球列島には全体小振りで葉がやや厚い、キツネノヒマゴが生育する。ヒユ科のヒナタイノコヅチも日当たりのよい路傍に生え葉は対生するが、キツネノマゴよりも大型で90cmほどになり、花は緑色。シソ科のヒメジソの葉には鋸歯がある。

<一言うち>

キツネノマゴの花言葉は「この上なくあなたは愛らしい」「可憐美の極致」「女性の美しさの極致」。数cmほどの花穂に、まばらに咲く小さな花ですが、唇型の花弁の中央には星の形のようにも見える白い模様が見え、確かに奥ゆかしい可憐さを感じることができるのではないのでしょうか。

<人との関わり合い>

平安時代の「本草和名」に生薬名爵状(しゃくじょう)として記載されるほど、薬草としての歴史は古い。刈り取った全草を干したものを煎じて飲むと、鬱病や解熱、咳止めに良いとされる。また、入浴剤にすれば腰痛や神経痛、リュウマチに良いとも。葉の絞り汁は充血を抑え、気分を爽快にさせる効能も有する。清朝時代の中国では目薬にも利用していた。また、若葉は茹でて和え物やお浸しにして食べられる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：設定はない】

この草も里地にありふれた草だが、これまで俳句や短歌で扱われてきたことはほとんどない。「狐の孫」という6文字の名前も俳句等で扱いにくい理由のひとつかも知れない。

分布：全国

ヌカキビ (イネ科)

パニカム ビスルカツム
学名: *Panicum bisulcatum*

糠黍

別名：ミコスズ

主な生育場所

水田内、畦畔、休耕田、荒地、湿地、河川敷や水路などに普通にみられる。やや湿った環境を好む。水田周辺に多いが、陰地で湿っぽい畑や樹園地にもみられることがある。

名前の由来：キビ(黍)のような種子(小穂)をつけるが、キビの花穂のように密にぎっしりと小穂がつかず、花序の先の側枝にまばらに小さな小穂がつく様子を糠に喩えて糠黍(ぬかきび)。

<農業との関係>

湿った休耕田では群落を形成するが、水田内には時折散発する程度である。除草剤や中耕除草などで容易に防除できるが、初期除草に失敗し、中干し以降も草取りに入らないような水田では、多発し水稲と競合する場合もある。また、転作大豆時にも畝間の主要雑草となることがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)

生育期	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
開花・結実期												
1年あたり												
世代												

<類似種> 外来種のオオクサキビは同じような環境に生え、形態的にもよく似ているが、花序の枝が斜めに出て垂れず、枝に密着した小穂を密につける。また種子は披針形でヌカキビの種子よりも大きい(約2.5mm)。

<一言うち>

雑穀としてのキビはインド原産とされ、弥生時代ごろの渡来と考えられています。国内のキビ属には在来種のヌカキビ、海岸に多いハイキビのほか、外来種のオオクサキビ、ギネアキビ、ニコゲヌカキビなどがあります。キビと名につくタカキビやサトウキビは、キビ属ではありません。

<人との関わり合い>

食用のキビがぶつくらした3mmほどの小穂をつけるのに対し、ヌカキビの小穂は小さく、花序あたりもまばらで効率的に種子を集めることができないため、これまで食用として利用されてきた事例は聞かない。また、キビの種子には下痢や胃痛などに対する効果があり、中国では薬用に利用されるが、ヌカキビの種子の利用は報告されていない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：設定はない】 ※黍：秋

この草も里地にありふれた草だが、これまで俳句や短歌で扱われてきたことはほとんどない。

【参考：黍】

いにしへの郡郷に黍熟れにけり(加藤秋郎) 夕風の底遣ふけむり黍を焼く(石川桂郎)



左：オオクサキビ(小穂が枝に密着) 右：ヌカキビ



左オオクサキビの小穂
右：ヌカキビの小穂

分布：東北以南

セイヨウヒイラギ (モチノキ科)

イレックス アクイフォリウム
学名: *Ilex aquifolium*

西洋柊

別名：クリスマスホーリー、ヒイラギモチ、セイヨウヒイラギモチ、ホーリー

主な生育場所

公園や庭園などで栽培される。単植だけでなく、生垣としても使われる。半日陰で腐食が多くやや湿っぽい土壌を好む。耐寒性はあるが、水点下が続く寒さが厳しい地域では育ちにくい。

特徴

ヨーロッパ中南部、西アジア及び北アフリカを原産で高さ6-8mほどになる常緑広葉樹。雌雄異株だが雌株だけでも結実する。光沢があり厚みのある葉は長さ5-12cm、幅2-6cmで互生。若い枝や葉縁には棘があるが、古い枝や葉には棘が少ない。花期は4-6月で白い4弁花を房状につけ、冬期に径6-10mmほどの果実が赤く熟す。

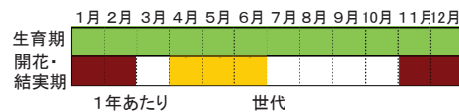


名前の由来：葉の縁がトゲ状にとがる在来種(ヒイラギ)の葉によく似た葉をつけるヨーロッパ原産の樹木であることから西洋柊。また別名のヒイラギモチは柊によく似たモチノキだから。

<農家との関係>

古代ローマでは、クロノス神とも同一視されローマ神話に登場する農耕神サトルヌスの木とされ、12月17日から23日にかけて行われるサートウルナーリア祭(農神祭)ではセイヨウヒイラギの枝を添えて贈り物を渡す風習があった。この風習をのちにキリスト教徒が真似るようになり、ヨーロッパではクリスマスに欠かせないシンボルとなったといわれる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



11月から2月ごろまで赤く熟した果実がみられる

<類似種> 在来種のヒイラギの葉は対生し、実は黒紫色に熟す。またヒイラギとキンモクセイの雑種であるヒイラギキンモクセイの鋸歯はあまり尖らず、結実もしない。なお、ヒイラギもヒイラギキンモクセイもモチノキ科でなくモクセイ科の樹木である。

<一言うんちく>

クリスマス装飾のシンボルによく利用されるセイヨウヒイラギですが、その花言葉には「神を信じます」「家族の幸せ」のほかに、「防衛」や「防衛」「将来の見通し」というものもあるようです。みなさんもセイヨウヒイラギの赤い実を眺めつつ、来年を予見してみてくださいはいかがでしょうか。

<人との関わり合い>

クリスマスになくなくてはならないセイヨウヒイラギは、キリストの足元から生まれた植物ともされ、葉の棘や赤い実はキリストの苦悩や流した血を象徴するとされる。また、ヒイラギと同様、棘のある葉は魔除けの効果もあるとされ、悪い妖精や悪魔がクリスマス期間に家の中などに入らないように家や店などにリースとして飾り付けられる。またクリスマス装飾のモチーフとしてもよく使われる。なお、赤い実にはサポニンが多く含まれ、食用には適さないが、白くて堅い材は、チェスの駒に利用される。

<俳句や短歌への登場>

※西洋柊は季語となっていないので、柊(冬の季語)、柊の花(晩秋の季語)が登場する句を紹介します。
柊を幸多かれと飾りけり (夏目漱石) 柊の花に晴れたクリスマス (榎山柑子)
柊の花の上の霜や神の留守 (松瀬青々) 柊の花の香とある安息日 (広瀬ひろし)
柊のこゑにならざるこゑ交す (高澤良一) 柊の花つめたさよ今朝の冬 (篠原温亭)

索引

ア行

アキノエノコログサ	47
アキノノゲシ	94
アゼトウガラシ	109
アメリカアゼナ	83
アメリカセンダングサ	37
アメリカフウロ	52
イチョウウキゴケ	90
イスガラシ	48
イスタデ	11
イスタヌキモ	66
ウツギ	91
ウマノアシガタ	18
ウラジロ	88
ウラジロチチコグサ	97
オオイヌノフグリ	15
オオオナモミ	49
オオジシバリ	80
オモダカ	10
オランダミミナグサ	28

カ行

カズノコグサ	38
カタバミ	34
カナムグラ	21
ガマ	12
カラムシ	32
カワラケツメイ	67
カントウヨメナ	59
キキョウ	99
ギンギン	114
キシヨウブ	81

キツネノマゴ	119
クコ	100
クサノオウ	42
クサネム	65
クズ	46
クログワイ	95
ゲンゲ	89
ゲンノショウコ	45
コウホネ	8
コセンダングサ	87
コナギ	98
コナスピ	72
コニシキソウ	92
コハコベ	30
コマツヨイグサ	105
コメツブツメクサ	73
コモチマンネングサ	43

サ行

ザクロソウ	56
サザンカ	112
サンショウモ	74
ジュンサイ	108
シロザ	35
シロバナサクラタデ	22
スイバ	29
スギナ	17
ススキ	36
スベリヒユ	9
セイタカアワダチソウ	68
セイヨウアブラナ	41
セイヨウヒイラギ	121
セリ	20

タ行

タガラシ	16
------	----



農村工学研究部門メールマガジン

農村の草花

記事・タイトル	配信No.	配信年月
初夏の木陰で咲く花は雪のごとし〜ユキノシタ〜	第145号	2022年6月
直立した茎に鈴なりに特徴的な果実をつけるおなじみの草には、いつのまにか仲間がいっぱい?〜ギンギシ〜	第144号	2022年5月
緑風に揺れるあの可愛らしいヒナゲシの花は、危険な侵略種〜ナガミヒナゲシ〜	第143号	2022年4月
寒風のなか、ひたむきに咲く冬の花〜サザンカ〜	第139号	2021年12月
いつの間にか衣服に貼り付いているまるで盗人のようなあの草は?〜ヌスビトハギ〜	第138号	2021年11月
お灸や草もち、薬用に大活躍。身近な有用植物〜ヨモギ〜	第137号	2021年10月
刈跡や畦畔で秋風に揺れる小さなトウガラシ?〜アゼトウガラシ〜	第136号	2021年9月
古池に浮かぶ小判のような水草はなんともつかみどころがない?〜ジュンサイ〜	第135号	2021年8月
藪の中でひっそりと咲く花の「隠された心」とは〜ヤブラン〜	第134号	2021年7月
この草の上なら転んで擦り傷をこさえても血が止まる!?〜チドメグサ〜	第133号	2021年6月
夜の路傍で月を見上げているあの草は?〜コマツヨイグサ〜	第132号	2021年5月
タンポポの変異?いえいえ、そっくりだけど別種の外来種です〜ブタナ〜	第131号	2021年4月
難を転じて福となす 来年度は人々が集い談笑し合える年になりますように〜ナンテン〜	第127号	2020年12月
ガーデニングなどでお馴染みのあの草は咳止めの薬草だった〜リュウノヒゲ〜	第126号	2020年11月
中国最古の薬物書にも登場し、今でも日常的に飲用するスーパー健康食品〜チャノキ〜	第125号	2020年10月
楊貴妃が愛し、あの名著にも登場する赤い実は不老長寿の薬〜クコ〜	第124号	2020年9月

「農村の草花 冬のオンライン一般公開2023 版」
 農研機構 農村工学研究部門
<https://www.naro.go.jp/laboratory/nire/>



タウコギ	79	ブタナ	104
タコノアシ	26	フデリンドウ	71
タチツボスミレ	51	ヘクソカズラ	75
タネツケバナ	40	ヘビイチゴ	62
チカラシバ	96	ホテイアオイ	116
チドメグサ	106		
チャノキ	101	マ行	
ツユクサ	7	ミズオオバコ	117
ツリガネニンジン	69	ミズハコベ	39
ツルボ	84	ミズマツバ	93
ツルマメ	86	ミズワラビ	23
ツワブキ	60	ミゾソバ	33
ドクダミ	19	ムラサキツメクサ	64
		メリケンカルカヤ	13
ナ行		ヤ行	
ナガミヒナゲシ	113	ヤエムグラ	63
ナズナ	27	ヤクシソウ	77
ナンテン	103	ヤナギタデ	85
ニリンソウ	61	ヤブカンゾウ	31
ヌカキビ	120	ヤブガラシ	82
ヌスビトハギ	111	ヤブツルアズキ	118
ネジバナ	53	ヤブラン	107
ノミノフスマ	14	ユキノシタ	115
		ヨモギ	110
ハ行		ラ行	
バイカモ	44	リュウノヒゲ	102
フユノハナワラビ	78		
ハハコグサ	50	ワ行	
ハボタン	70	ワレモコウ	25
ヒガンバナ	76		
ヒツジグサ	55		
ヒナタイノコヅチ	24	(2023年1月 メールマガ第151号時点)	
メヒシバ	57	植物名に色が塗ってあるものが前回より追	
ヒメジソ	58	加箇所	
ヒルガオ	54		